

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第447集

ごりんどう
五輪堂遺跡発掘調査報告書

県営ほ場整備金流川地区工事関連遺跡発掘調査

岩手県一関地方振興局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第447集
五輪堂遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行(位置)	誤	正
15	4 凡例	最後の一行が抜けている また、▽は断面の位置を示している。	
18	22	6基(SD15・17・22～24・27)	6基(SK15・17・22～24・27)
21	6	接合・復元したものである。	接合・復原したものである。
40	最後一行	堀跡の可能性が高い	堀跡の可能性も高い
81	28	各一枚	各1枚
105	7	比較検討を行われる	比較検討が行われる
122	写真図版名(右下)	貼床後完掘	掘り方完掘

ごりんどう

五輪堂遺跡発掘調査報告書

県営ほ場整備金流川地区工事関連遺跡発掘調査



南から



北から

巻頭カラー1 航空写真



終了全景（北東から）



終了全景（南東から）



完掘状況



北コーナー付近より東 (W→)



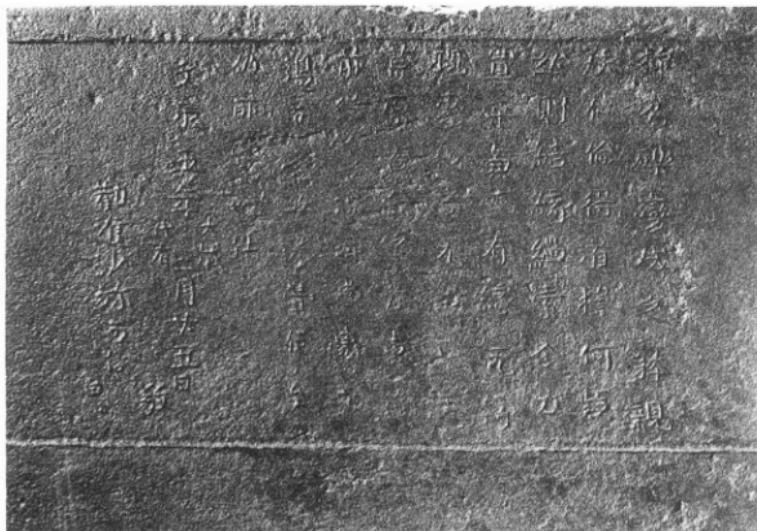
断面A-A' (W→)



断面C-C' (W→)



卷頭写真1 鉄五輪塔地輪 正面（花泉町教育委員会提供）



卷頭写真2 鉄五輪塔地輪 左側面（花泉町教育委員会提供）



卷頭写真3 鉄五輪塔地輪 右側面（花泉町教育委員会提供）

序

四国四県に匹敵する広大な面積を有する岩手県は、埋蔵文化財の宝庫として知られており、その包蔵地の数は1万箇所を超えるとも言われております。これら先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは我々に課せられた責務であります。

一方、農業基盤整備や幹線道路網の整備など、社会資本の充実を図ることもまた行政上の大変な施策であり、そのため埋蔵文化財の保存・保護のもとに調整・調和のとれた地域開発を推し進めることが今日的な課題であります。

このような視点から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会生涯学習文化課による調整と指導のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅していく遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本書は、県営は場整備金流川地区整備事業に関連して、平成14年度に行われた県南の花泉町に所在する五輪堂遺跡の調査結果について収録したものであります。

調査の結果、平安時代から近世まで多時期に亘る遺構が検出され、中でも平安時代の堅穴住居を中心とする集落跡であることが明らかになりました。また、方形状に区画された中世の堀跡が発見され、中から常滑焼の陶器片（13世紀代）も出土しております。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に協力とご支援を賜りました岩手県一関地方振興局農林部農村整備室、花泉町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申しあげます。

平成15年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例　　言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡花泉町津字五輪堂126番地ほかに所在する五輪堂遺跡発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、呉宮は場整備金流川地区工事関連事業に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課・岩手県一関地方振興局農林部農村整備室の協議を経て、㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下埋蔵センターと略称）が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 今回の発掘調査による成果は平成14年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第423集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」及び、現地説明会（平成14年10月27日）にて公表してきたが、本書が公式な報告書であるので、上記の刊行物との違いがある場合は、現時点では本書が正しいものとする。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の追跡略号は、以下のとおりである。

遺跡登録台帳番号……O E 38-2093

追跡略号……………G R D -02

5. 野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。

調査期間　平成14年6月17日～10月31日

調査面積　4,576m²

担当者　島原弘征・太田代一彦

6. 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

整理期間　平成14年11月1日～平成15年3月31日

担当者　島原弘征・太田代一彦

7. 本報告書の原稿執筆は、第1章を岩手県一関地方振興局農林部農村整備室、付録1・2を分析担当者、他を調査担当者が行い、島原以外の担当者が執筆した部分の文書には執筆者名を記している。編集は島原が行った。

8. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。

座標原点の測量……㈱一瀬設計

空中写真……………東邦航空㈱

9. 自然科学関連の分析鑑定と保存処理は、次の方々と機関に依頼した。（敬称略）

火山灰分析……古環境研究所

樹種同定………パリノ・サー・ヴェイ

石質鑑定………花崗岩研究会

炭化材同定………早坂松次郎（木炭協会）

鉄製品保存処理………㈱ニッセイ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センター

10. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。（敬称略・順不同）

花泉町教育委員会・井上喜久男・後藤洋・遠藤栄・及川剛・工藤雅樹・今野公顕・斎藤穂・

菅原計二・鈴木真之・鈴木琢也・丹治篤嘉・中野晴久・藤澤良祐

11. 野外調査にあたっては、花泉町内の方々に多大なるご協力をいただいた。

12. 十刷観察の土色は、「新版標準十色帳」（小山正忠・竹原秀雄：1992）によった。

13. 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅名と縮尺を記している。

14. 本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管・管理している。

目 次

巻頭カラー

序

例 言

【本 文】

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境	2
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	2
第2節 遺跡の概観	2
第3節 基本構序	2
第4節 周辺の遺跡	7
第Ⅲ章 調査の概要と整理方法	13
第1節 調査経過	13
第2節 野外調査の方法	13
第3節 室内整理の方法	14
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	18
第1節 A・D区の遺構	20
第2節 B・C区の遺構	69
第3節 山上遺物	79
第Ⅴ章 まとめ	100
第1節 遺構・遺物	100
第2節 要約	105
付編1 岩手県五輪堂遺跡の火山灰分析	112
付編2 五輪堂遺跡から出土した木製品の樹種	115
報告書抄録	
職員一覧	

【図 版】

第1図 岩手県全図	3	第34図 S D38・39・42・49溝跡	61
第2図 遺跡の位置図	4	第35図 A区柱穴状土坑(1)	62
第3図 周辺の地形と調査範囲	5	第36図 A区柱穴状土坑(2)	63
第4図 基本上層柱状図	6	第37図 A区柱穴状土坑(3)	64
第5図 周辺の遺跡分布図	10	第38図 A区柱穴状土坑(4)	65
第6図 遺構配置図	16	第39図 B・C区遺構配列図	68
第7図 凡例	17	第40図 S K28上坑	70
第8図 A・D区遺構配置図	19	第41図 S D43・44・45・47・48溝跡	71
第9図 S I01堅穴住居跡(1)	22	第42図 S D50,51,52A・B,53,54A・B、 55溝跡(1)、C・D区柱穴状土坑	72
第10図 S I01堅穴住居跡(2)	23	第43図 S D50,51,52A・B,53,54A・B、 55溝跡(2)	73
第11図 S I02堅穴住居跡(1)	24	第44図 B区柱穴状土坑(1)	76
第12図 S I02堅穴住居跡(2)	25	第45図 B区柱穴状土坑(2)	77
第13図 S I03堅穴住居跡・S K11土坑	27	第46図 遺構内出土遺物(土器1)	83
第14図 S K I01堅穴状遺構	28	第47図 遺構内出土遺物(土器2)	84
第15図 S K I03堅穴状遺構	29	第48図 遺構内出土遺物(土器3)	85
第16図 S K I05・06堅穴状遺構	31	第49図 遺構内出土遺物(土器4)	86
第17図 S B01・03掘立柱建物跡	32	第50図 遺構内出土遺物(土器5)	87
第18図 S B04・05・07掘立柱建物跡	34	第51図 遺構内出土遺物(土器6)	88
第19図 S A02柱穴列	35	第52図 遺構内出土遺物(土器7)	89
第20図 S E01井戸跡、 S K15・17・23・24墓壙	37	第53図 遺構内出土遺物(土器8)	90
第21図 S K22・27墓壙、S K01・05・07・08・ 12・13・14土坑	39	第54図 遺構内出土遺物(土器9)	91
第22図 S K18・19・21・26・29・30・31・33土坑	43	第55図 遺構内・外出土遺物 (陶器・金属・木製品)	92
第23図 S D19掘跡(1)	44	第56図 遺構内・外出土遺物(石器)	93
第24図 S D19掘跡(2)	45	第57図	106
第25図 S D01・02A・B・C・D・02E(1)、03溝跡	48	第58図 古代の遺構	107
第26図 S D02A・B・C・D・E溝跡(2)	49	第59図 中世の遺構	108
第27図 S D02D(3)・04溝跡	50	第60図 遺跡周辺の現状	109
第28図 S D07A・B・08溝跡	51	第61図 五輪堂周辺の地籍図(1)	110
第29図 S D10A・16溝跡	53	第62図 五輪堂周辺の地籍図(2)	111
第30図 S D10B・15・18A・B・20溝跡	54	図版1 五輪堂遺跡の木材	117
第31図 S D14・21溝跡	55	図版2 五輪堂遺跡の炭化材	118
第32図 S D23・24・30・32・41溝跡	57		
第33図 S D31・34・35溝跡	59		

【表】

第1表 周辺の遺跡一覧表	11	第11表 土器観察表	94
第2表 S B01柱穴観察表	30	第12表 金属・木製品観察表	98
第3表 S B03柱穴観察表	33	第13表 石器観察表	99
第4表 S B04柱穴観察表	33	第14表 壴穴住居跡一覧表	101
第5表 S B05柱穴観察表	33	第15表 挖立柱建物跡一覧表	101
第6表 S B07柱穴観察表	35	第16表 草塙一覧表	102
第7表 S A02柱穴観察表	36	第17表 草塙山上古錢一覧表	102
第8表 A区柱穴状土坑観察表	66	第18表 井戸観察表	102
第9表 B区柱穴状土坑観察表	78	第19表 土坑一覧表	102
第10表 C・D区柱穴状土坑観察表	78	第20表 堀跡・溝跡一覧表	103

【写真図版】

写真図版1 航空写真・調査終了全景	121	写真図版20 溝跡(4)	140
写真図版2 S I 01堅穴住居跡(1)	122	写真図版21 溝跡(5)	141
写真図版3 S I 01堅穴住居跡(2)	123	写真図版22 溝跡(6)	142
写真図版4 S I 02堅穴住居跡(1)	124	写真図版23 溝跡(7)	143
写真図版5 S I 02堅穴住居跡(2)	125	写真図版24 溝跡(8)	144
写真図版6 S I 03堅穴住居跡、 S K I 03堅穴状遺構	126	写真図版25 溝跡(9)	145
写真図版7 S K I 01堅穴状遺構	127	写真図版26 溝跡(10)	146
写真図版8 S K I 05・06堅穴状遺構	128	写真図版27 溝跡(11)	147
写真図版9 S B01・07掘立柱建物跡	129	写真図版28 溝跡(12)	148
写真図版10 井戸・草塙(1)	130	写真図版29 溝跡(13)	149
写真図版11 草塙(2)	131	写真図版30 遺構内出土遺物(土器1)	150
写真図版12 土坑(1)	132	写真図版31 遺構内出土遺物(土器2)	151
写真図版13 土坑(2)	133	写真図版32 遺構内出土遺物(土器3)	152
写真図版14 土坑(3)	134	写真図版33 遺構内出土遺物(土器4)	153
写真図版15 缘跡(1)	135	写真図版34 遺構内出土遺物(土器5)	154
写真図版16 缘跡(2)	136	写真図版35 遺構内出土遺物(土器6)	155
写真図版17 清跡(1)	137	写真図版36 遺構内外出土遺物(土器7)	156
写真図版18 清跡(2)	138	写真図版37 遺構内外出土遺物 (木・金属製品)	157
写真図版19 清跡(3)	139	写真図版38 遺構内外出土遺物(石器)	158

第Ⅰ章 調査に至る経緯

五輪堂遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）金流川沿岸地区の施工に伴い、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、西磐井郡花巻町涌津地内の247haの地区で、現況の水田は昭和30年代に10a区画に整備されたものの、区画形状が小さいうえに農道が狭小なため、農地の流動化や農産物の輸送、大型機械の搬入に支障を来している状態であった。それらの阻害要因を除去し、高生産性農業の確立を図るために大区画ほ場の整備を実施することとして、平成8年度に新規採択されたものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成7年9月7日付け一地上改第79号により岩手県一関地方振興局農林部長より岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をし、平成7年10月4日付け教文第609号の内答で、工事範囲内に五輪堂遺跡が含まれていることが確認されたことに始まる。

分布調査結果に基づき岩手県一関地方振興局農林部農村整備室では、平成13年10月24日付け一農整第440号で花巻町教育委員会に試掘調査を依頼した。依頼を受けた花巻町教育委員会では、平成13年10月29日～11月20日に試掘調査を実施し、その結果、発掘調査が必要なことが判明し、平成13年12月12日付け13花教生第174号でその旨の回答があったものである。

(岩手県一関地方振興局農林部農村整備室)

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の地形

五輪堂遺跡は、岩手県花泉町涌津字五輪堂126番地ほかに所在し、北緯38度48分20秒、東経141度11分22秒付近に位置する。JR東北本線花泉駅から南南東約2.6km、金流川右岸の段丘上に位置する。

花泉町は、岩手県の最南端に位置し南側は宮城県と隣接する、人口約16,000人の県境の町である。北側は一関市・川崎村、東側は藤沢町、南側は宮城県登米郡東和町・中田町・石越町、西側は宮城県栗原郡若柳町・全成町と隣接している。奥羽山脈と北上山地・阿武隈山地の列との間にある低地帯には、丘陵と平野が交互に広がりを見せており、その広がりは仙台平野まで続いている。花泉町を含む一関付近は丘陵が発達する地域で、磐井丘陵が奥羽山脈側のみならず、東端部が北上山地西端部に接するほど発達し、北上盆地と仙台平野とを南北に分断している。磐井丘陵を開析した磐井川は、磐井丘陵北側の須禪寺峠谷入口付近で北上川に合流し、同じく、花泉町のはば中心を流れている金流川は、磐井丘陵南側の大泉峡谷付近で北上川に合流し、それぞれその流域に段丘地形を形成し、現在の水系を出現させた。北上川中流域沿岸における模式的な段丘区分では、本遺跡が立地する段丘は花泉段丘にあたり、金流川によって形成されたものである。この段丘は北上川中流域における金ヶ崎段丘に対比される。

遺跡周辺の地質は、新第三紀以降に形成されたもので、その地質は古第二紀までに形成された基盤を埋積し、土に凝灰岩・シルト岩・砂岩・礫岩等から成っている。地層は、下位より石越安山岩、下黒沢層、微美層、有賀層、油島層、金沢層、真滝層、花泉層を含む段丘堆積物で構成されている。

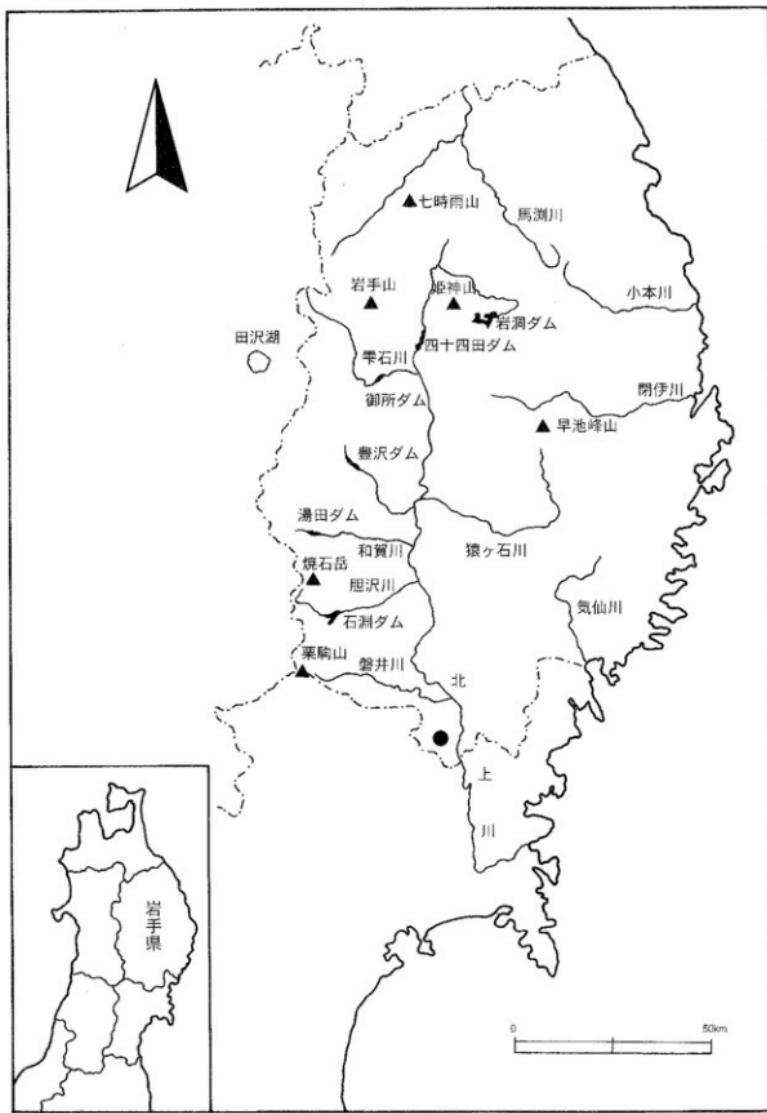
五輪堂遺跡は、前述の通り花泉町内のほぼ中央を流れる金流川流域によって形成された段丘上に立地している。本遺跡は周辺の段丘より一段高く、張り出す中位段丘にある。
(太田代)

第2節 遺跡の概観

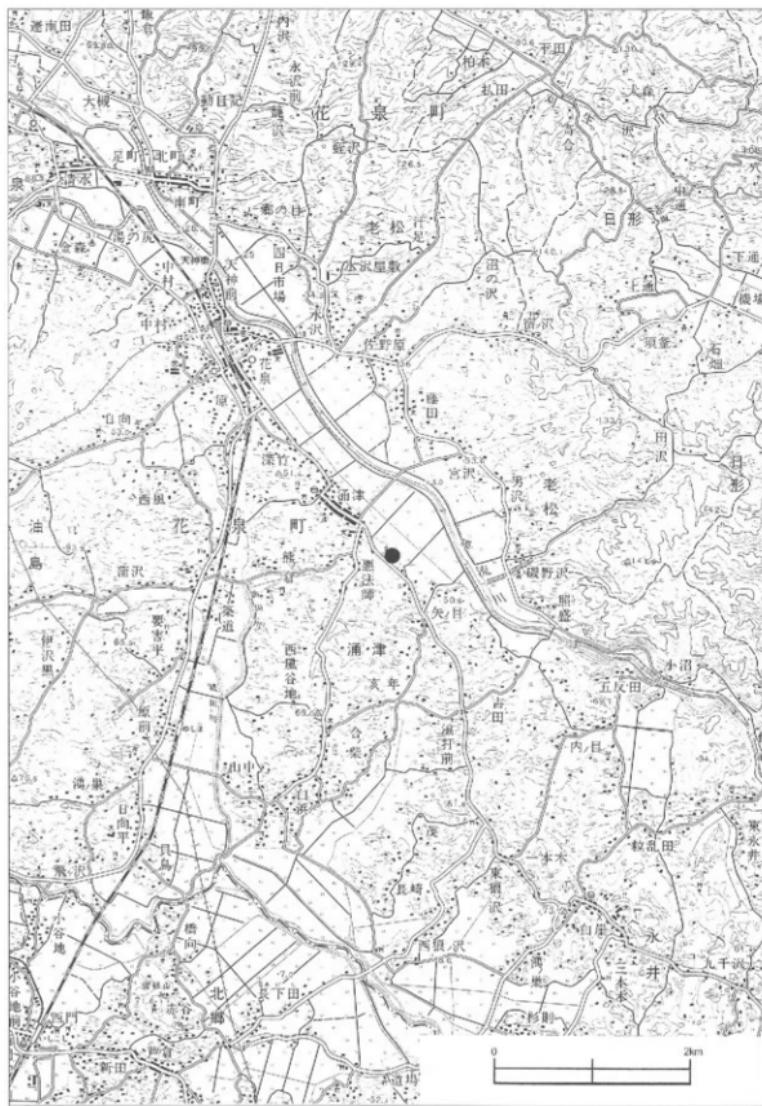
五輪堂遺跡はJR花泉駅の南南東約2.6km、金流川右岸の河岸段丘上に位置している。本遺跡が位置している五輪堂地内からは現在涌津八幡神社に安置されている重要文化財の鉄五輪塔地輪（第4節参照）が出土したとされており（『安永風土記』）、現在も悪法師・松之坊・鴻南沢等、当時の面影を伝えるかのような地名が遺跡の周辺に残されている。標高は18~20m前後、調査前の現況は水田で、昭和30年代に行われたは場整備により、調査区北側の標高の若干低い部分以外は削平を受けている。

第3節 基本層序

今回の調査区では昭和30年代に行われた、前回のは場整備やそれ以前の開田時の削平等によって後世の擾乱が著しく、基本的には耕作上であるI層と遺構検出面であるIV層は共通しているものの、地区によって様々であるために、分けて述べることとする。



第1図 岩手県全図

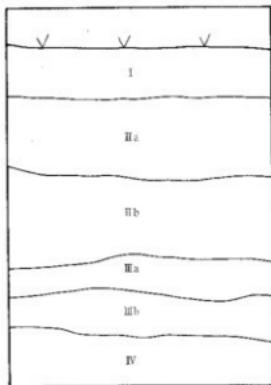


5万分の1地形図 若柳

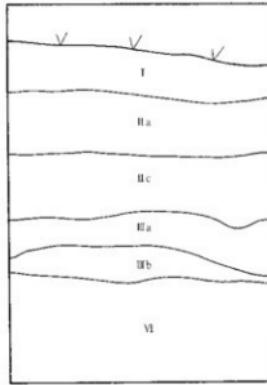
第2図 遺跡の位置図



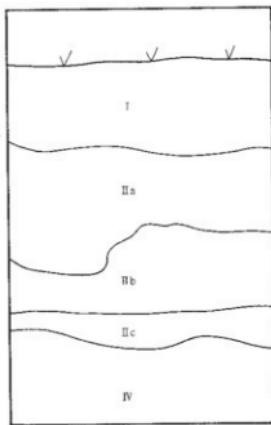
第3図 周辺の地形と調査範囲（磁北は下）



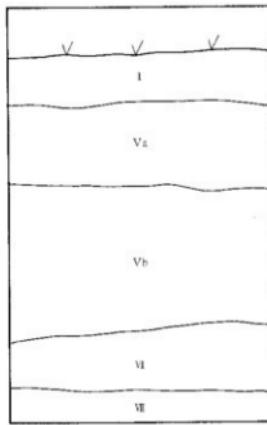
A区西半部



A区東半部 北



A区東半部 南・D区



B区・C区

基本土層

- I. 10YR4/5 に近い黄褐色 しまり有 粘性少し有 耕作土
- IIa. 10YR7/7に近い黄褐色 しまり有 粘性有 削葉褐色土含む
水田造成時の人為的堆積土
- IIb. 7.5YR7/7 しまり有 粘性有
- IIIa. 10YR3/2黒褐色 しまり有 粘性有 少量含む
- IIIb. 10YR2/2黒褐色 しまり有 粘性有 含む
- IV. 10YR6/6 黄褐色 しまり有 粘性有 少量含む
- Va. 7.5YR7/7 黄褐色 しまり有 粘性有 水酸化鉄が多い
- Vb. 7.5YR7/7 黄褐色 しまり有 粘性少し有 水酸化鉄が帯状に入る
- VI. 7.5YR7/7 黄褐色 しまり有 粘性有
- VII. 7.5YR7/7 黄褐色 しまり有 粘性有 水酸化鉄含む(Vaと同質)

第4図 基本土層柱状図

北側調査区（A区）は西半部と東半部で様相が異なる。西半部は耕作土の下に盛土層であるII層、その下にH表十であるIII層が薄く堆積し検出面であるIV層に至る状況が見られる。

これに対して東半部は、開田時の削平によって検出面であるIV層が多分に削平を受けていたため耕作上直下は即検出面という状況である。

南側調査区（B区）ではIV層が確認されず、V層が検出面となっている。もともと南側調査区付近は周辺よりも若干高まっている傾向が認められ、その高まりの経辺部からIV層が確認され、IV層下にV層が潜り込んでいる状況が、南側調査区（B区）に隣接する水路分調査区（C区）の入り口付近から認められる。南側調査区（B区）では開田時以前に使用されていた道路跡があった北端部以外は開田時に削平を受けており、耕作土下が即V層の検出面である。北端部は逆にその土が盛られているために、耕作上直下にII層が認められ、検出面であるV層に至る。

水路分調査区（C区）南側は南側調査区南端と同様で、同北側は南側調査区（B区）北端と同様の基本層序を呈する。

第4節 周辺の遺跡

岩手県教育委員会作成の遺跡台帳ならびに平成10年度の花泉町教育委員会作成の花泉町遺跡分布図によると花泉町内には、121箇所の遺跡が確認されている。そのうち、五輪堂遺跡を中心として周辺の81遺跡を図中に示した。周辺の遺跡で調査が行なわれた遺跡の中には、貝鳥貝塚（65）・金森（花泉）遺跡（16）の調査が知られているが、調査遺跡数が多いとは言えない。花泉町の遺跡は、全流域・有馬川流域・夏川流域の河岸段丘上や、台地上・丘陵緩斜面上に多く分布している。本遺跡も全流域右岸の河岸段丘上に立地している。

花泉町の南側を流れる夏川流域には、貝鳥貝塚（65）・白浜貝塚（68）・鴻ノ巣貝塚（76）・石崎貝塚（70）・高倉貝塚などの貝塚遺跡が分布している。これらの貝塚は、全国的に珍しい内陸性貝塚であり、北上川下流域と仙北潮沼域の貝塚分布図の北辺にある。なかでも、夏川左岸の段丘上にある貝鳥貝塚（65）は、縄文時代前期から弥生時代にかけての遺跡で、多量の土器・石器・土偶・動物形土製品・骨角器などと共に32体の埋葬人骨など貴重な資料が多数出土している。本遺跡から北西方向の全流域右岸にある金森（花泉）遺跡（16）は、後期旧石器時代の遺跡である。中位段丘上に立地し、泥炭層から約2万年前のハナイズミモリウシ・ヘラジカ・ナウマンゾウなどの大型動物遺骸が多数出土していることで有名である。花泉遺跡より約500mほど北東には、縄文時代と平安・中世との遺構が複合する集落遺跡の下館銅器遺跡（12）がある。

数少ない古墳時代の遺跡は、花泉町の南東側に尼塚古墳・杉山古墳等の終末期古墳群が確認されている。杉山古墳は100基以上からなる古墳群で、その内の5基が昭和30年に調査されている。これらの古墳は直径10m以内、高さ1~1.5m程の小円墳で、これらは横穴式石室や割石積石室を有し、副葬品は直刀・須恵器・糸切底を有する土師器・勾玉・管玉などが出土している。杉山古墳のある永井杉山地区から宮城県登米郡中田町上沼化粧板にかけて古墳群が多くみられ、この地域一帯に大規模な集落や有力者が存在していたことが想定される。

北上川右岸の丘陵上にある鹿ノ岬経塚（25）からは、常滑焼二筋文経壺と12世紀後半頃と思われるかわらけが出土している。常滑焼経壺が出土している遺跡は他に、花泉町南側の高倉山緩斜面にある高倉東ノ森経塚で、前述の経壺と同系統と思われる常滑焼二筋文経壺が2個体確認されている。いずれも12世紀後半代の

ものである。高倉山には経塚の他、高倉城・釣野館・晴之中山の柵といった中世城館跡や寺院跡など遺跡が集中している所である。

花泉町内には石塔婆が多数建てられており、岩手県内で一番の残存数をほこる。石塔婆は388基確認されていて、紀年銘のあるものが69基確認されている。これらの中でも最古のものは老松觀音堂屋敷の乾元二(1304)年二月二十一日のもので、新しいものは日形高山裏の大永丘(1526)年銘のものである。花泉町内の石塔婆の特徴としては、基数が多いだけでなく、群神地が多数確認されている点で、日形高山裏178基、老松觀音堂屋敷44基、王塙36基、企提寺跡23基などが代表的で、これらのはほとんどは金流川沿いに建てられており、町内で確認された石塔婆のはほとんどは金流川沿いで確認される傾向が見られる。

花泉町では、城館跡が他の地域に比べて非常に多く確認されている。城館跡は主に中世のもので50箇所程確認されている。代表的なものは、坂上田村麻呂ゆかりの城という伝承が残されている二桜城(11)や朝日館(8)などが挙げられる。中世城館跡のはほとんどが山城であり、部落が一望できる小高い丘陵のような場所に分布している。本遺跡付近にも城館跡が多数あり、西側に湯山(悪法師)館(57)、南東側に下館城(58)がある。北西には大規模な城館跡の柴館(51)がある。金流川対岸の丘陵緩斜面上には、鷹取館(45)・柴館(41)などが見られる。

本遺跡のある涌津五輪堂地内には、涌津八幡神社境内に安置されている、鉄五輪塔地輪が出土したと伝えられる場所である。この地輪は、昭和55年に国重要文化財指定を受けている。五輪塔は仏教の五大思想すなわち「地・水・火・風・空」のいわゆる五大の離合集散によって万物が形成されるという思想で、人の死も例外でなく五大の離合集散の結果であるという考えにのっとり、人が死んだ際に五大に帰ったであろう事を象徴する塔が五輪塔で供養追善のためのものである。塔全体が大日如来を抽象化した密教系の塔で、各部の形態は下から方形、円形、三角形、半円形、宝珠となり、通常は下から地輪、水輪、火輪、風輪、空輪ととなる。五輪塔が他の塔と性質が異なる点は、塔身といった部分がない点である。五輪塔は平安時代に出現し、鎌倉・室町時代に普及する。江戸時代には墓標としても用いられるようになり、宗派を超えて全国に広がり、数量もかなり多く存在する。

この鉄五輪塔は砂鉄で鋳造された地輪である。大きさは一辺106.0cm、高さ78.2cmあり、全國にある鉄五輪塔中最大のものである。背面中央下部に扉のような方形の窓があり、これは納経などをするために設けられたものと考えられている。鉄五輪塔地輪側面の銘文によると、40余人の衆徒によって建長6(1254)年に発願し、文永5(1268)年に造立されたと記されている。勧進は沙彌西信という人物である。また、一丈一尺(約3.3m)と記されており、現在は地輪を残すのみだがその大きさが窺える(『花泉町史』)。五輪塔には本来、五大の種子、四轉の梵字、大日如來の真言「キャ・カ・ラ・バ・ア」などが刻まれるのが一般的であるが、この地輪の正面には向かい合う狛犬が装飾されている。狛犬は普通、神社の守護神像に用いられるもので寺院仏閣にはあまり見られず、この塔は神仏習合の供養塔として全国的にも稀で、貴重な五輪塔である。

伝承では、五輪塔が五輪堂地内にあった時代には、北の坊、松の坊、鴻南坊の三坊の中に置いて守られていたと伝えており、現在でもこれらの地名が残っている(註1)。

(太田代)

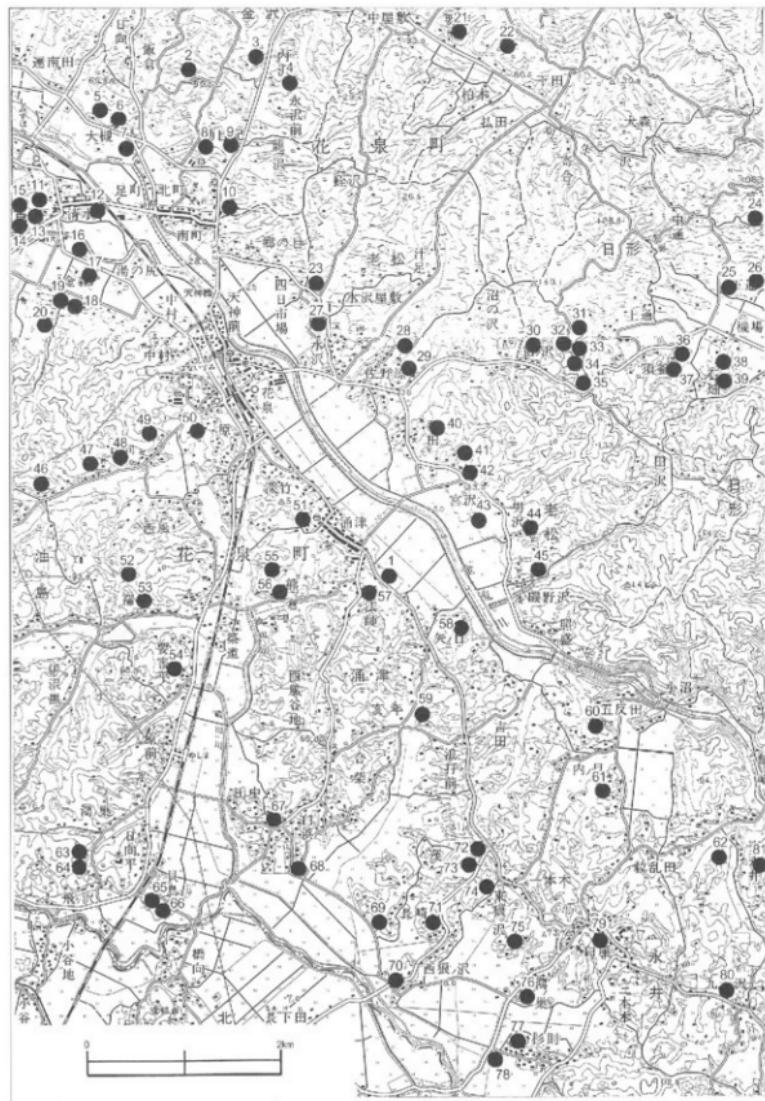
註

1. 伝承によれば、五輪塔が五輪堂地内にあったときには北の坊・松の坊・鴻南坊の3坊のなかに置いて守らせたがその後、年月を経て、北の坊は涌津に残り、松の坊は遠田郡布穀山に鴻南坊は平泉に移ったとされている。『花泉町文化財調査報告書第1集』

そのほかにも『陸奥誌記』に「磐井郡仲村の地は陣を去ること四十里あり、田畠を耕作する民戸頗る饒し、則ち兵一千余人を遣し、亦稻禾を刈らしめ軍糧に給す」という一文がある。ここの大井郡仲村の地とは、町内花泉中村を指すものといわれている。前九年の役の際に一千余人を派遣して兵糧を確保するだけの出陣があった事を示しており、その後この地域が高鞍庄として立莊される事ともつながるのではないかだろうか。高鞍庄は奥州藤原氏二代藤原基衡と藤原頼長が年貢徵収額の争い（交渉）が起こった莊園でも知られており（『台記』仁平三年九月十日条）、鉄五輪塔を建立する背景・経済的基盤は平安期からあったのではないかと想定される。

<引用・参考文献>

1. 一関市史編纂委員会 「一関市史」第一巻 通史 1978年
2. 岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 「下館銅屋遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団理蔵文化財調査報告書第297集 1999年
3. 司東真雄 「岩手の石塔婆」 モノグラム社 1985年
4. 「日本石仏事典」 雄山閣出版 1975年
5. 花泉遺跡発掘調査会 「花泉遺跡」 1993年
6. 花泉町教育委員会 「寺沢遺跡発掘調査報告書」「花と泉の公園」整備事業関連遺跡発掘調査 1998年
7. 花泉町教育委員会 「中神遺跡の調査」 1997年
8. 花泉町教育委員会 「花泉遺跡」 1993年
9. 花泉町教育委員会 「貝塚貝塚」 1971年
10. 花泉町史編纂委員会 「花泉町史」(通史) 1984年
11. 花泉町史編纂委員会 「花泉町史」(資料編) 1986年
12. 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森山紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二
『北上川中流沿岸の第四系および地形・北上川流域の第四紀地史(2)』 地質学雑誌第69卷第812号 1963年
13. 青森県史編さん古代部会 「青森県史 資料編 古代1」 2001年



5万分の1地形図 若柳

第5図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1 五 輸 堂	集落祭祀跡	平安～近世	磐穴住居・�示社遺物跡・溝・塹	報告遺跡	
2 経 タ 森	経塚		塚 2基		
3 高 台 寺	跡	寺院跡			
4 紫 ノ 沢 鮎	城館跡	桃山～江戸	曲輪・土塁・空堀・土郭・腰郭		
5 尼 境	界				
6 山 神 路	城館跡	中世	曲輪・土塁・空堀・平場		
7 大 機 鮎	城館跡	桃山	船跡・井		
8 朝 日 館 (金沢城)	城館跡	平安～桃山	曲輪・土塁・空堀・湧井・腰郭		
9 西 川 塚	祭祀跡		塚 4基		
10 前 府 野 里 塚	城址跡	近世			
11 二段城(清水城・舞鹤城)	城跡跡	平安～桃山	曲輪・土塁・空堀・湧井・主郭・腰郭	町指定史跡	
12 卜 館 刈 墓	散布地	縄文	縄文土器・石器		
13 上 館 敷 地	散布地	縄文	縄文土器・石器・骨器		
14 宝 和 泉 院 路	寺院跡				
15 蔽 西 塚	祭跡跡	室町	塚・石塔婆	町指定文化財	
16 金 森	森 敷布地	旧石器	大陵性賦骨類(野牛・ヘラジカ)		
17 下 金 森	森 敷布地	縄文・古代	縄文土器・須恵器・帆舟		
18 寺 / 津	津 敷布地	縄文	縄文土器・石器		
19 高 山 鮎 (金森城)	城館跡	室町～江戸	曲輪・土塁・空堀		
20 七 フ 森	森 祭祀跡		塚 9基		
21 要 吉 館	城館跡	中世	曲輪・土塁・空堀		
22 柏木館(丸盛館・盛駒)	城館跡	中世	曲輪・土塁・空堀・腰郭		
23 四 口 市 継 塚	散布地	縄文			
24 角 宮 塚	祭祀跡		塚		
25 鹿 / 烟 経 塚	経塚		古常滑焼経志・塚 2基	町指定文化財	
26 小 館	城館跡	中世	曲輪・腰郭・主郭・二の郭		
27 四 口 市 場 敷布地	縄文				
28 一 里 塚	一里塚		塚 2基		
29 杉 里 敷 館 (杉 鮎)	城館跡	平安～室町	曲輪・土塁・空堀・湧井・平場・主郭		
30 劍 朝 館 西 館 (峰城西館)	城館跡	室町～桃山	平場	西の丸	
31 劍 朝 館 北 館 (峰城北館)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・主郭	北の丸	
32 劍 朝 館 本 丸 館 (峰城)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀		
33 劍 朝 館 東 館 (峰城東館)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・七弟・二の郭	東ノ丸	
34 劍 朝 館 南 館 (峰城南館)	城館跡	室町～平安	平場・郭・堀・土塁	南ノ丸	
35 潮 山 塚	祭祀跡		石塔婆		
36 上 須 鎧 館	城館跡	桃山	曲輪・腰郭		
37 宝 寿 院 路	寺院跡		墓石		
38 開 峯 寺 施 路	寺院跡		墓石		
39 萩山館 (小野山家・萩山、千葉)	城館跡	室町	曲輪・土塁・空堀・木丸・二の丸		
40 王 墓 塚	祭祀跡	鎌倉～室町	石塔婆 36基	町指定文化財	
41 笠 館 (宮代館)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・湧井・主郭		
42 宮 津 敷布地	縄文	縄文・古代	縄文土器・須恵器		
43 衆 徒 塚	祭祀跡		塚		
44 金 提 寺 路	寺院跡		塚 2基・石塔婆 23基		
45 鷹 取 鮎 (男沢城)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・郭		
46 小 袋 食 塚	祭祀跡		塚・堀	行者塚	
47 石 食 塚	祭祀跡		塚 2基		
48 名 買 山 塚	祭祀跡		塚		
49 上 油 田 城 (竹ノ下城)	城館跡	平安～桃山	曲輪・土塁・堀・本丸・二の丸		
50 上 油 田 継 塚	祭祀跡		塚		
51 梅 館 (涌津城・涌津北館)	城館跡	鎌倉～桃山	曲輪・空堀・水堀・本丸・二の丸・腰郭		
52 漢 津 塚	祭祀跡		塚 4基		
53 清 津 館 (下山田城)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀		
54 要 青 (鮭) 館	城館跡		墓石		
55 猿 合 館 (池上橋)	城館跡	室町～桃山	市輪・主郭・腰郭		
56 退 筒 塚	祭祀跡	江戸～明治	墓石・塚石		
57 游 山 館 (悪法師館)	城館跡	中世	曲輪・主郭・腰郭		
58 下鰐城 (下鰐館・東城・下鰐)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・主郭・腰郭		
59 猪 闇 館	城館跡	鎌倉～桃山	曲輪・土塁・空堀・石塔婆・平場		
60 西永井館 (内ノ日向館・西館)	城館跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀		
61 内 / 日 葵 館	城館跡		曲輪・土塁・空堀		

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
62	高崎館（卜館）	城跡	室町中期	曲輪・空堀・腰郭	
63	西館（蝦夷館）	城跡	室町～桃山	曲輪・土塁・空堀・平堀・本丸・二の丸	
64	飛ヶ沢	祭祀跡		塚 4基	盛塚
65	貝鳥貝塚	貝塚・集落	绳文～弥生	绳文土器・弥生土器・石器・人骨	県指定史跡
66	平等寺跡				
67	白浜瀬（流津南館・南岸）	城跡	室町	曲輪・土郭・腰郭・物見	
68	白浜貝塚	貝塚	绳文	绳文土器・石器・骨角器	
69	長崎城跡	城跡	室町中期	曲輪・土塁・空堀・主郭・物見	
70	石崎貝塚	貝塚・集落	绳文	绳文土器（前期）・石器・武骨	
71	西狼の沢跡	縄塚		塚	
72	向坊行人塚	祭祀跡		石祠	
73	一本行人塚	祭祀跡		石祠	青海坊塚
74	狼の沢	祭祀跡		石塔婆	
75	浦ヶ崎	散布地	绳文	石斧	
76	浦ノ果貝塚	貝塚	绳文	石器	
77	大塚	城跡	桃山～明治	曲輪・土郭・二の郭・腰郭・堀	
78	寺場	散布地	绳文	绳文土器（前期）・石器	
79	七重塚	塚	古墳	塚 1基	
80	尼塚	古墳	古墳	塚・人骨	
81	青森山城（東永井館・東館）	城跡	室町	曲輪・土塁・空堀・削井・腰郭	

第Ⅲ章 調査の概要と整理方法

第1節 調査経過

野外調査は6月17日から10月31日まで行った。6月17日午後機材を搬入し調査を開始する。花泉町教育委員会が行った試掘トレンチを再掘し、基本崩壊・検出面を確認。同下旬には委託者側から当面重機を使用しないようにと申し入れがあったこともあり、表土の薄いC区を人力で表土除去・検出を行う。同27日重機投入、A区から表土除去検出を行う。現場は水はけが悪い粘土質の土である上に周囲からの湧水が激しくなかなか作業が進まない。7月1日すぐ隣を調査していた花泉町教育委員会主催の作業安全祈願祭に参加する。

7月中旬は10日前後に通過した台風6号の影響で現場付近が平均1m近く水没したため作業不能になる。排水が終了して作業を再開しようとしたところ今度は台風7号の影響で内度現場が1m近く水没し、また作業不能になる。結局7月中旬は台風6・7号の影響ではほとんど野外作業ができなかった上に、作業の主体が調査区の排水・復旧作業になってしまった。このため、遺構数の確定が7月下旬までずれ込む。8月より本格的に精査を開始する。当面は遺構密度が高い北側調査区を中心に精査を行うが、埋土が堅くなかなか作業が進まないうえに、猛暑による作業員の安全管理に苦慮する。8月下旬にはA区北部の精査が終了し、9月からは同南部の精査を開始する。当面は竪穴状遺構を切っている溝・堀の精査が主体となる。上旬にはコの字状に検出していた堀から常滑片が出土し、中旬には上坑の一部から六道鏡が出土し、墓壇があることが判明した。しかも、堀に閉まれた地区のみ墓壇が検出される傾向が見えてきたのは興味深く、慎重に精査を進める。下旬には溝の精査が一段落し、竪穴状遺構の精査を開始する。10月に入った段階でB・C区が未精査の状況だったので作業班を二手に分けて未精査の調査区の精査を開始する。中旬にはB・C区の精査を終了。このころになってようやく稲刈りが終了し、稲刈り終了後に調査を開始する部分の粗掘・検出を開始。ここから竪穴2棟、溝1条を検出。残り時間が少ないとから、すぐさま精査を開始する。27日午前に現地説明会を開催(約140名が参加)。29日午前空撮、午後終了確認が行われる。31日午前に機材を搬出し、午後残った実測を終了させ撤収した。

第2節 野外調査の方法

1 グリッドの設定

今回の調査区域全体をカバーできるよう世界座標に合わせて座標設定及びグリッド設定を行うこととした。調査区外の北西隅を始点とし100m間隔で西から東に向かってI、II、IIIとローマ数字を、北から南に向かってA、B、Cとアルファベットの大文字を当てて大グリッドを設定し、各大グリッド内に5m間隔で20等分して、大グリッドと同様に西から東に1~20とアラビア数字を、北から南にa~tとアルファベット小文字を当てて、それらの組み合わせで小グリッドを表すこととした。作業を行う際にはグリッドの北西隅の杭にグリッド名を記入し、IA 1a グリッドというような呼称をした。また、調査区が世界座標軸に対して西へ傾いているため、調査区全体をカバーするような区割りを行った際に原点が調査区外に位置してしまった。なお、原点の世界座標値は次の通りである。

(X = -131,615.000 Y = 31,800.000)

また、実際にグリッド設定を行う際には調査区が複数にかつ広範にわたっていたので、基準点は業者に委託して打設した。調査時にはその基準点を使用して調査区の区割り・グリッド設定を行った。各地区で使用した基準点の座標値は以下の通りである。

基準点名	X 座 標	Y 座 標	グリッド	基準点名	X 座 標	Y 座 標	グリッド
基 1	-131,655.000	31,945.000	II A10 k	基 3	-131,750.000	31,910.000	II B 3 k
基 2	-131,655.000	31,910.000	II A 3 k	基 4	-131,750.000	31,935.000	II B 8 k

(世界測地系)

2 粗掘と精査

粗掘は平成12~13年度に行われた試掘結果をもとに試掘トレーンチの再掘ならびに調査区内で試掘トレーンチが無い地区にに関しては新規に試掘トレーンチを設定し土層断面を観察し、遺物がほとんど見られないI・II層に関しては重機を使用して除去することとしたが、諸々の事情により重機を投入することができなかったC区は人力で表土除去している。

精査は基本的には堅穴住居・堅穴状造構は4分法、上坑等は2分法による埋土の観察を行い、堀・溝に関しては適時ベルトを設定し埋土の観察を行った。

遺物の取り上げは造構外に関してはグリッド名と層位、造構内に関しては造構名と埋土層位を記入し、遺構内外にかかわらず、それぞれ出土地点を実測した遺物に関しては取り上げ番号も記入している。

3 造構の記録

造構の記録は実測図と写真撮影により、図面で表現できない所はフィールドカードに記録している。図面は造構の平面形や地上範囲、遺物出土状況を記録した平面図、ならびに造構の断面形・埋土の堆積状況を記録した断面図を作成し、適時エレベーション図も作成した。作図は簡易造り方測量を準用し、精査途中で隨時作図記録している。縮尺は基本的には1/20を原則としたが、カマド・焼土などの微細図が必要な図面に関しては1/10で、造構が長大なために造り方測量をするには困難な堀・溝に関しては周辺地形が平坦な所は平板測量で、斜面部は光波トランシットによる測量で1/50で作図した。

写真は造構検出状況、埋土堆積状況、遺物出土状況、完掘状況というように精査の各段階毎に必要に応じて撮影を行っている。フィルムは35mm判のモノクロとリバーサル、モノクロに関しては6×7cm判も使用している。また、状況に応じてデジタルカメラ・ポラロイドカメラを使用してメモ的写真を撮影している。遺跡遠景、調査終了全景はセスナ機による空中撮影にて行った。

第3節 室内整理の方法

図面点検・遺物の洗浄・写真整理は原則的に現場で行うこととしたが、期間の後半は調査に追われ、一部は野外調査終了後に行っている。

1 遺構図面

遺構図面は点検後、第二原図を作成し、トレースを行った。揮図中の縮尺は堅穴住居・堅穴状遺構は1/60、掘立柱建物跡は1/80、カマドは1/20、土坑は1/40、壙・溝・柱穴状土坑の平面図は1/100、堅穴住居の床面施設・堀・溝・柱穴状土坑の断面図は1/40を原則として、任意縮尺に関してはスケールをつけている。

2 遺 物

遺物は洗浄後、出土遺物の全てを点検し、遺構内外と遺物の種別毎に仕分けを行い、注記・接合・復元を作業をすすめ、実測・探査が必要なものを選んで登録した。実測・トレース・写真撮影・図版作成を作業を進めたが、実測前に登録遺物の絞り込みを行ってから作業を行った。実際の作業は調査員が仕事の計画と指示・点検を、作業員が実際の仕事を行うという具合に分担している。

報告書に掲載した遺物の掲載基準は、上器は完形品と接合復元したものの中で器形がおよそ分かるものは掲載とし、遺構内から出土した遺物が少ない遺構の土器に関しては口縁部・底部破片を選択し、できうる限り床面出土のものを選択している。石器・石製品は登録した遺物のうち写真・観察表は全点、図面は代表的なものを選んで実測し、掲載している。鉄製品・木製品・古銭に関しては点数が少ないとおり登録した全点を掲載している。

揮図中の縮尺は上器は原則として1/3で器高25cm以上の上器に関しては1/4、鉄製品・古銭・木製品と剥片石器に関しては1/2である。これらの原則と異なる縮尺の図面には脇に縮尺を表記することとし、任意の縮尺に関しては脇にスケールをつけている。

3 写 真

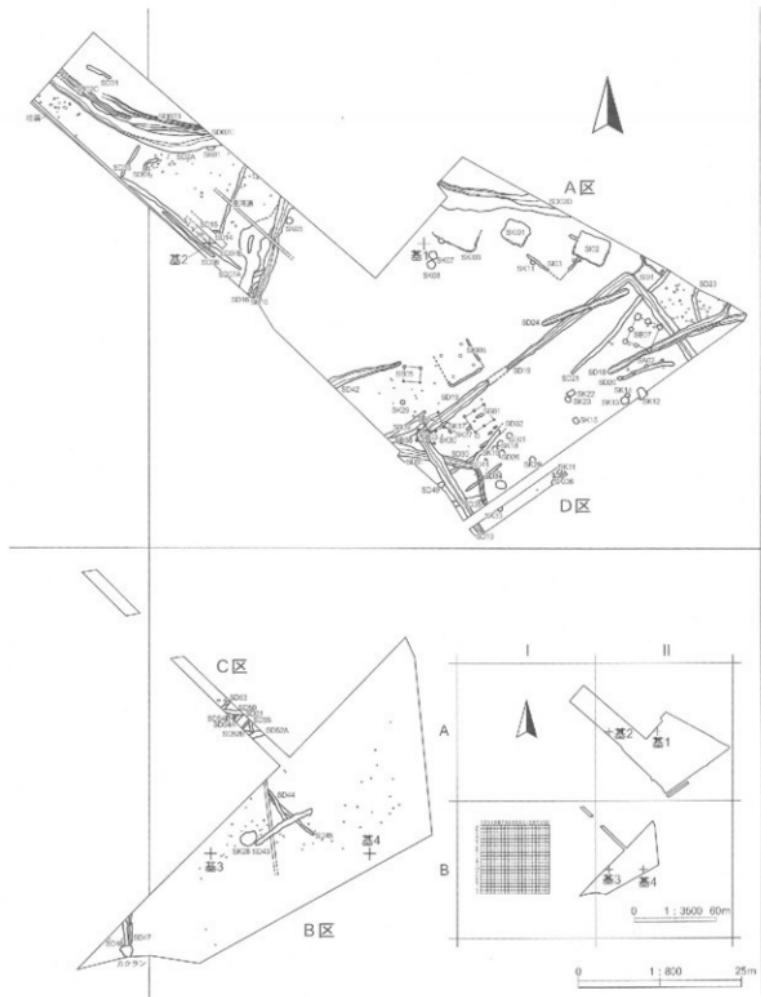
野外調査中に撮影した写真は、撮影順に対応するようにフィルムの種類毎にモノクロはネガアルバムにリバーサルはスライドファイルに整理して台帳に記入した。

遺物は当センターの写真技師が登録した遺物を35mmフィルムで撮影し、現像終了後、種別毎に整理を行っている。

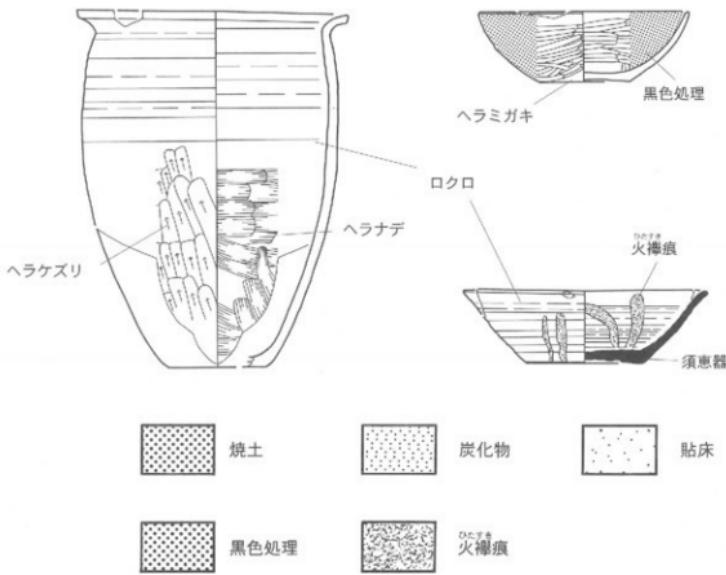
4 凡 例

本書で使用したスクリーントーンや実測中で使用している凡例は第7図に示した通りである。また観察表中で使用している法量の推定値は()、残存値は〔 〕で表示している。

住居の床面積はプランメーターで3回計測し、その平均値を示している。



第6図 道構配置図



第7図 凡例

第IV章 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は平安時代の堅穴住居跡3棟、堅穴状遺構4棟、掘立柱建物跡1棟、中世の堀跡1条、中世～近世にかけての墓壙6基、時期不明の掘立柱建物跡5棟、土坑18基、井戸1基、溝跡50条、柱穴状上坑202基が検出されており、大きく平安時代、中世、時期不明の3時期に分けられる。古代～中世の遺構はA区東半部からのみ検出され、特にB・C区から検出した遺構は遺物が出土していないこともあり、ほとんどが時期不明遺構という検出状況を示している。時期別の遺構種別・数量は概ね以下の通りである。また検出時に連番登録し、その後の精査で住居等の拡幅・建て替え等で重複が確認された場合には新しい方からA、B、Cと登録することにしたため、新しい遺構名はふっていない。

本報告では調査区が大きく二つ（A・D区とB・C区）に分かれていることから、調査区毎に記述を進めていくことにする。遺構内外の出土遺物の総量が少ないとことから、ここでは遺物の記述に関しては出土量や出土地点等の記述にとどめ、詳細は第3節でまとめて記述することにする。

平安時代

堅穴住居跡：3棟（S I01～03）

堅穴状遺構：4棟（SK I01・03・05・06）

掘立柱建物跡：1棟（SB07）

溝跡：2条（SD21・31）

中世

堀跡：1条（SD19）

中世末～近世

墓壙：6基（SD15・17・22～24・27）

時期不明

掘立柱建物跡：4棟（SB01・03～05）

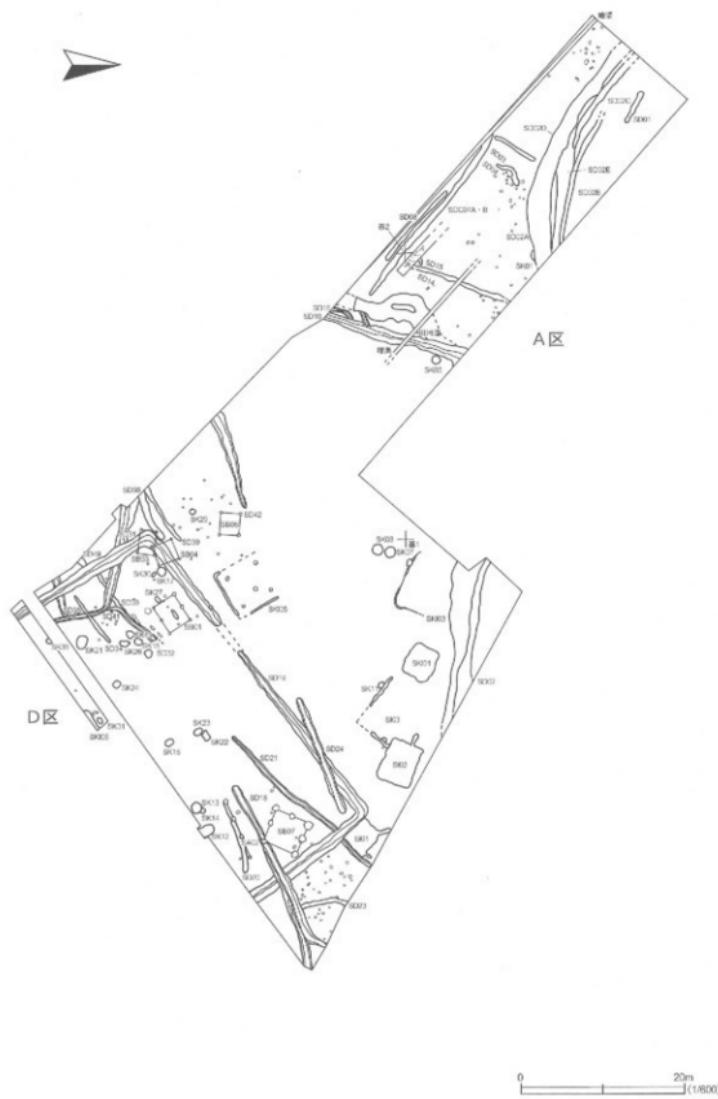
柱穴列：1列（SA02）

土坑：18基（SK01・05・07・08・11～14・18・19・21・25・26・28～31・33）

井戸跡：1基（SE01）

溝跡：49条（SD01～05・07A・B・10A・B・15～18・20・21・23・24・30～37A・B～39・41～46A・B～52A・B～53・54A・54B・55A・55B・56）

柱穴状上坑群



第8図 A・D区遺構配置図

第1節 A・D区の遺構

A区は北側調査区の面的な部分であるが西半部と東半部では様相が異なる。西半部は北西側に向かうにつれて低くなっていく緩斜面を呈し、北端部付近で急激に落ち込んでいく。標高は17~18m前後を測る。

東半部は木末北に向かうにつれて低くなっていく緩斜面で、東端部付近で急激に落ち込む地形であったと思われるが、開田時の造成によって、階段状に削平されている。その為、遺構の残存状況は不良である。標高は18.1~19.4m前後を測る。

A区からは堅穴住居跡3棟、堅穴状遺構3棟、掘立柱建物跡5棟、墓塚6基、井戸跡1基、土坑12基、埴跡1条、溝跡37条、柱穴状土坑群が検出されている。

D区はA区東側に隣接する水路分調査区で、地形状況はA区と同じであるが、現況が農道であったため、道路整備時に厚く盛土が施されていたものの、それ以前にA区と同様に削平を受けていたため、残存状況は非常に悪い。D区からは堅穴状遺構1棟、土坑2基、柱穴状土坑6基と、A区から続いている埴跡1条が検出されている。

S 101堅穴住居跡（第9・10図、写真図版2・3）

A区東半部、II A-16k・1・17k・1グリッドに位置し、IV枠上面で検出された。住居南西部分をSD19に、南東壁上位をSD21に切れられ、またSD21はSD19に切られていることから、新旧関係は（新）SD19→SD21→（旧）S 101である。前述のような重複関係のため、平面形・規模ははっきりしないが、北東壁は3.75m、南東壁は3.26m、北西壁は3.07m残存していることから、長軸3.8m前後、短軸3m以上の楕円長方形ないし方形を呈しているものと思われる。本住居がSD19より南側では検出されなかったので、住居南西壁はSD19内のどこかに収まると推測されることから、短軸は北東壁からSD19南壁までの距離約4mよりは短いものと思われる。主軸方位はN-38°~E、床面積は残存部分で8.14m²を測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北西壁で22cm、北東壁で10cm、南東壁で9cmを測る。埋土は上位は灰黄褐色土、中位は灰白色火山灰、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積で13層に細分され、灰白色火山灰はレンズ状に堆積している。床面は平坦で堅く綺まり、全面に貼床が施されている。また、カマド下も含む堅面際から周溝が検出された。周溝は幅25~42cm、深さ9~15cmを測り、カマド下部分のみ3個体分の土師器壺を割って大きな破片にしたものを周溝にドーム状に覆い被せ（カマド下R P 1~12）。黄褐色土系粘土を貼ってからカマドを構築している。周溝は北コーナーから住居外に延びている。開田時の削平で一部消失しているため全容は不明だが、北方向に残存部分で1.58m程度延びているのを確認している。この溝は外延溝であると思われ、住居内の溝から下り勾配に延びており、住居内の周溝との高低差は最大44cmを測る。また、住居内の周溝も南から北へ向かうにつれて低くなっている、外延溝と合流する地点が最も低く、高低差が最大16cmを測る。本遺跡周辺の土質が非常に水はけが悪いことも勘案すると排水的な性格を持つ可能性が想定される。床面施設は住居中央より柱穴を1基（P 1）検出しており、位置的に半柱穴となり得るものと思われる。P 1東側から黒褐色土系のプランを確認し床面上坑かと思い精査を行ったが、精査の結果、住居構築前の風倒木痕であることが判明した。カマドは北東壁南よりに位置する。本体部の残存状況は良好でにぶい黄褐色土系粘土を用いて袖を構築している。燃焼部は22×15cmの楕円形状を呈し、厚さ1cm弱の明赤褐色焼土が形成されている。煙道部は長さ92cm、幅29cmの割り抜き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径20cm

の円形を呈し、深さ16cmを測る。

遺物は土師器・須恵器片が9号袋4袋分川土している。このうち掲載した遺物は土師器甕13点（1～13）、土師器高台付环1点（14）、土師器环8点（15～22）、須恵器小型甕1点（23）、須恵器大甕5点（24～28）、須恵器环2点である。

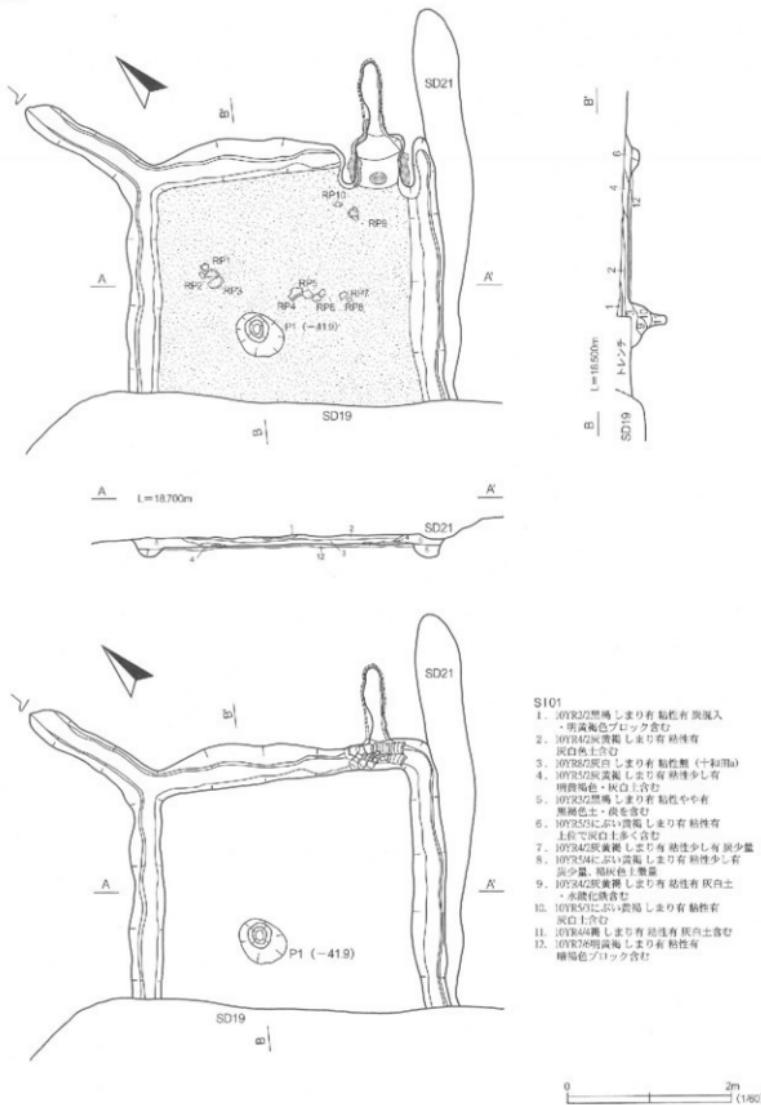
これらの掲載遺物のうち、（1）・（2）・（3）はカマド下の周溝にドーム状に覆い被されていたR P 1～12の上師器甕を接合・復元したものである。（4）・（6～8）の土師器甕と（15・18・19）の土師器环はカマド以外の周溝部分より、（13）の土師器甕は外延溝埋土より、（10・11）の土師器甕と（22）の土師器环と（25）の須恵器大甕はカマドより、R P 1（21）・R P 4（5）・R P 9（16）・R P 10（17）の土師器环と（14）の土師器高台环とR P 3（24）・R P 7（27）の須恵器大甕は床面より、（12）の土師器甕はK 1土坑より、（9）の土師器甕と（20）の土師器环と（26・28）の須恵器大甕と（29・30）の須恵器环は埋土より、（23）の須恵器甕は検出により出土している。

S 102堅穴住居跡（S K 102）（第11・12図、写真図版4・5）

A区東半部、II A-14 k・15 j・15 k・16 k グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は堅穴状遺構であると思い精査を開始したが、北西壁からカマドを検出したので堅穴住居跡であると判断した。西北コーナー付近でS 103と重複関係にあり、同遺構を切っている。新旧関係は（新）S 102・（旧）S 103である。開田時の削平により、住居北東部分を消失しているため、平面形・規模ははっきりしないが、南西壁は5.15m遺存し、北西壁は3.99m、南東壁は2.89m残存していることから、長軸5m前後、短軸4m以上の隅丸長方形ないし方形を呈しているものと思われる。主軸方位はW-24°-N、床面積は残存部分で11.84m²を測る。壁高は南西壁で19cmを測り、北西・南東壁は北東方向に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位はにぶい黄褐色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積で6層に細分されており、住居西コーナー付近より土器類が集中して出土している。ここから出土遺物を見てみると大半が土師器環で内黒処理されたものとそうでない物が混在している。底面の切り離しは、致点再調整を施したものがあるが、無調整のものが主体を占めている。これらの遺物は床面から若干浮いていること、埋土が自然堆積を呈することから見て住居廃棄後の完全に埋まりきらない時期に投げ込まれたものと思われる。床面は平坦で堅く締まり、住居東側の一部を除く全面に貼床が施されており、検出状況からみて住居内全域に貼床が施されていたと推測される。壁面隙から周溝が検出されており住居内全域を巡っている。周溝は幅39～44cm、深さ15～19cmを測る。床面施設は住居中央より柱穴を8基（P 1～P 8）検出しており、P 1・P 2・P 7・P 8は位置的に主柱穴となり得るものと思われる。カマドは北西壁中央に位置する。本体部の残存状況は良好で土師器甕を心材として褐色系粘土を用いて袖を構築している。燃焼部は径51×44cmの楕円形を呈する厚さ2cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.56m、幅44cmの掘り込み式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径45×40cmの円形状を呈するものと推測され、深さ19cmを測る。

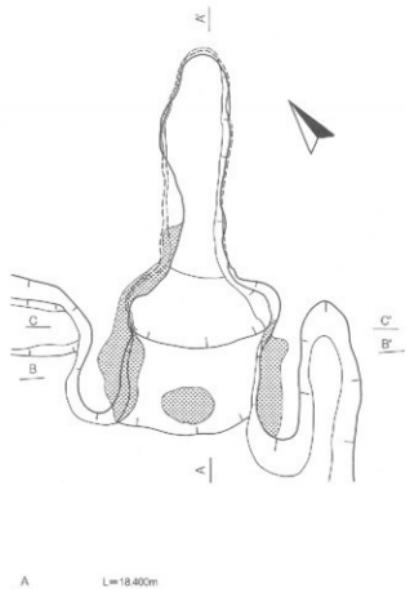
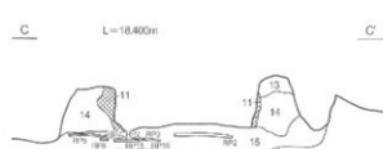
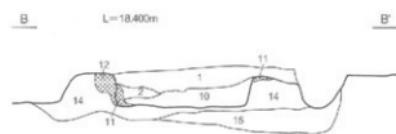
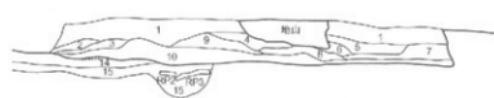
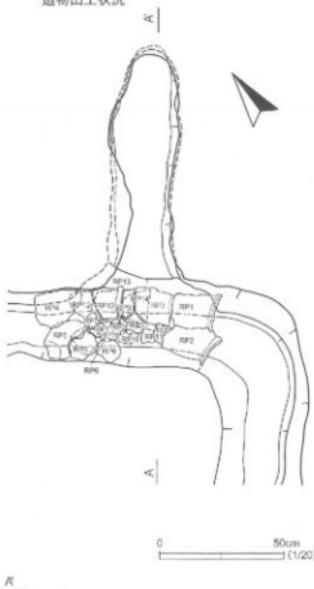
遺物は土師器・須恵器片が9号袋4袋分山上している。このうち掲載した遺物は、土師器甕9点（31～39）、土師器环18点（40～47・50～59）、土師器高台环2点（48・49）、須恵器甕1点（60）、須恵器环6点（61・66・67・69～71）、須恵器高台环1点（68）である。

これらの掲載遺物のうち、カマドR P 10（31）・同11（33）・（37）はカマド右袖の、カマドR P 1（35）・（36・39）の土師器甕と須恵器高台环（68）はカマド左袖より出土しカマド袖の心材として使用されていた。特に（33）は土師器甕を逆さまに置いて心材として使用している。（46）の土師器环はカマド埋土より出土



第9図 S101堅穴住居跡(1)

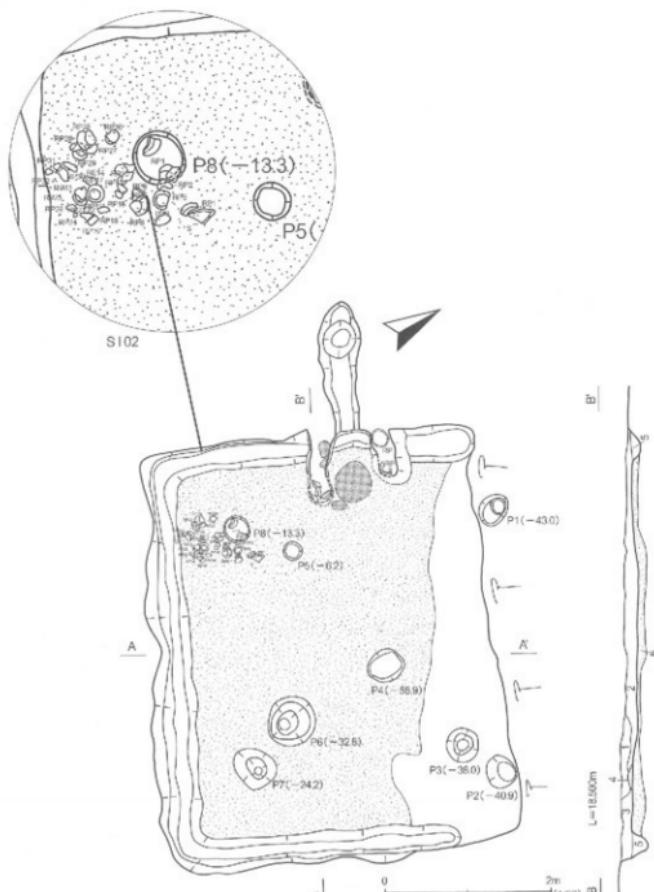
S101 カマド

S101 カマド下
遺物出土状況

S101カマド

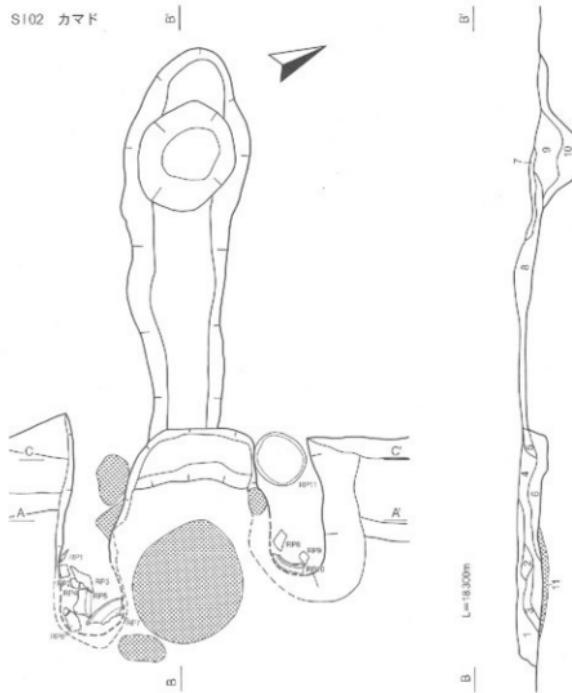
1. 10YR5/6灰褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土含む
2. 10YR5/9に近い黄褐色 しまり有 粘性少し有 黑色、褐色土含む
3. 2.5YR4/6赤褐色 しまり有 粘性無 黑褐色土含む
4. 7.5YR4/6に近い赤褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土含む
5. 10YR4/6灰褐色 しまり有 粘性有 黑褐色土含む
6. 10YR4/2灰褐色 しまり有 粘性有 黑褐色土含む
7. 10YR4/6灰褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土を層状に 堆土層・疊合付
8. 10YR7/4に近い黄褐色 しまり有 粘性有 灰黑色
9. 10YR3/4灰褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土を層状に 堆土層・疊合付
10. 10YR4/2灰褐色 しまり有 粘性非常に有 灰多量・灰土層
11. 10YR4/3に近い黄褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土含む
12. 10YR4/3に近い黄褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土含む
13. 10YR5/4に近い黄褐色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土と黄褐色土含む
14. 10YR5/6明黄色 しまり有 粘性少し有 黑褐色土含む
15. 2.5YR7/6オリーブ灰 しまり有 粘性有 明黄色土・灰を含む

第10図 S101竪穴住居跡(2)

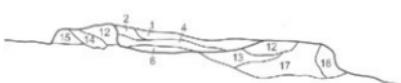


- S102
1. 10YR5/3に近い黄褐色・しまり有 粘性少し有 黑褐色土・十面田aブロック含む
 2. 10YR3/3暗褐色・しまり有 粘性少し有 黑褐色ブロック・炭多量
 3. 10YR4/4に近い黄褐色・しまり有 粘性粘性無・ブロック・炭少量
 4. 10YR3/6暗褐色・しまり有 粘性無
 5. 10YR3/2黒褐色・しまり有 炭多く、植生やや有 植土ブロック少量
 6. 10YR3/3暗褐色・しまり有 粘性やや有 黑褐色土層入、炭少量

第11図 S102堅穴住居跡(1)



A L=18.300m



C L=18.300m



0 50cm
1(1/20)

S102カマド

1. 10YR3/4暗褐色 しまり有 粘性無 極土ブロック・混合む
2. 10YR3/7暗褐色 しまり有 粘性少し有 極土ブロック混入
3. 2.0YR3/6褐色 しまり有 粘性少し有 極土多く含む
4. 10YR2/0黒 しまり有 粘性有
5. 2.5YR4/7灰 しまり有 粘性やや有
6. 2.5YR4/7灰 しまり有 粘性やや有 極土混合む
7. 10YR3/7灰白色 しまり有 粘性有 美色土混入
8. 10YR3/7灰白色 しまり有 粘性少し有 極土多く含む
9. 10YR3/7暗褐色 しまり有 粘性少し有 ピクシ、混合む
10. 10YR3/3暗褐色 しまり有 足立井井戸付有 極土ブロック・混入む
11. 5YR8/4C灰褐色 しまり有 粘性少し有
12. 10YR3/9暗褐色 しまり有 粘性やや有 例黄褐色土を混入
極少量、極土ブロック含む
13. 10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性やや有
例黄褐色土を混入、例・極土ブロック少
14. 10YR3/7灰白色 しまり有 粘性少し有 明黄褐色土を混入、例・極土ブロック少
15. 5YR8/6暗褐色 しまり有 粘性無 黄褐色、暗褐色土含む
16. 10YR3/7明黄褐色 しまり有 粘性やや有
極褐色土混入、炭少量
17. 10YR4/4褐 しまり有 粘性やや有 黄褐色土混入

第12図 S102堅穴住居跡(2)

し、R P12 (32)・R P16 (41)・R P3 (42)・R P9 (43)・R P8 (44)・R P22 (45)・R P29 (46)・R P25 (48)・R P19 (52)・R P7 (53・58)、R P26 (58)の上師器壺とR P26 (66)・R P19 (67)・R P12 (70)の須恵器は住居西コーナー付近より集中して出土したものである。(49)は床面より、(34)の土師器壺と須恵器壺(60)・壺(61)と(62～65)の須恵器大甕はP6より、上師器壺(47)・上師器壺2点(54・55)は埋土中より、(71)の須恵器壺は周溝より、(38)の土師器壺・(57)の土師器壺・(69)の須恵器壺は貼床より出土している。

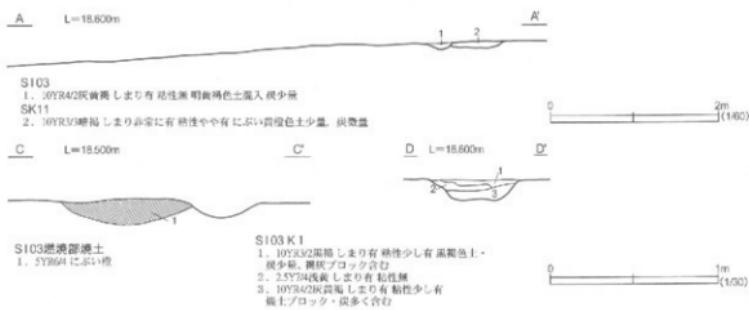
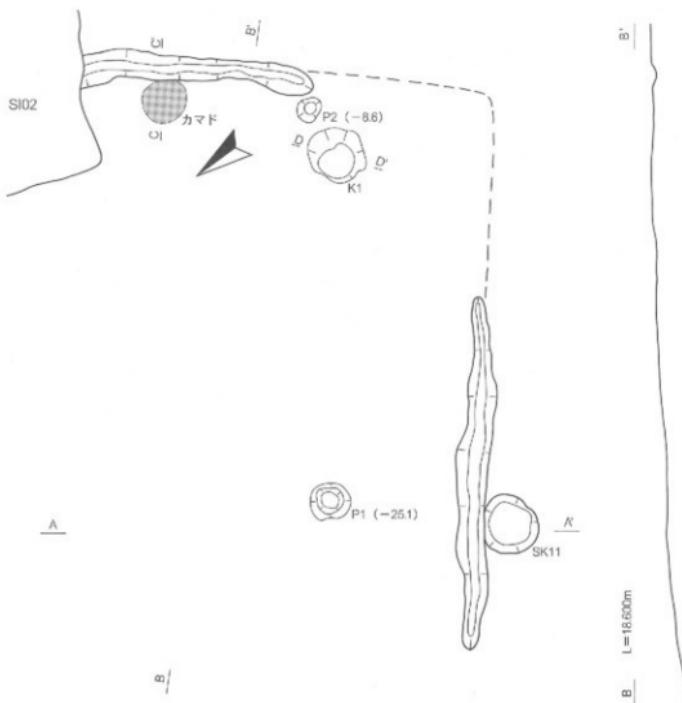
S I 03竪穴住居跡 (S X 101)・SK 11土坑 (第13図、写真図版6)

A区東半部、II A-13k・14kグリッドに位置し、IV層上面で検出された。開田時の削平により遺構の大半が削平され、底部が僅かに残存していた周溝の配置と焼土の広がりから検出当初は工房跡の可能性もあると考え精査を開始した。塗土付近から鍛冶関連の遺物が出土しなかったことと焼土が周溝脇に位置しており、その後の調査で他の竪穴住居がカマド下まで周溝を巡らす傾向があることから焼土はカマドの燃焼部焼土であると考え、竪穴住居跡であると判断した。住居南東部をS I 02に切られ、住居南西側周溝をSK 11を切っている。よって、新旧関係は(新) S I 02→S I 03→(旧) SK 11である。開田時の削平により、遺構の大半を消失している上に、S I 02に南東部を切られているため、平面形・規模ははっきりしないが、周溝の残存状況から、長軸7m前後、短軸4m以上の隅丸長方形を呈しているものと思われる。主軸方位はE-26°～S、床面積は不明である。壁・埋土の状況は上記のような検出状況のため不明だが、周溝は灰黄褐色土單層の自然堆積を呈している。床面は平坦で堅く締まる。周溝は幅20～38cm、深さ5～8cmを測る。床面施設は住居南東壁際より土坑(K 1)と柱穴を1基(P 2)、南西壁際より柱穴を1基(P 1)検出しており、P 1は位置的に七柱穴となり得るものと思われる。K 1土坑の平面形・規模は開口部径73×65cm、底部径41×40cmの楕円形状を呈する。断面形は逆台形形状を呈し、深さ16cmを測る。このK 1土坑の埋土は多量の焼土・ブロック・炭が混入し、磨滅した上師器片が出土している。カマドは南東壁中央に位置する。本体部の残存状況は不良で僅かに燃焼部焼土が残存するのみである。燃焼部は径53×52cmの円形を呈する、厚さ11cmの焼土が形成されている。煙道部は残存していないため不明である。遺物は周溝・K 1土坑を中心にして上師器片が9号袋1袋分強、須恵器片が3点出土している。このうち掲載した遺物は周溝より出土した上師器壺(74)・土師器壺2点(75・81)、K 1より出土した土師器壺(72)・土師器壺5点(76～80)、検出土面より出土した土師器壺(73)・土師器壺(80)である。

SK 11はS I 03の周溝に北壁の一部を切られているが、平面形は円形を呈すると思われる。規模は残存部分で開口部径73×65cm、底部径53×50cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ8cmを測る。埋土は暗褐色土の單層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土より土師器片が5点出土した。

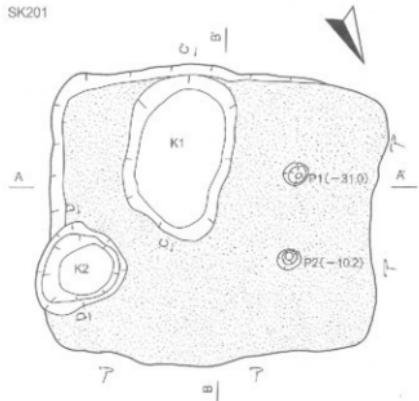
SK 101竪穴状遺構 (第14図、写真図版7)

A区東半部、II A-12j・12k・13j・13kグリッドに位置し、IV層上面で検出された。開田時の削平の影響で遺構の大半を消失し、僅かに貼床部分のみが残存している。平面形・規模ははっきりしないが、東壁は2.86m、南壁は3.24m残存していることと貼床の残存状況から、長軸3.9m、短軸3.4m以上の隅丸長方形ないし方形を呈しているものと思われる。床面積は残存部分で9.75m²を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東コーナー付近で最大13cmを測り、東壁は北に、南壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は黒褐色土を主体とした自然堆積で4層に細分された。床面は平坦で締まり、全面に貼床が施されている。床

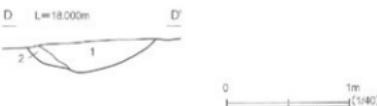


第13図 S103堅穴住居跡・SK11土坑

SK201



- SKI01
1. 10YR3/2褐色 しまり有 粘性有
にぶい黃褐色土・成合む
 2. 10YR2/2黒褐色 しまり有 粘性やや有
にぶい黃褐色土・多く含む
 3. 10YR7/6暗褐色 しまり有 粘性有
黒褐色土・入る。成合む
 4. 10YR2/2褐色 しまりやや有 粘性非常に有
明黄色土ブロック層と黒土層を少含む
 5. 10YR2/2黒 しまり有 粘性有
ブロックやや多く、供少量む



SKI01 K1

1. 10YR3/2褐色 しまり有 粘性やや有
にぶい黃褐色土・多く含む

SKI01 K2

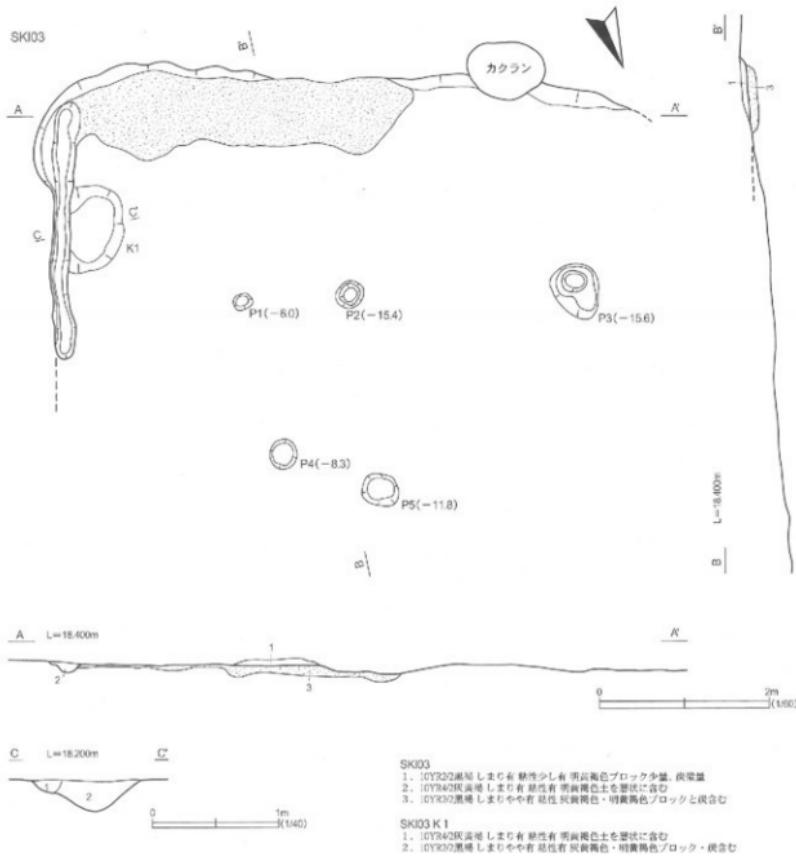
1. 10YR3/2褐色 しまりやや有 粘性非常に有
明黄色土ブロック層、深・植土層少含む
2. 10YR2/2黒 しまり有 粘性有
ブロックやや多く、少含む

第14図 SKI01竪穴状遺構

面施設は住居中央南よりと東壁際より土坑2基（K1・K2）と住居中央西よりから柱穴2基を（P1・P2）検出しており、P1・P2は位置的に主柱穴となり得るものと思われる。K1土坑の平面形・規模は開口部径199×124cm、底部径158×98cmの隅丸方形形状を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ24cmを測る。K2土坑の平面形・規模は開口部径115×100cm、底部径71×56cmの略円形状を呈する。断面形は張り鉢状を呈し、深さ27cmを測る。遺物は土師器片が小袋1袋分、須恵器片が1点出土している。このうち掲載した遺物は、埋土中より出土した土師器壺（82）である。

SKI03竪穴状遺構（第15図、写真図版6）

A区東半部、II Aグリッドに位置し、IV層上面で検出された。開田時の削平の影響で遺構の大半を消失し、僅かに粘床部分と周溝の一部のみ残存している。平面形・規模ははっきりしないが、東壁は1.05m、南壁は6.86m残存していることと、周溝の残存状況から、長軸7m前後、短軸3m以上の隅丸長方形形状を呈してい



第15図 SKI03堅穴状遺構

るものと思われる。床面積は不明である。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東コーナーで最大14cmを測り、東壁は北に、南壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は黒褐色土を主体とした自然堆積で3層に細分された。床面は平坦で綺まり、南北壁際の一部に貼床が施されている。床面施設は東壁中央より土坑1基(K1)と住居中央より北側から柱穴を5基(P1～P5)検出したが、P1～P3の3基は確実に伴うと思われるが、P4とP5が確実に伴うのかは疑問である。また、K1は周溝に切られていることと、埋土が貼床と同じ土であることから、床面土坑としたが、住居より一段階古い土坑の可能性も残されている。K1自体の平面形・規模は開口部径101×61cm、底部径76×49cmの円形状を呈する。断面形は掘り鉢状を呈し、

深さ24cmを測る。遺物は土師器片が13点、須恵器片が1点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器坏(83)である。

S K I 05 穴状遺構 (S B02・S D46A・B) (第16図、写真図版8)

A区東半部、II A-10n・10o・11n・11oグリッドに位置し、IV層上面で検出された。前述の通り開田時の削平により遺構の大半が削平され、底部が僅かに残存していた周溝と柱穴の配置と、カマド・炉等が検出されなかったことから竪穴状遺構であると判断した。開田時の削平により、遺構の大半を消失しているため、平面形・規模ははっきりしないが、周溝の残存状況から、長軸6.3m前後、短軸5.5m以上の隅丸方形状を呈しているものと思われる。床面積は不明である。壁・埋上の状況は上記のような検出状況のため不明である。床面は平坦で締まる。周溝は北東壁際と南コーナーを含む南東壁際より検出したが、上記のような検出状況のため、東コーナ付近に周溝が本来あったかどうかは不明である。規模は幅17~33cm、深さ4~9cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。床面施設は住居中央より柱穴を5基(P 1~P 5)検出しており、P 1~P 4の4基は位置的に主柱穴となり得るものと思われる。遺物は土師器片が32点、須恵器片と鉄製品(鉄鎌?)が各1点出土した。このうち掲載した遺物は周溝より出土したR P 1の土師器坏(84)と、P 5埋上中より出土した須恵器片(85)と、P 5検出時に出土した鉄鎌?(201)である。(84)の土師器坏は磨滅が著しいため、はっきりしないが、非クロロの平底鍋の坏であると思われる。

S K I 06 穴状遺構 (SK32) (第16図、写真図版8)

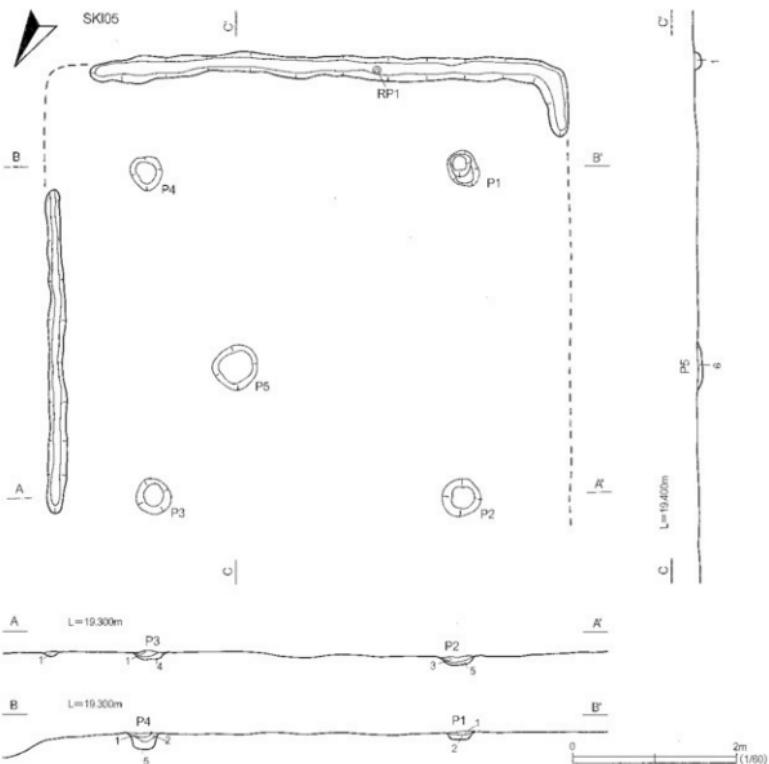
D区東半部、II A-14rグリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は十坑として精査を開始したが、遺構の規模が長軸2mを超えた上に調査範囲外にまで延びていることと、検出した部分からはカマド・炉等が検出されなかったことから竪穴状遺構であると判断した。調査区外に遺構が広がるため平面形・規模ははっきりしないが、北西壁は2.77m、南西壁は77cm残存していることから、少なくとも長軸3m、短軸1m以上の隅丸長方形ないし方形状を呈しているものと思われる。床面積は残存部分で1.01m²を測る。床面は平坦で堅く締まる。壁はやや外傾して立ち上がり、喫高は北西壁で21cm、南西壁で16cmを測る。埋土は上位は灰黄褐色土、下位はにぶい黄褐色土系を主体とした自然堆積で3層に細分された。床面は平坦で堅く締まる。遺物は土師器片が5点出土している。

S B01 据立柱建物跡 (第17図、写真図版9)

A区東半部、II A11P・11Q・12Pグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。2間(3.72m)×1間(3.02m)の北東-南西棟建物跡である。長軸方向はN-52°-Eである。桁行柱間は1.86m(6.1尺)、梁行柱間が3.02m(10尺)を測る。柱穴の平面形は楕円形を主体として一部方形状を呈し、規模は23~39cm、深さ17~33cmを測り、P 1・P 2・P 5からは径18~24cmの柱痕が確認されている。遺物は出土しなかった。

第2表 S B01柱穴観察表

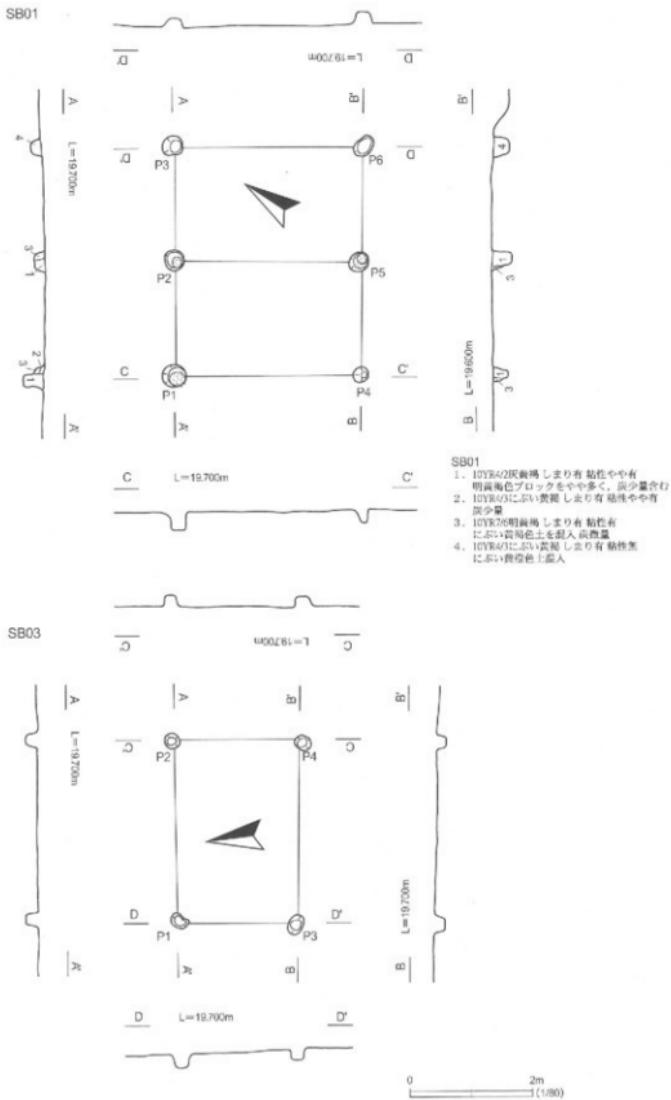
NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考	NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	39×37	33.0	楕円形		P4	28×23	24.0	楕円形	
P2	35×34	18.0	円形		P5	35×31	33.0	楕円形	
P3	36×36	17.0	方形状		P6	39×28	27.0	楕円形	



- SKI05**
1. 10YR6/3に似い黄褐色しまり有 粘性無 土被状に含む
 2. 10YR5/1褐色 しまり有 粘性やや有
に似い黄褐色土少量 褐鐵量
 3. 10YR2/6褐色 しまり有 粘性無 黄褐色上・灰含む
 4. 10YR5/4に似い黄褐色 しまり有 粘性少し有
褐鐵褐色上・灰含む 微少量
 5. 10YR8/6褐色地 しまり有 粘性無 土被状に似い黄褐色土・灰含む
 6. 10YR4/6に似い褐色 しまり有 粘性少し有
褐褐色上少量 褐鐵量

- SKI06**
1. 10YR7/2灰褐色 しまり有 粘性少し有
に似い黄褐色ブロック混入
 2. 10YR6/4に似い黄褐色 しまりやや有 粘性無
 3. 10YR6/4に似い黄褐色 しまり有 粘性有
灰褐色土含む

第16図 SKI05・06豎穴状遺構



第17図 SB01・03掘立柱建物跡

S B03櫛立柱建物跡（第17図）

A区東半部、II A 9 q + 10 q グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。SD38と重複関係にあり、同遺構に切られている。本遺構は1間（3.01m）×1間（2.00m）の東西棟建物跡である。長軸方向はE - 6° - Sである。梁行柱間が3.01m（10尺）、桁行柱間は2.00m（6.6尺）を測る。柱穴の平面形は方形状ないし梢円形状を呈し、規模は径19~28cm、深さ13.6~26cmを測る。遺物は出土しなかった。

第3表 S B03柱穴観察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	28×19	20.8	不整形	旧P125
P2	26×26	26.0	方形状	旧P129

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P3	35×24	18.7	梢円形	旧P126
P4	28×22	13.6	方形状	旧P134

S B04櫛立柱建物跡（第18図）

A区東半部、II A 10 P + 11 P グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。SD19跡と重複関係にあり、同遺構を切っている。本遺構は1間（2.55m）×1間（2.45m）の南北棟建物跡である。長軸方向はN - 20° - Wである。梁行柱間が2.55m（8.4尺）、桁行柱間は2.45m（8.1尺）を測る。柱穴の平面形は円形・梢円形とさまざままで、規模は径19~35cm、深さ9.4~30.8cmを測る。遺物は出土しなかった。

第4表 S B04柱穴観察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	19×19	9.4	円形	旧P123
P2	25×22	28.5	梢円形	旧P128

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P3	35×28	30.8	不整形	旧P131

S B05櫛立柱建物跡（第18図）

A区東半部、II A 9 o グリッドに位置し、IV層上面で検出した。1間（2.52m）×1間（2.49m）の南北棟建物跡である。長軸方向N - 6° - E、梁行柱間が2.52m（8.3尺）、桁行柱間は2.49m（8.2尺）を測る。柱穴の平面形は円形・梢円形を呈し、規模は径23~46cm、深さ4.6~30.8cmを測る。遺物は出土しなかった。

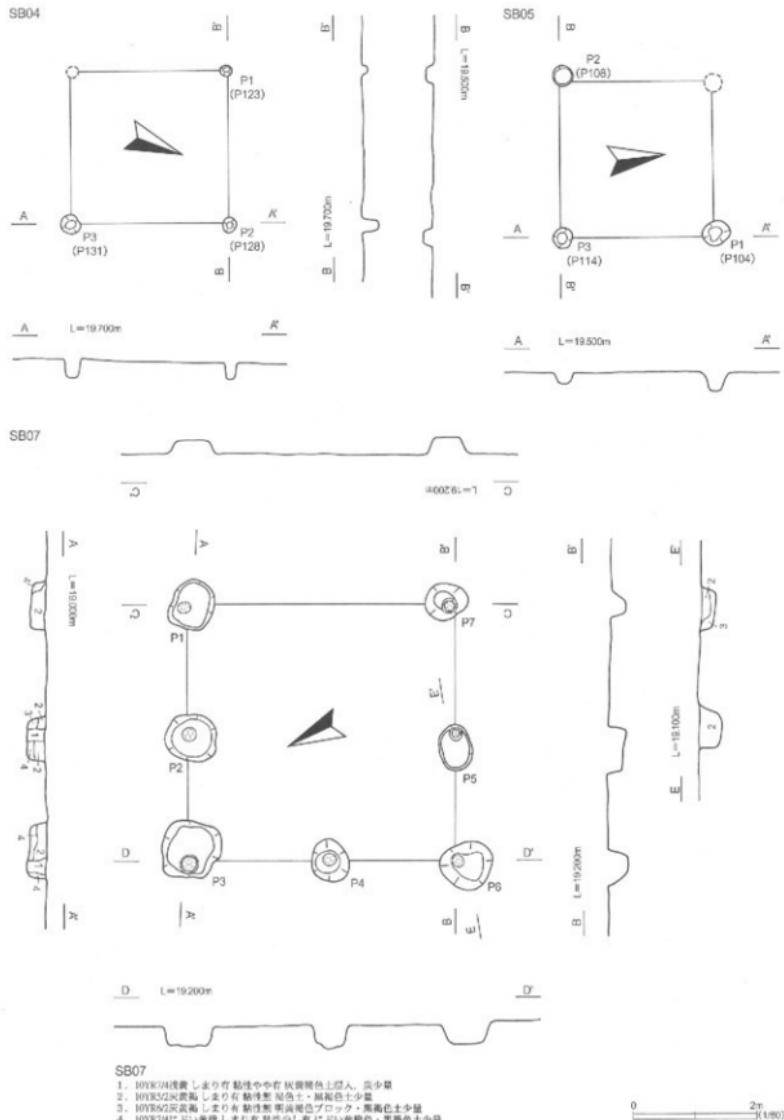
第5表 S B05柱穴観察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	46×40	30.8	梢円形	旧P104
P2	24×23	4.6	円形	旧P108

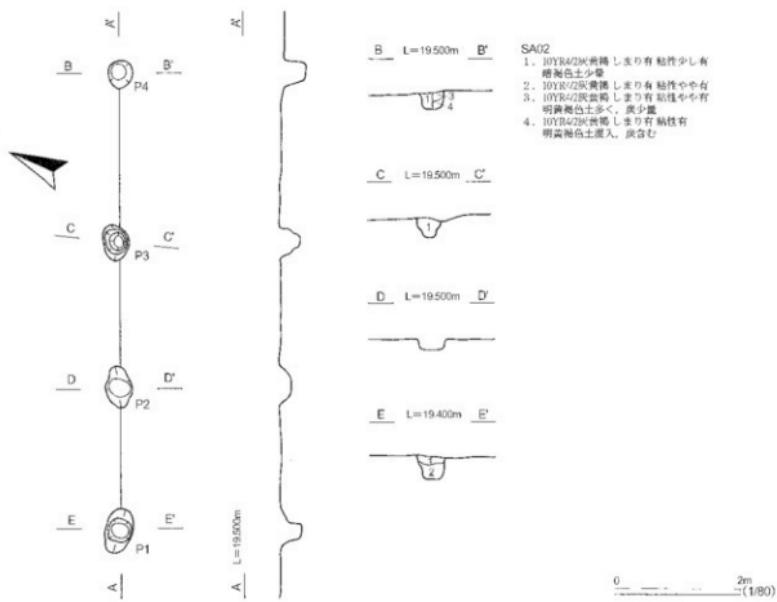
NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P3	35×31	16.2	円形	旧P114

S B07櫛立柱建物跡（第18図、写真図版9）

A区東半部、II A 16m + 16n + 17m + 17n グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。2間（4.30m）×2間（4.20m）の北北東 - 南南西棟建物跡である。長軸方向はN - 27° - Eである。梁行柱間が2.1~2.2m（6.9~7.2尺）、桁行柱間は2.1m（6.9尺）を測る。柱の掘り方の平面形は梢円形を主体として一部方形状を呈し、規模は径52~109cm、深さ22~37cmを測り、全ての柱穴から径20~28cmの柱模が確認されている。遺物は土師器片が17点、須恵器片が2点出土した。このうち掲載した遺物はP1掘り方より出土した須恵器



第18図 SB04・05・07握手柱建物跡



第19図 SA02柱穴列

坏(86)である。この須恵器坏は体部下半から底部にかけて残存しているもので、底面の切り離しは回転ヘラ切り無調整である。また、このSB07とSI02・SK101の主軸隙がほぼ同じであることは興味深い。

第6表 SB07柱穴観察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	80×68	26.0	方形状	
P2	86×82	31.0	楕円形	
P3	109×100	32.0	方形状	
P4	71×60	37.0	楕円形	

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P5	74×52	28.0	楕円形	
P6	81×79	33.0	楕円形	
P7	71×59	22.0	楕円形	

SA02柱穴列(第19図)

A区東半部、II A16°・17°グリッドに位置し、IV層上面で検出された。SD20溝跡と重複関係にあり、同造構に切られている。検出当初は4基の柱穴が一直線上に検出されたため、獨立柱跡物跡であると考え、

その軸線と対になる地区を重点的に探したが、北側では対応する柱穴は検出されず、南側は対応すると思われる場所が遺構もしくはSK12・13土坑が位置しているため、掘立柱建物跡で有る可能性が残されてはいるが確実ではないため、柱穴列として猪柵を進めた。北東～南西3間(7.5m)の柱穴列で、軸方向N～68°～Eを測る。柱間は2.35～2.8m(7.7～9.2尺)を測る。柱穴の平面形は楕円形を主体として不整形を呈し、規模は径38～73cm、深さ20.3～36.3cmを測り、平面プランでは確認できなかったが、断面と底面の状況から、P3・P4から径18～24cmの柱痕が確認された。遺物はP1より上師器壺片が4点、P3より上師器片が2点出土している。

第7表 SA02柱穴観察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考	NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	73×43	36.3	楕円形		P3	60×40	30.3	楕円形	
P2	68×43	20.7	不整形		P4	49×38	30.6	楕円形	

S E01井戸(SK20)(第20図、写真図版10)

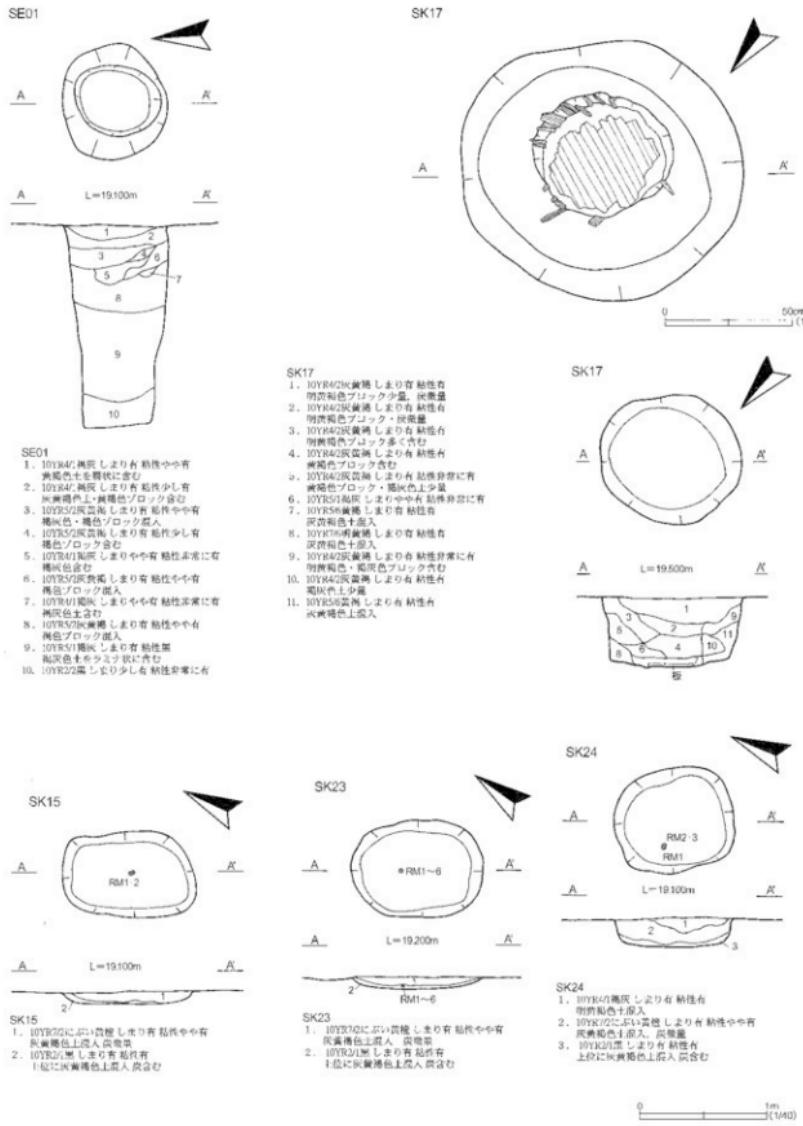
A区東半部、II A12 Qグリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は円形状を呈し、開口部径90×84cm、底部径56×48cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ162cmを測る。埋土は上位は褐灰色、中位は灰黄褐色土、下位は黒色土を主体とした自然堆積で10層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土上位から摩滅した上師器片が6点出土している。このうち掲載した遺物は埋土上位より出土した底部に木葉痕のある上師器壺(87)で、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整が施されている。

S K15墓壙(第20図、写真図版10)

A区東半部、II A14 Pグリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の上坑であると思い精査を開始したが、埋土が人為堆積を呈し、底面から古錢が2枚出土していることから、土坑ではなく墓壙の底部付近が削平を受けずに残存したもので、底面出土の古錢は六道銭であると判断した。平面形・規模は削丸方形形状を呈し、開口部106×69cm、底部91×54cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は8～10cmを測る。埋土は上位はにぶい黄褐色、下位は黒色土を主体とした人為堆積を呈し、2層に削分された。底面は概ね平坦である。遺物は底面近くより、六道銭に使用されたと思われる古錢2枚と埋土中より上師器片が6点出土している。このうち掲載したのは底面近くより出土したRM1の嘉祐通寶(209)とRM2の天禧通寶(210)の古錢2枚である。

S K17墓壙(第20図、写真図版10)

A区東半部、II A10 P・10 Qグリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の上坑であると思い精査を開始したが、底面より棺桶の底板ならびに側板が直立した状態で出土したことから、土坑ではなく墓壙であると判断した。平面形・規模は円形状を呈し、開口部径110×105cm、底部径89×82cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は50～55cmを測る。埋土は上位は灰黄褐色土、下位は褐灰色土、側面は黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、11層に削分された。底板は約45×38cm、側板は高さ5～20cm程度残存していた。底面は概ね平坦だが、棺桶のあった部分は他より2cmほど下がっている。以上のことから断面観察と棺桶の底板、側板の残存状況から中央付近に径50cm前後の円形状を呈する棺桶が設置されていたものと思わ



第20図 SE01井戸跡、SK15・17・23・24墓縫

れる。遺物は摩滅した土師器片が15点出土しているが、本遺構に伴うものではないと思われる。

S K22墓壙（第21図、写真図版11）

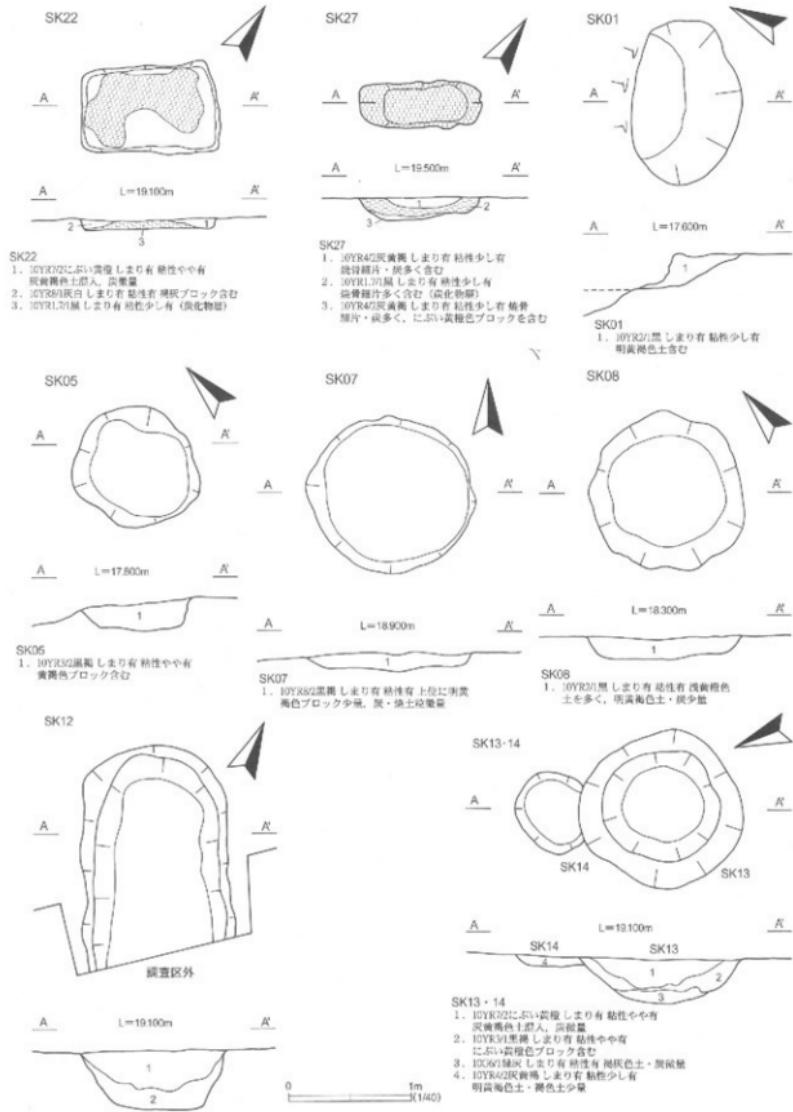
A区東半部、II A14 o グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の土坑であると思い精査を開始したが、埋上が炭を主体として、焼骨片と焼土ブロックが含まれていることから、火葬墓の底部付近が削平を受けずに残存したものであると判断した。平面形・規模は方形状を呈し、開口部112×72cm、底部107×66cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は7～9cmを測る。埋土は上位はにぶい黄橙色、下位炭化物層を主体とした人為堆積を呈し、3層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より摩滅した土師器片が9点出土している。

S K23墓壙（第20図、写真図版10・11）

A区東半部、II A14 o・P グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の土坑であると思い精査を開始したが、埋上が人為堆積を呈し、底面から古銭が6枚まとまって出土していることから、土坑ではなく墓壙の底部付近が削平を受けずに残存したもので、底面出土の古銭は六道銭であると判断した。平面形・規模は隅丸長方形を呈し、開口部径104×77cm、底部径86×63cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は8～10cmを測る。埋土は上位はにぶい黄橙色、下位は黒色土を主体とした人為堆積を呈し、2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は底面近くより、六道銭に使用されたと思われる占銭が6枚と埋土中より摩滅した土師器片が小袋1袋分、須恵器片が5点出土している。このうち掲載したのは底面近くより出土したRM 1～6の古銭6枚である。6枚が重なるように出土したが、取り上げ段階で分離可能であったので上位のものから順番にRM番号をつけて取り上げている。これらの古銭の内訳はRM 1の元豐通寶(203)、RM 2の元祐通宝(204)、RM 5の聖宋元寶？(207)、RM 6の熙寧通寶(208)等の北宋銭が各1枚と、永樂銭2枚(RM 3(205)・RM 4(206))である。

S K24墓壙（第20図、写真図版11）

A区東半部、II A13 q・r グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の土坑であると思い精査を開始したが、埋土が人為堆積を呈し、底面から古銭が6枚まとまって出土していることから、土坑ではなく墓壙の底部付近が削平を受けずに残存したもので、底面出土の古銭は六道銭であると判断した。平面形・規模は隅丸長方形状を呈し、開口部径91×82cm、底部径79×71cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は20～24cmを測る。埋土は上位は褐灰色土、中位はにぶい黄橙色、下位は黒色土を主体とした人為堆積を呈し、3層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は六道銭に使用されたと思われる古銭6枚と埋土中より摩滅した土師器片が3点出土している。このうち掲載したのは底面近くより出土したRM 1・RM 2・RM 3の6枚の古銭(211～216)で、RM 1(211～214)は4枚が密着していたものを室内整理時に分離し、出土時に上にあったものから順番に掲載番号をつけている。RM 2(215)・RM 3(216)はRM 1のほぼ真下から出土し、本来はRM 1と一連のものであると思われる。これらの古銭の内訳は元豐通寶(211)、祥符通寶(212)、聖宋元寶(213)、熙寧元寶(215)等の北宋銭が各1枚と、不明古銭(214)と永樂通寶(216)各1枚である。



第21図 SK22-27基壙, SK01-05-07-08-12-13-14土坑

S K27墓壙（第21図、写真図版11）

A区東半部、II A11 9グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出当初は単独の土坑であると思い精査を開始したが、埋土が炭を主体として、焼骨片と焼土ブロックが含まれていることから、火葬墓の底部付近が削平を受けずに残存したものであると判断した。平面形・規模は隅丸長方形状を呈し、開口部径99×40cm、底部径66×31cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は12~18cmを測る。埋土は上位は灰黄褐色土、中位は炭化物層、下位は灰黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、3層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は摩滅した土師器片が5点出土している。

S K01土坑（第21図、写真図版12）

A区西半部、II A 2 8グリッドに位置し、IV層上面で検出された。本遺構は開口時の削半によって北半部を消失しているため、平面形・規模ははっきりせず、隣接するSD02Aとの新旧関係は不明ではあるが、状況から見てSD02Aよりは古い遺構であると思われる。平面形は梢円形状を呈するものと思われ、規模は残存部分で開口部径133×89cm、底部径103×44cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は南壁で最大25cmを測り、北側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は黒色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K05土坑（第21図）

A区西半部、II A 5 jグリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は円形状を呈し、開口部径106×93cm、底部径89×72cmを測る。断面形は錐状を呈し、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K07土坑（第21図、写真図版12）

A区東半部、II A10 kグリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径139×129cm、底部径116×111cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が13点出土している。

S K08土坑（第21図）

A区東半部、II A10 kグリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径128×126cm、底部径94×92cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さ18cmを測る。埋土は黒色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が17点出土している。

S K12土坑（第21図、写真図版12）

A区東半部、II A16 o・17 o・17 Pグリッドに位置し、IV層上面で検出された。南側が調査区外に延びているため平面形・規模ははっきりしない。検出段階で調査区外に延びている土坑として認識し、若干調査区を拡張しておおよその形をつかもうとしたが、予想より遙かに規模が大きく、土坑ではなく跡溝ないし掘跡の可能性も考え調査を進めたが、これ以上の拡張は隣接する用水路が決壊するおそれがあったので中止せざるを得なかった。少なくとも規模・形状・埋土の状況が結果的に本遺跡で検出した溝・堀跡に類似しており、現段階では土坑として報告するものの、依然として掘跡の可能性が高いと思われる。平面形は長楕円状を呈

し、規模は残存部分で開口部172×116cm、底部146×71cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ50cmを測る。埋土は上位は黒褐色土下位は緑灰色土を主体とした自然堆積で2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が6点出土している。

S K13・14土坑（第21図、写真図版12・13）

A区東半部、II A16 P グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出段階でS K13がS K14を切っているのを確認していたので、新IH関係は（新）S K13→（旧）S K14である。

S K13の平面形・規模は円形を呈し、開口部径134×129cm、底部径66×59cmを測る。断面形は半円状を呈し、深さ37cmを測る。埋土は上位にはぶい黄褐色土、中位は黒褐色土、下位は緑灰色土を主体とした自然堆積で3層に細分された。底面は平坦というよりは若干丸底風を呈している。遺物は埋土中より土師器片が16点出土している。

S K14の平面形・規模は南西部をS K13に切られているためはっきりしないが、平面形は橢円形を呈するものと思われ、残存部分の規模は開口部径65×61cm、底部径55×45cmを測る。断面形は丸底状を呈し、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色土の單層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K18土坑（第22図）

A区東半部、II A12 Q グリッドに位置し、IV層上面で検出された。東側を開田時の削平により消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、平面形は橢円形を呈するものと思われ、残存部分の規模は開口部径91×87cm、底部径44×43cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さ26cmを測る。埋土は上位は黒褐色土、下位にはぶい黄褐色土を主体とした自然堆積で2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が19点出土している。

S K19土坑（第22図、写真図版13）

A区東半部、II A12 Q グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は橢円形を呈し、開口部径91×80cm、底部径33×31cmを測る。断面形は半円状を呈し、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色土の單層で自然堆積を呈する。底面は平坦というよりは丸底風である。遺物は埋土中より土師器片が13点出土している。

S K21土坑（第22図、写真図版13）

A区東半部、II A12 r・12 s グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は橢円形を呈し、開口部径169×121cm、底部径71×50cmを測る。断面形は半円状を呈し、深さ33cmを測る。埋土は上位は黒褐色、中位は褐灰色、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積で5層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が10点出土している。

S K26土坑（第22図、写真図版13）

A区東半部、II A12 Q グリッドに位置し、IV層上面で検出された。開田時の削平により北壁の一部ならびに遺構の上部を消失しているが、残存部分の平面形・規模は圓丸方形を呈し、開口部105×73cm、底部86×63cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さ8cmを測る。埋土ははぶい黄褐色土の單層で自然堆積を呈す

る。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K29土坑（第22図、写真図版14）

A区東半部、II A 9 P グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径64×62cm、底部径57×46cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈し、底部付近には長さ14cm前後の礫が2個出土している。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が2点出土している。

S K30土坑（第22図、写真図版14）

A区東半部、II A 10 P グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は橢円形状を呈し、開口部径71×41cm、底部径56×29cmを測る。断面形は深鉢状を呈し、深さ17cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の單層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K31土坑（第22図、写真図版14）

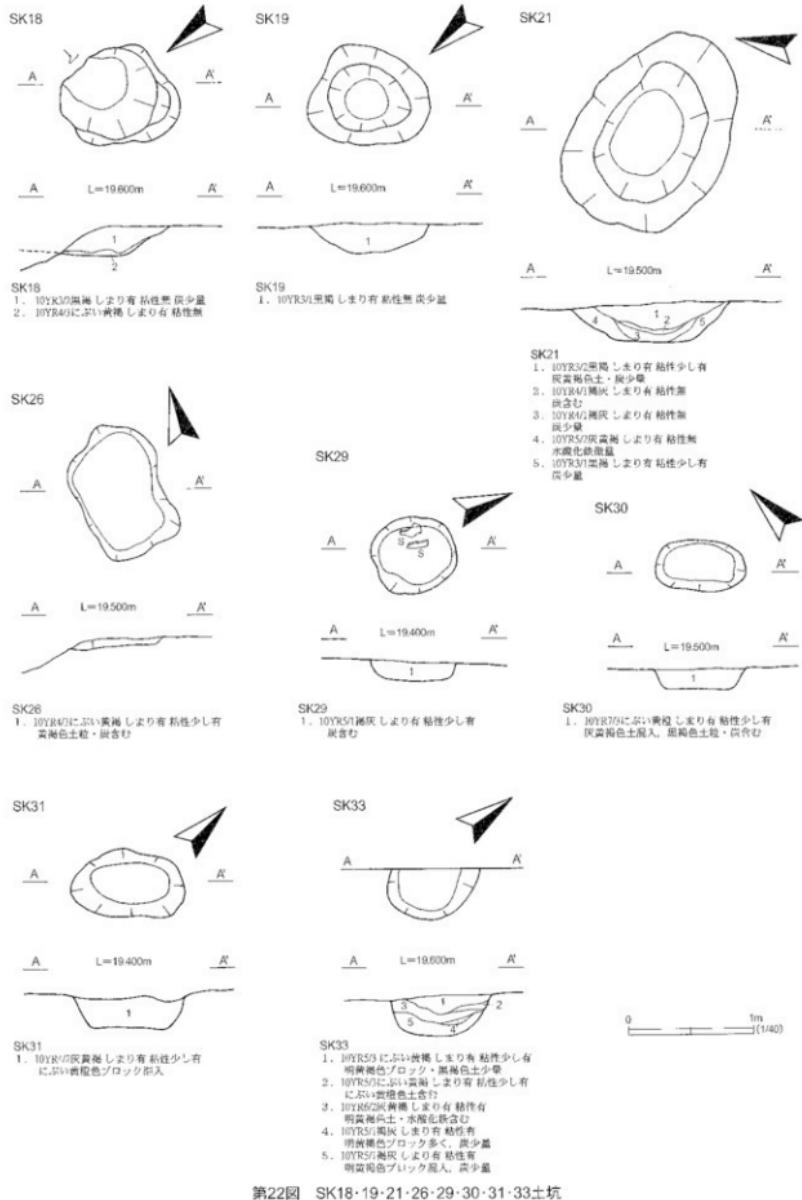
D区東、II A 14 r グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形・規模は橢円形状を呈し、開口部径90×55cm、底部径62×33cmを測る。断面形は深鉢状を呈し、深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が10点出土している。

S K33土坑（第22図、写真図版14）

D区西、II A 12 s グリッドに位置し、IV層上面で検出された。北半部が調査区外に延びているため平面形・規模ははっきりしないが、平面形は円形ないし橢円形状を呈するものと思われ、規模は残存部分で開口部径70×42cm、底部径49×34cmを測る。断面形は深鉢状を呈し、深さ34cmを測る。埋土は上位はにぶい黄褐色土、中位は灰黄褐色土、下位は褐灰色土を主体とした自然堆積で5層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

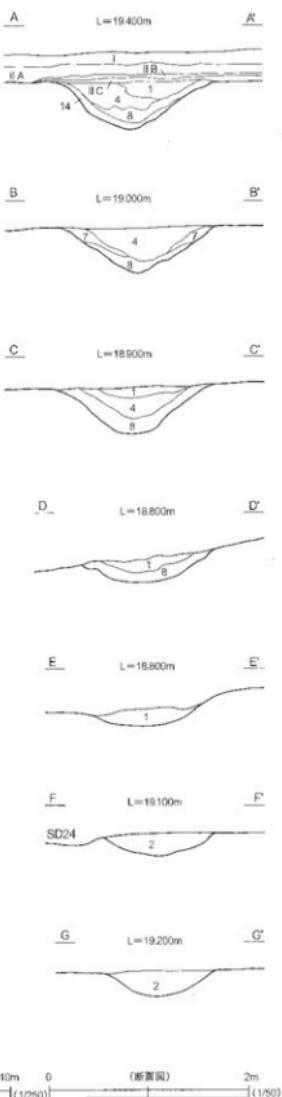
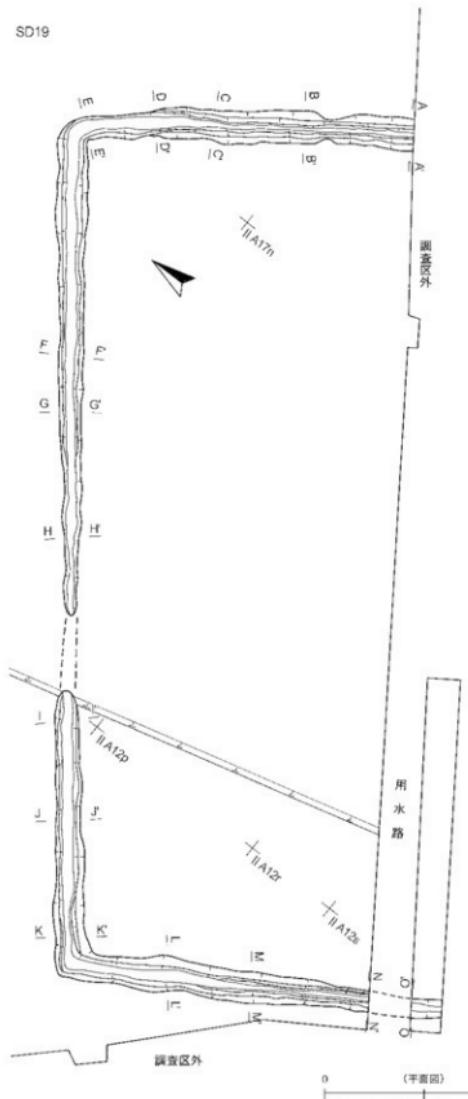
S D19壙跡（第23・24図、写真図版15・16）

A区東半部、II A 9 q～II A 18 n グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。北東側でSD18に切られ、SD21を切り、北西侧でSD24に切られ、南西側でSD30・31・35を切っている。よって新旧関係は（新）SD18・24→SD19→（旧）SD21・30・31・35である。平面形は南東側が調査区外に延びているためはっきりしないが、南東側が開放するコの字状を呈しており、規模は北西側で中央部分が削平で消失しているものの全長約43.8m、幅約0.7～1.7m、北東・南西側は南端が調査区外にのびている為、全容は不明だが、残存部分で北東側は全長17.60m、幅約1～1.75m、南西側は全長19.60m、幅約1～1.90mを測る。以上のことをから北東～南西方向約44m、北西～南東方向は約20m残存するコの字なし方形形状の壙であると判断した。主軸方向は北東～南西方向（N-52°-E）である。横断面形は逆台形ないし半円状を呈し、深さは2.8～53.5cmを測り、北西側は北側に向かうにつれて深くなっている、高低差は93.1cmを測り、南東方向は北側に向かうにつれて低くなっている、高低差は25.7cmを測り、南西側は北側に向かうにつれて低くなっている、高低差は5.7cmを測る。埋土は北東側は上位が黄褐色系土、中・下位灰黄褐色系土、北西側が上位が黒褐色、中・下位は灰黄褐色土、南西側は灰黄褐色土主体の自然堆積で21層に細分したが、北西・南西側はともかく、

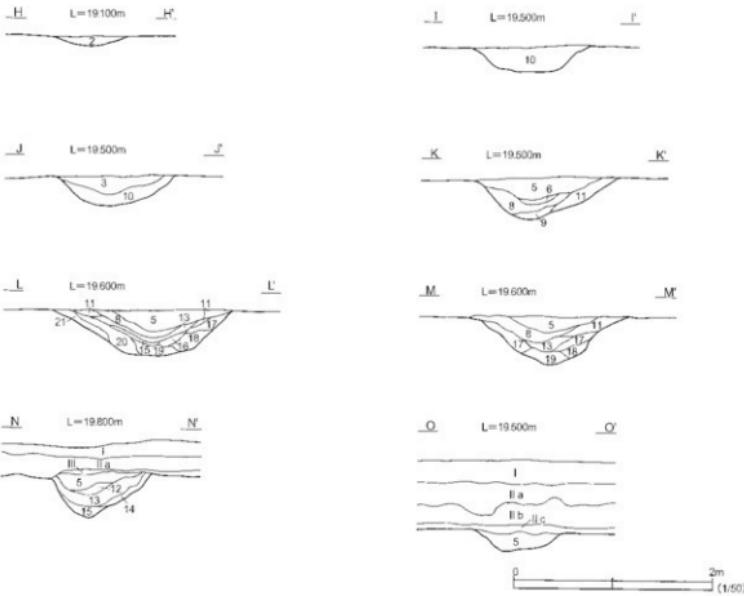


第22図 SK18・19・21・26・29・30・31・33土坑

SD19



第23図 SD19堀跡 (1)



- SD19
1. JOYRA/3に沿う黄褐色・黒褐色・灰白色の粘性層
 2. JOYRA/2の黒褐色・灰白色の粘性層
 3. JOYRA/3の黒褐色・灰白色の粘性層
 4. 2.5Y7/4淡黄色の粘性層
 5. 2.5Y7/4淡黄色の粘性層
 6. JOYRA/3の黒褐色・灰白色の粘性層
 7. JOYRA/4の黒褐色・灰白色の粘性層
 8. JOYRA/2の黒褐色・灰白色の粘性層
 9. JOYRA/1の灰褐色・灰白色の粘性層
 10. JOYRA/4の灰褐色・灰白色の粘性層
 11. JOYRA/3の灰褐色・灰白色の粘性層
 12. JOYRA/4/3Cに沿う黒褐色・灰白色の粘性層
 13. JOYRA/4の灰褐色・灰白色の粘性層
 14. 2.5Y4/4の灰褐色・灰白色の粘性層
 15. JOYRA/2の灰褐色・灰白色の粘性層
 16. JOYRA/3の灰褐色・灰白色の粘性層
 17. JOYRA/5の灰褐色・灰白色の粘性層
 18. JOYRA/2の灰褐色・灰白色の粘性層
 19. JOYRA/1の灰褐色・灰白色の粘性層
 20. JOYRA/3の灰褐色・灰白色の粘性層
 21. JOYRA/2の灰褐色・灰白色の粘性層

第24図 SD19掘跡 (2)

北東側の埋土上位は黄褐色ブロック土体の人为堆積状を呈しており、他と異なる状況を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が2点、須恵器片が33点、常滑産の陶器が9号袋1袋分出土している。出土傾向としては本造構がS 101を北側で切っているためからか、北側では須恵器片のみ出土し、南側から若干土師器・須恵器片が含まれるが、常滑片を主体として出土している傾向が見られる。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した須恵器大甕破片2点(98・99)、須恵器蓋の破片(100)、須恵器高台坏(101)、須恵器坏(102)と常滑大甕の破片2点(132・133)である。

S D01溝跡（第25図、写真図版17）

A区西半部、I A19 c グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。全長4.31m、幅38~60cmを測る。方向は西北西-東南東方向(E-29°-S)である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは1.7~8.1cmを測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は1.2cmを測る。埋土は緑灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D02A・B・C・D・E 溝跡（第25~27図、写真図版18）

A区西半部、I A18 c ~ II A 3 g グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。検出当初から複数の溝が重複していることが分かっていたが、平面プランでは確実に重複関係を把握できなかったため、サブトレンドの断面観察から新旧関係を判断し検査を開始した。ただし S D02 A ~ C は近接してはいるものの、直接的な切り合い関係はないので、同時に検査を行っている。S D02 D は S D02 A ~ C に切られ、S D02 E は S D02 D に切られている事から、新旧関係は(新) S D02 A ~ C → S D02 D → (旧) S D02 E で、S D02 A ~ C は直接的な重複関係がないので新旧関係は不明である。また、S D02 D は北側に隣接する花泉町教育委員会調査区においても続きの部分が確認されている。

S D02 A は全長27.66m、幅0.49~2.11mを測る。方向は北西-南東方向(W-44°-E)である。横断面形は逆台形状を呈し、深さは1.5~41.8cmを測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は25.9cmを測る。埋土は灰色の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が4点、須恵器片が16点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した木製櫛(302)と木製下駄(303)である。(302)の木製櫛の材質はブナ属、(303)の下駄の材質は台部がハンノキ属、差し歯部分がクリであることが、分析の結果判明した。詳細は付編2を参照して頂きたい。

S D02 B は全長16.91m、幅40~70cmを測る。方向は北西-南東方向(W-37°-N)である。横断面形は半円状を呈し、深さは1.7~14.9cmを測り、北西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は5.7cmを測る。埋土は黄灰色土の単層の自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D02 C は全長11.50m、幅46~88cmを測る。方向は西北西-東南東方向(W-14°-N)である。横断面形は半円状を呈し、深さは1.3~12.8cmを測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.6cmを測る。埋土は上位は黄灰色土、下位は褐灰色土の自然堆積で、2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D02 D は全長27.88m、幅0.94~1.84mを測る。方向は北西-南東方向(W-32°-N)である。横断面形は半円ないし逆台形状を呈し、深さは3.0~15.5cmを測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は11.5cmを測る。埋土は上位はにぶい黄褐色土、中位は黄灰色土、下位はにぶい黄褐色土の自然堆積で4層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が22点出土した。このうち掲載した遺物は埋

土中より出土した、土師器环2点(88・89)と須恵器大甕(90・91)、煙管(202)と碗(301)である。(301)の木製碗の材質はブナ属であることが、分析の結果判明した。詳細は付録2を参照して頂きたい。

また本遺構と一連の溝の可能性が高いと思われる溝がA区東半部北端で確認されており、同一の遺構名で精査を行った。この溝は両端が調査区外に延びているため、全容ははっきりしないが、総長16.55m、幅0.7~1.6mを測る。方向はほぼ東西方向(W-10°-N)である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.3~83.6cmを測り、西側に向かうにつれて低くなっている、高低差は29cmを測る。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D02Eは全長12.95m、幅59~96cmを測る。方向は東西方向(W-10°-N)である。横断面形は半円状を呈する、深さは2.3~7.3を測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は6.8cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D03溝跡（第25図、写真図版17）

A区西半部、IA20g・20hグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。北西壁の一部を柱穴状土坑P19に切られている。全長5.7m、幅33~47cmを測る。方向は北東・南西方向(N-30°-E)である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.6~5.5cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は14.4cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が4点出土した。

S D04溝跡（第27図、写真図版17）

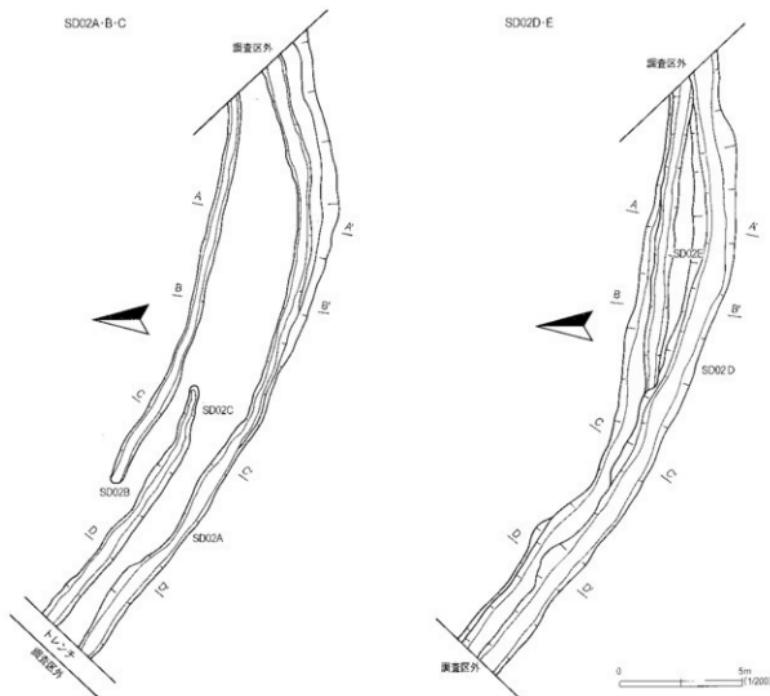
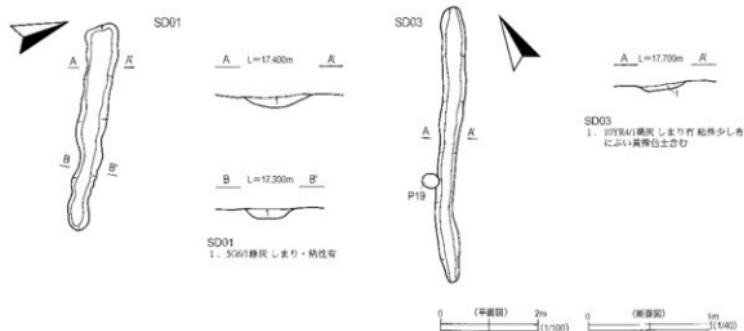
A区西半部、IA20h・IIA1hグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。北側で柱穴状土坑P211に、南側で同P212に切られている。平面形は南側から見ると「く」の字状を呈し、全長4.13m、幅30~64cmを測る。方向は北東・南西方向(N-68°-E)である。横断面形は形を呈し、深さは1.5~11.1cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.1cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は多少凹凸が見られる。遺物は埋土中より土師器片が3点出土した。

S D07A・B・08溝跡（第28図、写真図版19）

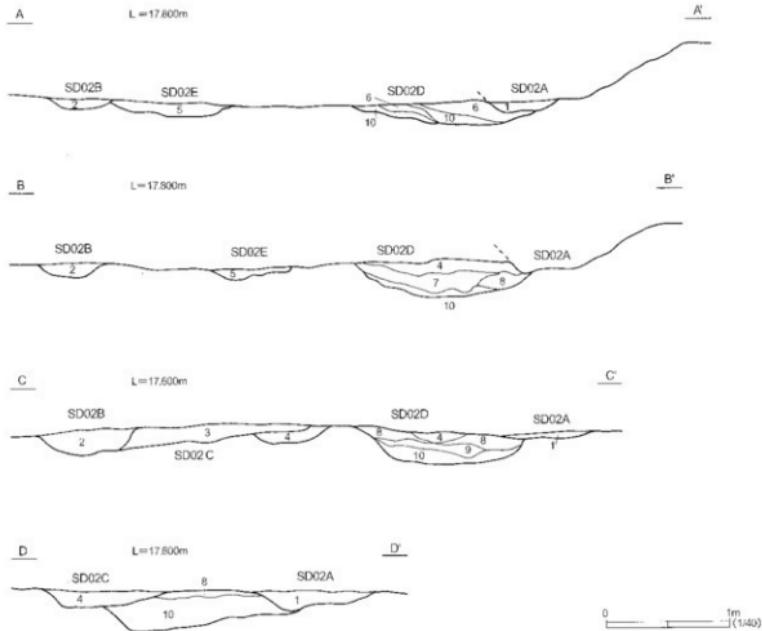
A区西半部、IA20k・20i・IIA1i・1j・2j・2k・3kグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。検出当初はSD07と08の2条の溝が平行して検出したことから共通のベルトを用いて同時に精査を行ったが、精査の過程でSD07に新H2時期あることが判明したので新しい方をA、古い方をBとしたが、SD07BはSD07Aに遺構の大半を切られているため同時に精査を行っている。

S D07Aは全長24.61m、幅20~85cmを測る。方向は北西-南東方向(W-39°-N)である。横断面形は半円状を呈し、深さは1.3~14.8cmを測り、北西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は39.9cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が27点出土した。

S D07Bは残存部分で全長8.87m、幅29~46cmを測る。方向は北西-南東方向(W-36°-N)である。横断面形は半円状を呈し、深さは1.6~2.4cmを測り、北西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は3.7cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。



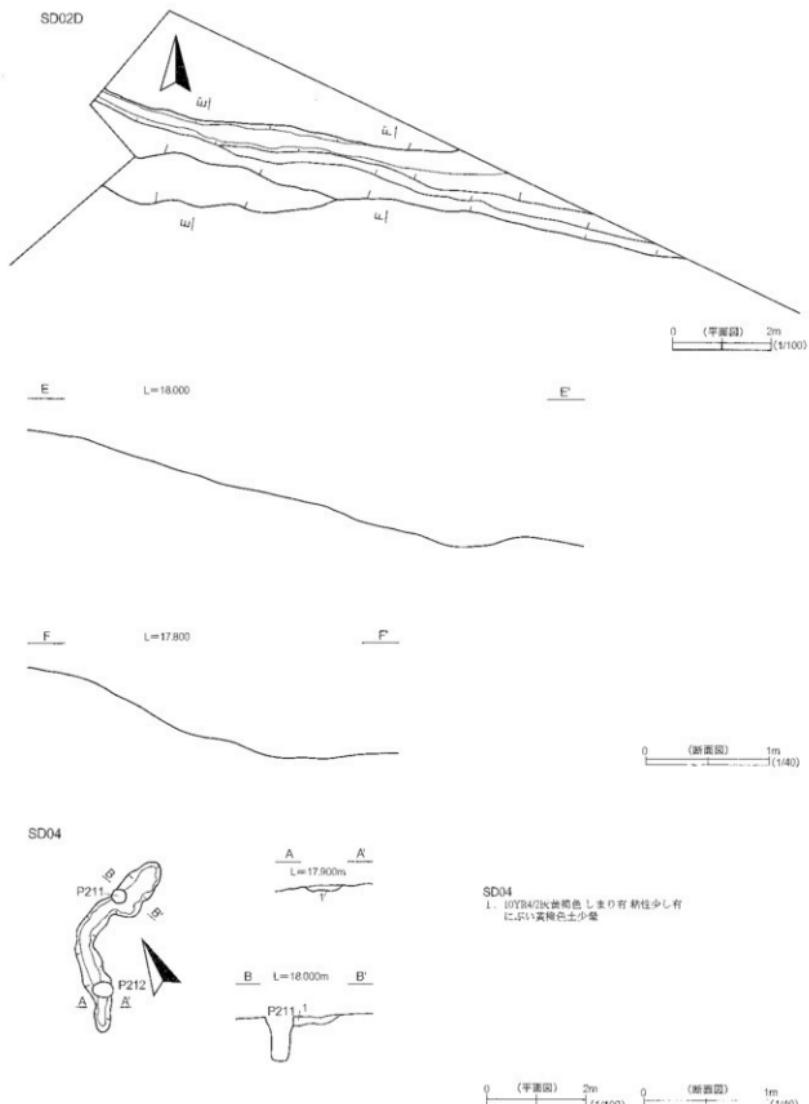
第25図 SD01、02A・B・C・D・E(1)、03溝跡



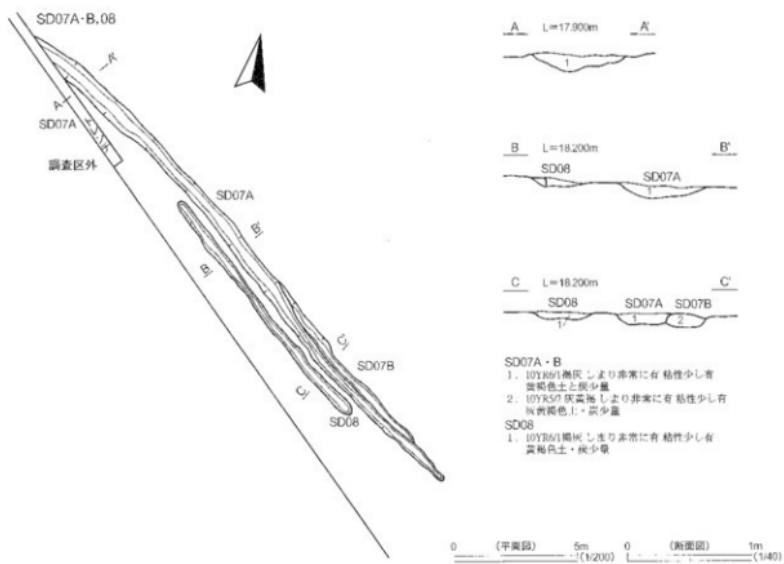
- SD02A・B・C・D・E
1. 3YR10R(1-4)青褐色有 硫黄色砂がラミナ状に入る
 2. 2.5Y5/5黄灰 しまり・粒状有 單褐色土質入
 3. 10YR5/2黄灰 しまり・粒性無 明褐色土質入
 4. 2.5Y5/5黄灰 しまり・粒性有
 5. 10YR5/2黄灰 しまり・粒性無
 6. 10YR5/2(3-5)灰褐色 しまり・粒性無 硫黄色土少量
 7. 10YR5/2(3-5)灰褐色 しまり・粒性無 明赤褐色、褐灰色土多く含む
 8. 2.5Y4/4黄灰 しまり・粒性有 黄褐色化鉄合せ
 9. 10YR5/2(3-5)灰褐色 しまり・粒性無
 10. 10YR5/2(3-5)灰褐色 しまり・粒性無 褐灰色土層入

第26図 SD02A・B・C・D・E溝跡(2)

S D08は全長11.14m、幅20~50cmを測る。方向は北西-南東方向(W-41°-N)である。横断面形は浅丸底状を呈し、深さは1.4~3.9cmを測り、北西方向に向かうにつれて深くなっている。高低差は18.2cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が9点出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器片2点(92・93)である。



第27図 SD02D(3)、04溝跡



第28図 SD07A・B、08溝跡

SD10A・B、16溝跡（第29・30図、写真図版20）

A区西半部、II A 4 k・4 l・5 i・5 j・5 k グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。検出当初はSD10がSD16を切っているためSD10から精査を開始したが、その過程でもう一条、SD10に切られている溝を検出し、その溝をSD10Bとして同時に精査を行った。よって新旧関係は（新）SD10→（旧）SD10B・16であるが、SD10BとSD16との新旧関係はSD10Bが西側を旧河道に切られている上に、直接的な切り合ひ関係がないことから不明である。

SD10Aは中央付近を断崖に切られているが、検出した範囲では全長17.41m、幅0.92~1.87mを測る。方向は東北東~西南西方向（E-17°-N）である。横断面形は基本的には逆台形を呈するが、暗渠より南側で、SD16より北側では、半円形を呈している。特にこの部分では東壁にテラス状の緩斜面があることから、精査時には認識できなかったが、SD16の残存部分がこれに当たる可能性が想定される。深さは23.4~51.2cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は83cmを測る。埋土は上位は黄灰色ないし灰黄褐色土、下位は褐灰色土の自然堆積を呈し、7層に細分された。底面は概ね平凹である。遺物は埋土中より上部器片が小袋1袋分、石鐵が1点出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した上部器坏2点(94・95)、石鐵(401)である。

SD10Bは残存部分で全長1.98m、幅42~50cmを測る。方向は東北東~西南西（E-22°-N）である。横断面形は逆台形を呈し、深さは2.9~9.8cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなり、高低差は5.7cm

を測る。埋土は褐灰色の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D16は北側を S D10Δに、南側が調査区外に延びているため全容がはっきりとしないが、残存部分で全長2.84m、幅33~50cmを測る。方向は東北東-西南西（E-21°-N）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは1.7~10.1cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は11.6cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D14溝跡（第31図、写真図版19）

A区西半部、II A 3 j グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。南端部を平成13年度に行われた試掘トレレンチによって切られているため全容がはっきりしないが、残存部分で全長12.56m、幅35~69cmを測る。方向は北北東-南南西（N-21°-E）である。横断面形は半円ないし浅丸底状を呈し、深さは1.1~5.4cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は66.5cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は全面にわたって掘削痕と思われる凹凸が確認されている。遺物は埋土中より土師器片が4号袋1袋分出土した。

S D15溝跡（第30図、写真図版19）

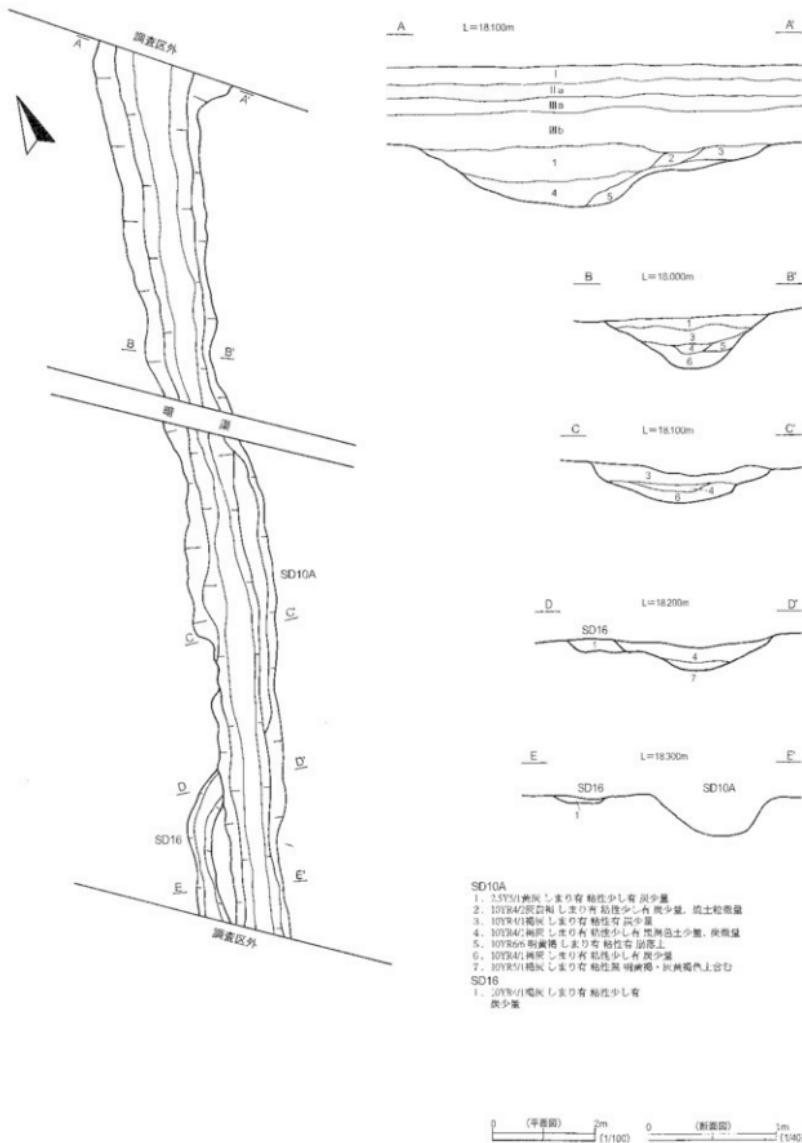
A区東半部、II A 4 1 グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。本道構は平成13年に行われた試掘調査のトレレンチに遺構の大半を消失しているため全容がはっきりしないが、残存部分で全長0.85m、幅22~36cmを測る。方向は東北東-西南西（E-11°-N）である。横断面形は半円状を呈し、深さは4.6~13.2cmを測り、西に向かうにつれて深くなっている、高低差は12.6cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D18A・B溝跡（第30図、写真図版21）

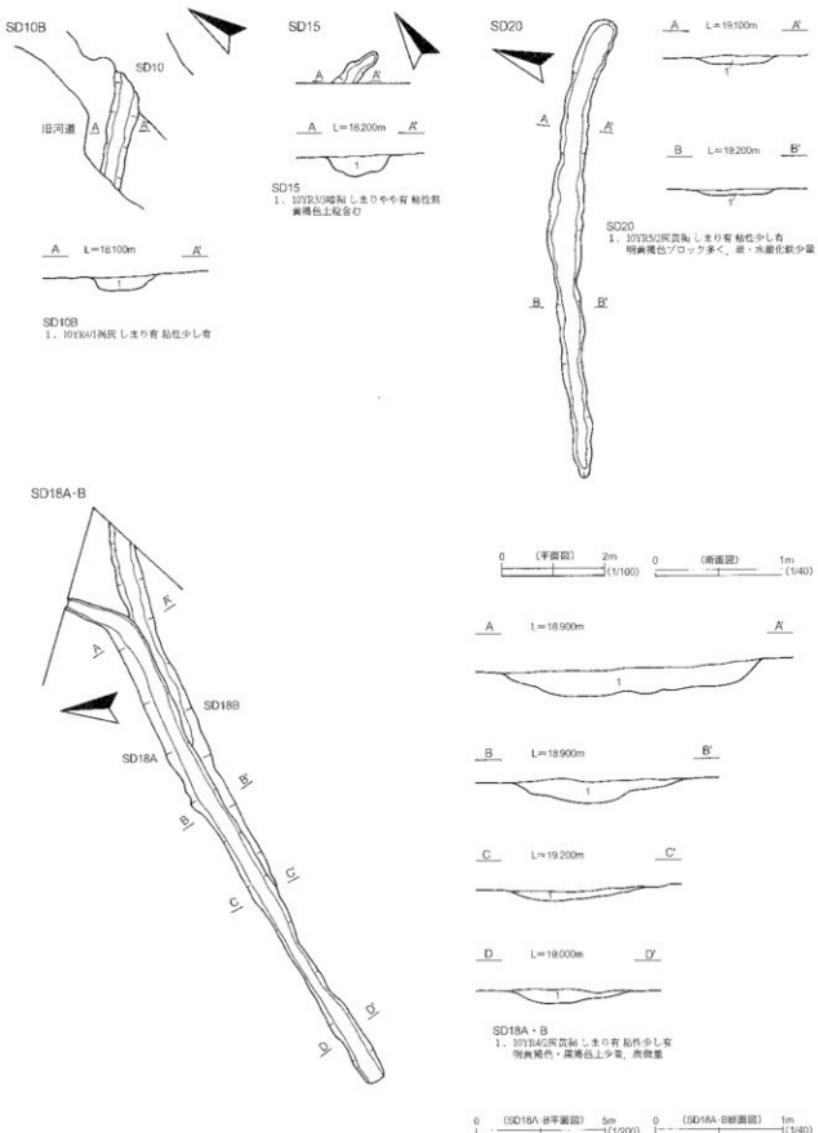
A区東半部、II A 16n・16o・17n・18m・18n・19m・20mグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。当初は南西側を削平により消失し、北東側が調査区外に延びている。北東側は稲刈りが終了するまで調査することができなかつたため1条の溝だと想い精査を進めていたが、稲刈り終了後その部分の粗掘・精査を進めたところ、当初テラス状の緩斜面かと思っていた部分が、古い段階の溝であることが判明し、新しい方をA、古い方をBとした。重複部分にベルトを設定してはいたが、埋土が非常に類似している為に、断面から切り合い関係を見いだすことができなかった。よって、壁の立ち上がり等から新旧を判断している。

S D18Aは全長23.12m、幅0.53~1.17mを測る。方向は東北東-西南西方向（E-26°-N）である。横断面形は半円状を呈し、深さは2.4~15.0cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は93.3cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が4号袋1袋分出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕（96）と須恵器杯（97）である。

S D18Bは残存部分で全長9.5m、幅0.9~1.05mを測る。方向は東北東-西南西方向（E-20°-N）である。横断面形は半円状を呈し、深さは6.0~16.8cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は37.9cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

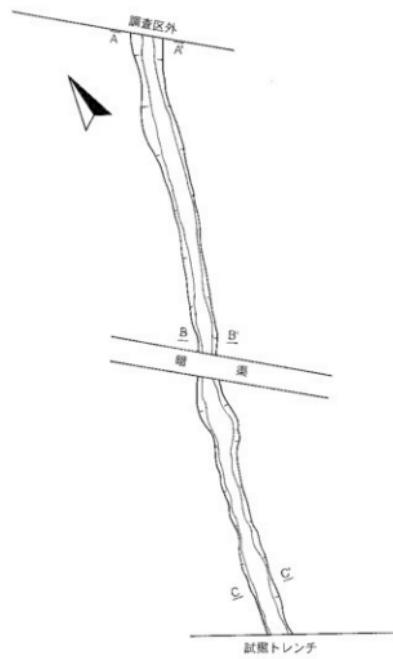


第29図 SD10A・16溝跡

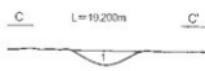
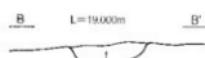
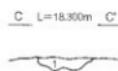
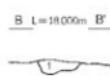
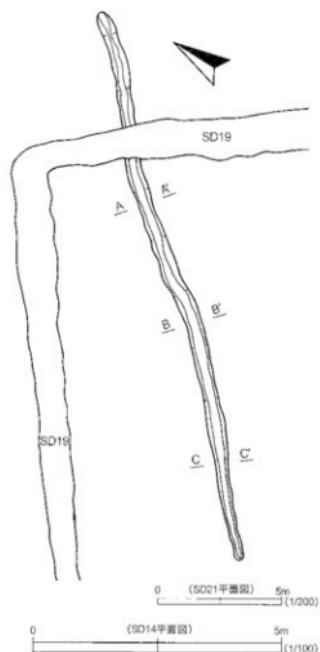


第30図 SD10B・15・18A・B、20溝跡

SD14



SD21



SD14
1. 10YR4/31/2 黄褐色 しまりやや有 粘性無 黄褐色土と含少量

SD21
1. 10YR4/31/2 黄褐色 しまり有 粘性やや有 黄褐色土と含少量

第31図 SD14・21溝跡

S D20溝跡（第30図、写真図版21）

A区東半部、II A16°・17n・17o・18nグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。S A02と重複関係にあり同構造を切っている。よって新旧関係は（新）SD20→（旧）S A02である。全長9.06m、幅36～67cmを測る。方向は東北東～西南西方向（E-20°-N）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは1.7～6.7cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は12.7cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が34点出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕片（103）である。

S D21溝跡（第31図、写真図版21）

A区東半部、II A14n・14o・15n・15o・16m・n・17k・17lグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。北側・南側を開田時の削平で消失し、中央よりやや北付近でSD19に切られ、北側でSI01を切っている。よって新旧関係は（新）SD19→SD21→（旧）S I01である。前述のような検出状況のため、全容ははっきりしないが、残存部分の全長23.1m、幅30～75cmを測る。方向は北東～南西方向（E-43°-N）である。横断面形は逆台形ないし半円状を呈し、深さは2.1～16.6cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は87.7cmを測る。埋土はにぼい黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が4号袋1袋分出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した、須恵器坏（104）、不定形石器（402）である。

S D23溝跡（第32図、写真図版22）

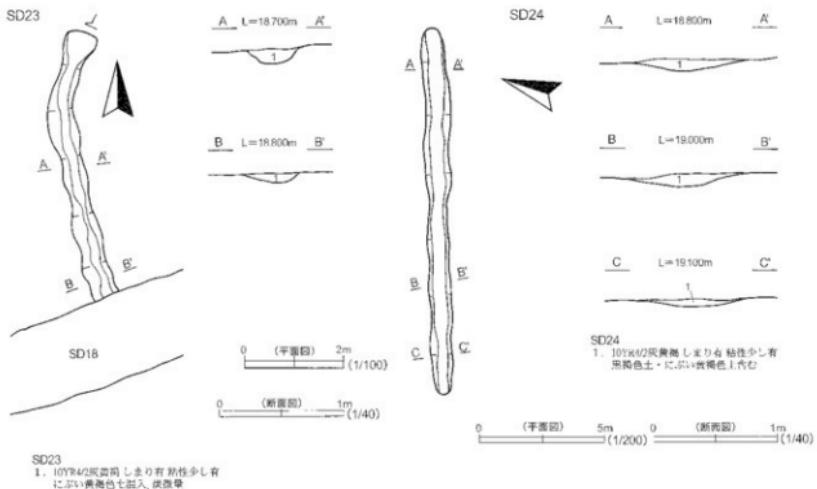
A区東半部、II A18l・18m・19mグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。北側を開田時の削平で、南側をSD18に切られている。よって新旧関係は（新）SD18→（旧）SD23である。前述のような新旧関係のため全容は不明だが、残存部分で全長5.50m、幅36～69cmを測る。方向は北北東～南南西方向（N-9°-E）である。横断面形は逆台形ないし半円状を呈し、深さは6.6～17.3cmを測り、北に向かうにつれて深くなっている高低差は38cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は9号袋1袋分出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕3点（105～107）、土師器坏（108）、須恵器甕（109）である。

S D24溝跡（第32図、写真図版22）

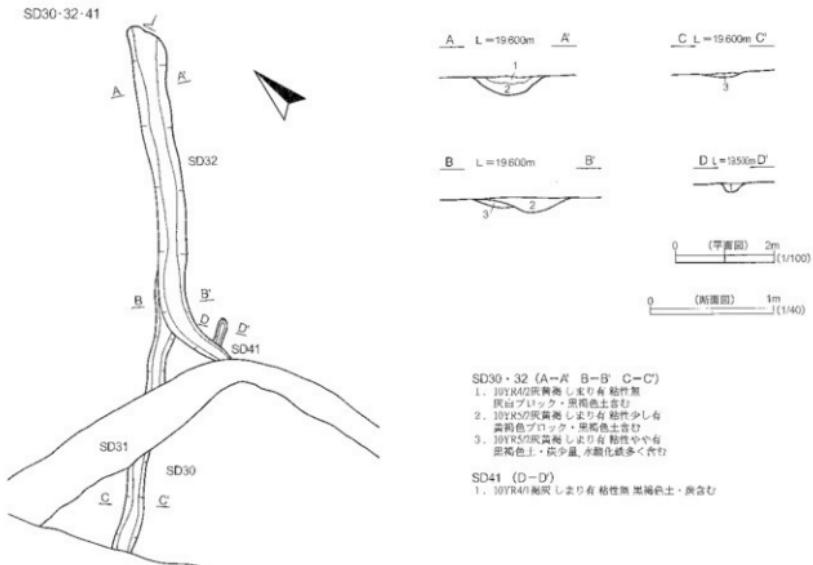
A区東半部、II A13m・14m・15l・15m・16lグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。SD19と重複関係にあり、同構造を切っている。よって新旧関係は（新）SD24→（旧）SD19である。全長15.11m、幅66～99cmを測る。方向は東北東～西南西方向（E-22°-N）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは3.2～9.6cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は46.9cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より上師器片が4号袋1袋分出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕（110）、須恵器坏（111）、石鐵（403）である。

S D30・32・41溝跡（第32図、写真図版23）

A区東半部、II A10r・11q・11r・12qグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。これらの溝は



SD23
1. 10YR4/2灰黃褐色 しまり有 粒性少し有
に、灰褐色土を混入、状斑状



第32図 SD23・24・30・32・41溝跡

S D31に切られているもしくは間接的に重複関係にある溝で同一の図面に図示した。S D30とS D32は重複関係にあり、S D32がS D30を切っており、S D32はS D41も切っていることから、新旧関係は（新）S D31→S D32→（旧）S D30で、S D41はS D32より古い造構であるが、その他の溝と直接的な切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。

S D30は北東側をS D32に、中央付近をS D31に、南西側をS D19に切られているため全容ははっきりしないが、残存部分で全長5.81m、幅34~42cmを測る。方向は北東-南西方向（E-31°-N）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.1~7cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は2.3cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より上部器片が45点出土している。このうち掲載した遺物は壇土中より出土した須恵器大甕（112）である。

S D32は北東側を開口時の削平で、南西側をS D31に切られているため全容ははっきりしないが、残存部分で総長7.16m、幅36~67cmを測る。方向は北東-南西方向（N-40°-E）であるが、S D31との重複部分になると南北方向に方向を変える。横断面形は半円状を呈し、深さは3.6~13.0cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は14.3cmを測る。埋土は灰黄褐色土の自然堆積で2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は壇土中より土師器片が44点、須恵器片が2点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した石鏡（405）と不定形石器（406）である。

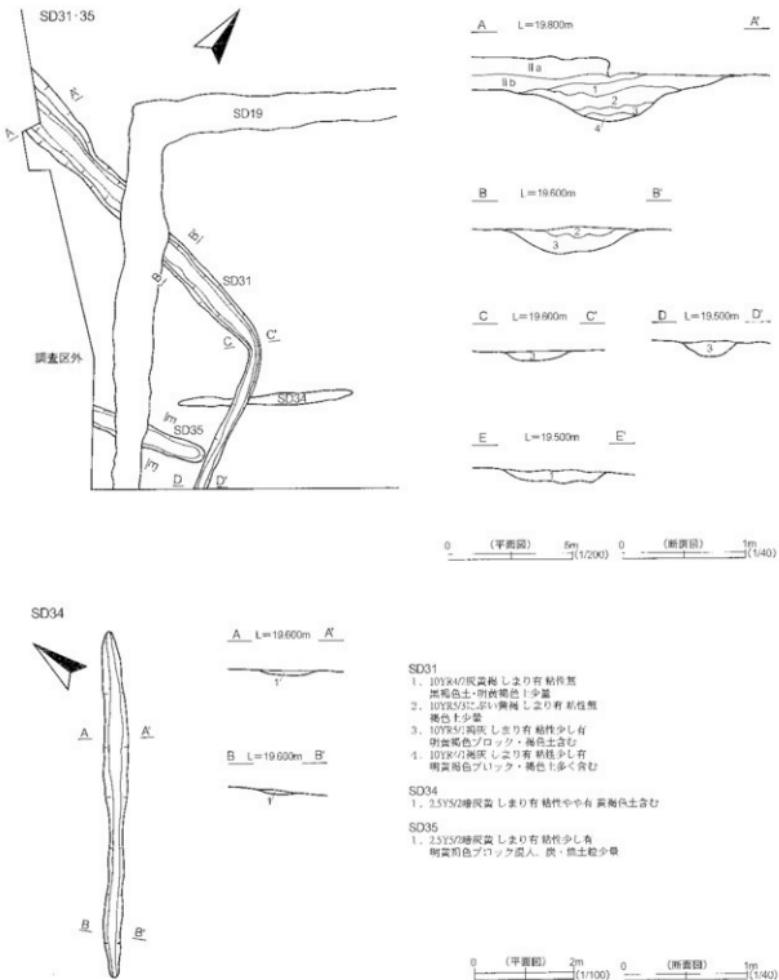
S D41は南西側をS D32に切られているため全容ははっきりしないが、残存部分で縦長53cm、幅15~17cmを測る。方向は東北東-西南西方向（E-26°-N）である。横断面形はU字状を呈し、深さは3.0~7.7cmを測り、高低差は1cmを測るのみではほぼ平坦である。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D31溝跡（第33図、写真図版23）

A区東半部、II A 9 9・10 9・10 10グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。中央付近をS D19に切られ、その重複部分より東側で、S D30・32を切り、S D34に切られている。よって、新旧関係は（新）S D19・34→S D31-S D32→（旧）S D30である。ただし、S D19とS D34は直接的な切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。両端とも調査区外に延びているため全容は不明だが、検出した部分では全長19.29m、幅0.47~1.92mを測る。方向は西北西-東南東方向（W-12°-N）であるが、中央付近より東側では南北方向（N-12°-W）に方向を変える。横断面形は半円状を呈し、深さは5.2~30.6cmを測り、北西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は35.7cmを測るが、中央付近から東側ではほぼ水平で高低差は1.4cmを測るのみである。埋土は上位は灰黄褐色土、にぶい灰褐色土、下位は褐灰色土の自然堆積を呈し4層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より上部器片が46点、須恵器片が6点、常滑産の陶器片が1点が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した石鏡（404）であるが、状況から見て本造構に伴うものではないと思われる。

S D34溝跡（第33図、写真図版24）

A区東半部、II A 11 11・11 12・12 12グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。南西・北東側を開口時の削平により消失し、中央付近でS D31を切っている。よって新旧関係は（新）S D34→（旧）S D31である。前述のような検出状況のため全容は不明だが、残存部分で全長7.12m、幅22~49cmを測る。方向は北東-南西方向（E-38°-N）である。横断面形は浅い丸底状を呈し、深さは1.3~4cmを測り、北東方向に向か



第33図 SD31・34・35溝跡

うにつれて深くなっていき、高低差は4.5cmを測る。埋土は暗灰黄色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D35溝跡（第33図、写真図版24）

A区東半部、II A 10 s・11 s グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。中央付近をS D19に切られていることから、新旧関係は（新）S D19→（旧）S D35である。西側が調査区外に延びているため全容は不明だが、確認した部分では全長4.74m、幅75~92cmを測る。方向は東北東-西南西（E-13°-N）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは3.9~14.8cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は5.9cmを測る。埋土は暗灰黄色土の単層の自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が23点出土している。

S D38・39溝跡（第34図、写真図版25）

A区東半部、II A 8 q・9 p・9 q グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。検出時に2条の溝が重複していることは確認していたが、重複部分が調査区際である上に、両遺構とも南西側部分が調査区外に延びているため、新旧関係がはっきりしなかったので、調査区際の壁面の断面観察で新旧関係を判断することとし、同時に精査を行った。その結果、S D38がS D39を切っていることを確認したので、新旧関係は（新）S D38→（旧）S D39である。

S D38は南西側部分が調査区外に延びているため全容は不明だが、検出した部分での全長は6.19m、幅61~88cmを測る。方向は東北東-西南西方向（E-25°-N）である。横断面形は浅いU字状を呈し、深さは3.2~4.4cmを測り、南西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は4.5cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より常滑窯の陶器2点が出土した。

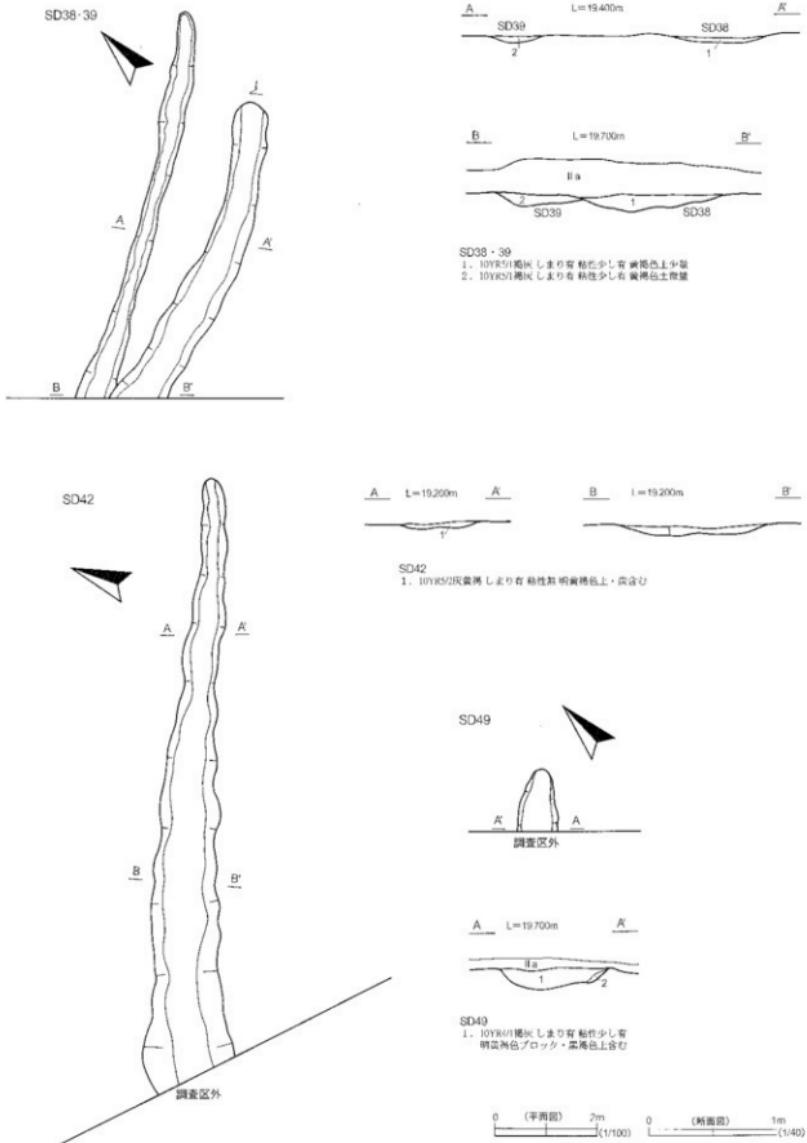
S D39は南西側部分が調査区外に延びているため全容は不明だが、検出した部分での全長は7.74m、幅29~64cmを測る。方向は北東-南西方向（E-34°-N）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは1.2~4.8cmを測り、南西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は1.2cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が7点出土している。

S D42溝跡（第34図、写真図版26）

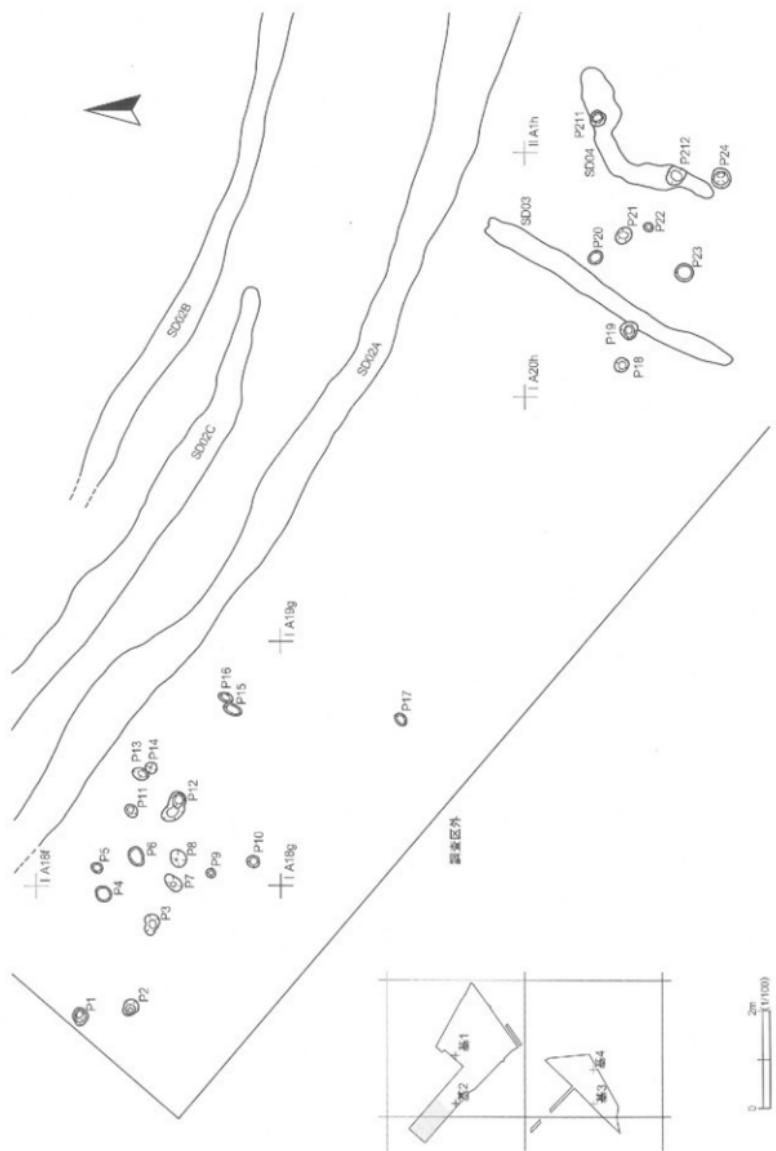
A区東半部、II A 6 o・7 o・8 n・8 o・9 n グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。南西側が調査区外に延びているために全容は不明だが、残存部分で全長11.72m、幅0.43~1.67mを測る。方向は東北東-西南西方向（E-17°-N）である。横断面形は浅いU字状を呈し、深さは1.5~12.3cmを測り、南西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は13.8cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は多少凹凸が見られる。遺物は埋土中より土師器片が8点、須恵器片が1点出土している。

S D49溝跡（第34図、写真図版26）

A区東半部、II A 10 r・11 s グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。遺構の大半が調査区外に伸びているため全容は不明だが、確認した部分では全長1.21m、幅15~77cmを測る。方向は北東-南西方向（E-40°-N）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは2.0~12.1cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.0cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器片が1点出土している。



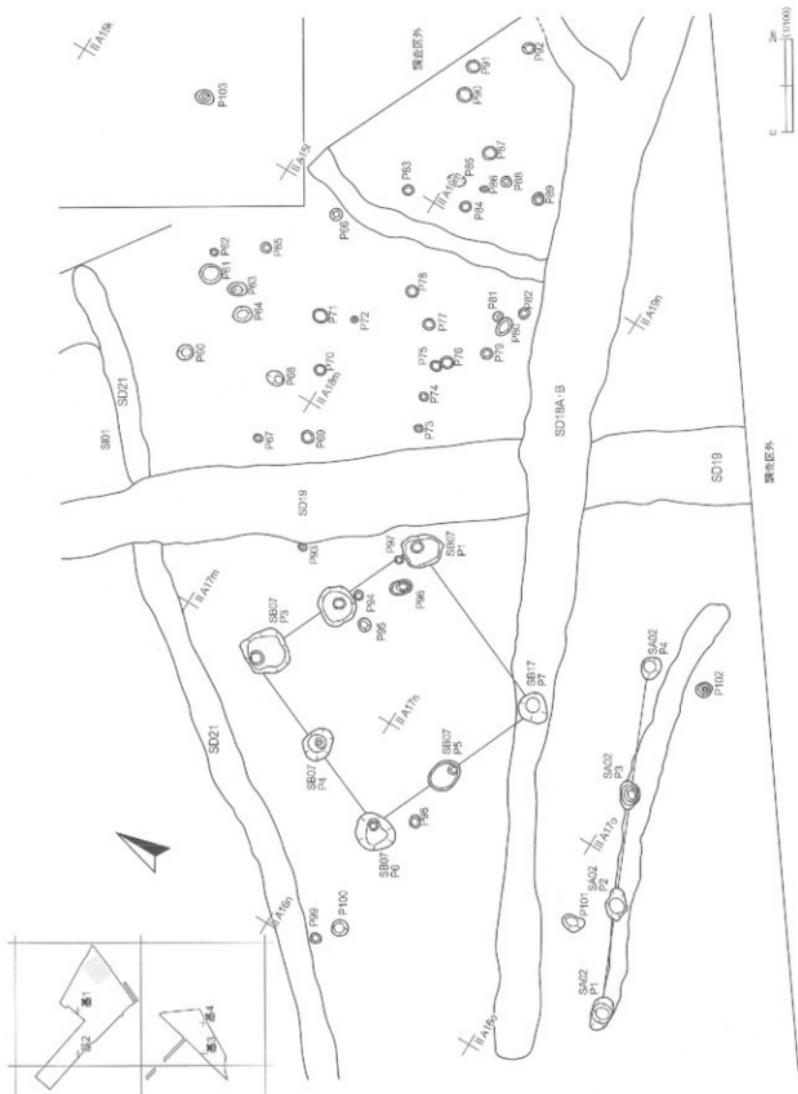
第34図 SD38・39・42・49溝跡



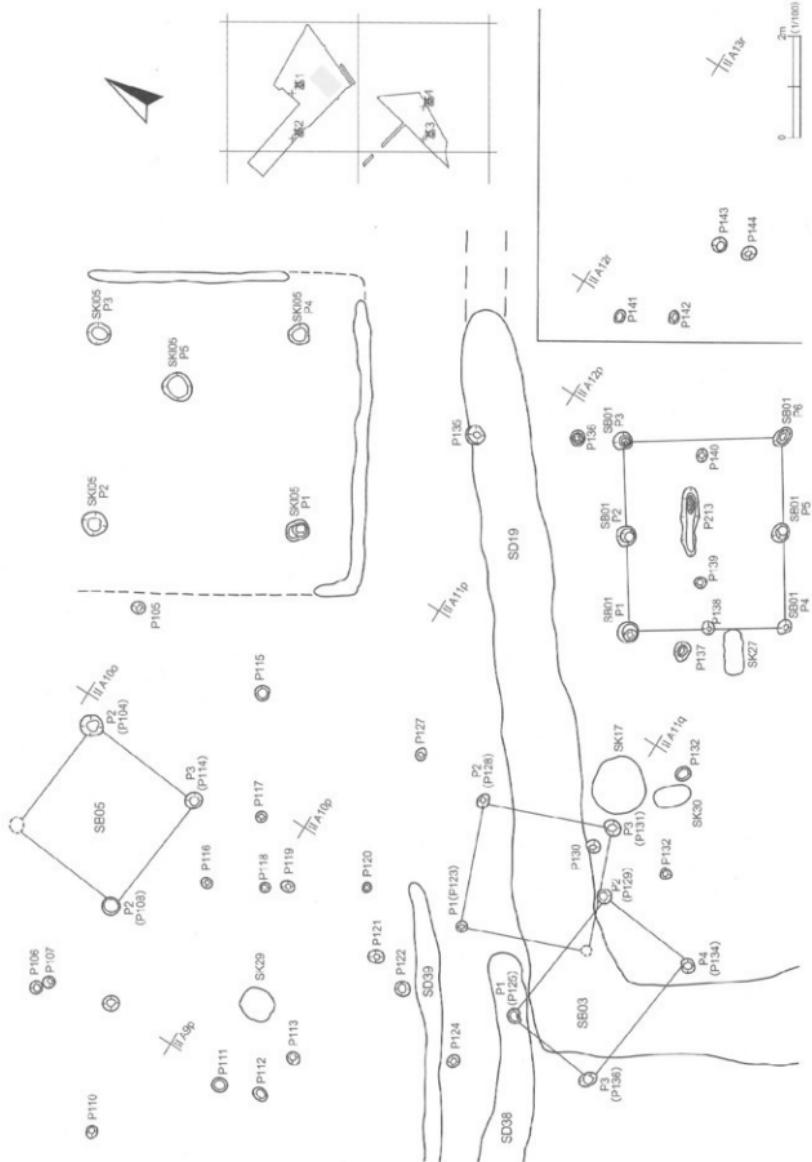
第35図 A区柱穴状土坑(1)



第36図 A区柱穴状土坑(2)



第37図 A区柱穴状土坑(3)



第38図 A区柱穴状土坑(4)

第8表 A区柱穴状土坑觀察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
1	36×30	46.5	菱形状	
2	22×18	49.5	楕円形	
3	43×32	41.3	不整形	
4	32×30	25.6	円形	
5	22×18	25.2	楕円形	
6	38×26	25.5	楕円形	
7	36×22	53.5	楕円形	
8	32×28	47.9	楕円形	
9	17×15	27.2	円形	
10	22×21	25.8	円形	
11	24×19	33.4	楕円形	
12	62×32	54.9	不整形	
13	30×24	31.4	楕円形	
14	23×20	51.8	円形	
15	36×22	25.0	楕円形	
16	26×17	24.0	楕円形	
17	25×18	35.0	楕円形	
18	27×25	19.0	円形	
19	36×31	24.2	楕円形	
20	28×22	9.4	楕円形	
21	31×28	10.9	楕円形	
22	18×17	3.6	円形	
23	34×33	4.4	円形	
24	38×32	36.7	楕円形	
25	22×20	24.0	円形	
26	22×22	13.6	円形	
27	25×24	23.1	円形	
28	21×16	13.3	楕円形	
29	25×25	12.1	円形	
30	46×34	44.0	不整形	
31	26×23	17.6	楕円形	
32	22×16	23.5	楕円形	
33	21×17	15.7	楕円形	
34	20×18	10.9	楕円形	
35	20×18	16.8	楕円形	
36	22×21	29.6	楕円形	

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
37	22×20	23.5	円形	
38	23×20	38.7	不整形	
39	32×30	14.7	円形	
40	44×32	25.6	楕円形	
41	20×18	21.9	楕円形	
42	14×14	32.8	円形	
43	18×16	11.0	楕円形	
44	22×17	7.7	楕円形	
45	23×20	24.6	円形	
46	18×17	17.9	楕円形	
47	26×22	11.8	楕円形	
48	23×23	27.1	円形	
49	25×24	18.7	円形	
50	16×16	8.2	円形	
51	40×31	13.9	楕円形	
52	20×15	22.0	楕円形	
53	17×16	13.1	円形	
54	21×19	12.0	楕円形	
55	30×22	13.4	楕円形	
56	16×12	15.7	楕円形	
57	20×14	20.1	楕円形	
58	19×12	5.8	楕円形	
59	18×18	20.1	円形	
60	33×30	22.0	楕円形	
61	42×12	12.5	円形	
62	14×12	12.2	楕円形	
63	40×26	35.9	楕円形	
64	41×33	13.9	楕円形	
65	20×20	8.2	円形	
66	24×21	14.9	楕円形	
67	16×15	14.2	円形	
68	37×29	31.9	楕円形	
69	24×24	27.1	円形	
70	23×21	19.3	円形	
71	29×28	10.5	円形	
72	12×12	12.8	円形	

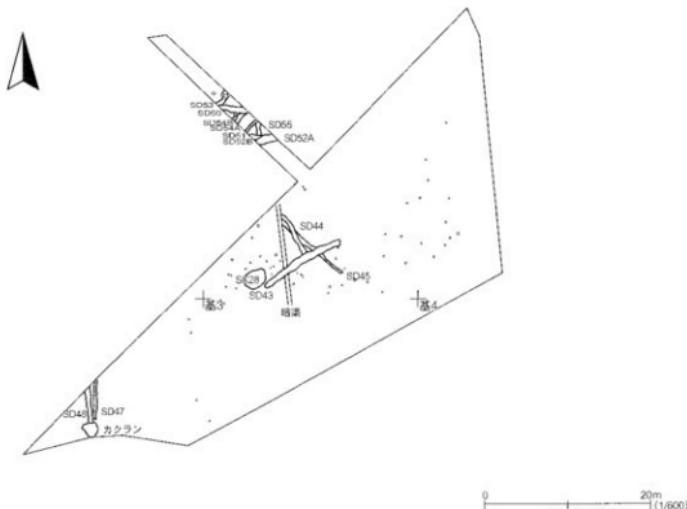
NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
73	17×13	15.6	橢円形	
74	16×15	6.5	円形	
75	21×20	24.0	円形	
76	28×23	25.7	橢円形	
77	22×22	30.4	円形	
78	23×22	25.2	円形	
79	24×23	14.3	円形	
80	41×27	12.0	橢円形	
81	20×20	16.8	円形	
82	20×20	18.7	円形	
83	20×19	8.4	円形	
84	22×22	18.0	円形	
85	35×25	11.5	橢円形	
86	16×12	8.2	橢円形	
87	27×27	4.1	橢円形	
88	22×22	16.4	円形	
89	26×22	17.8	橢円形	
90	31×31	7.5	円形	
91	28×27	17.1	円形	
92	23×23	6.8	円形	
93	20×14	17.7	橢円形	
94	18×18	20.4	円形	
95	28×25	15.9	橢円形	
96	45×29	33.4	橢円形	
97	17×14	7.9	不整形	
98	21×20	9.1	橢円形	
99	20×20	7.9	円形	
100	35×33	24.1	円形	土師器片付
101	46×34	12.9	不整形	
102	31×28	24.1	橢円形	
103	38×28	26.2	橢円形	上端器片付
105	23×21	8.0	円形	
106	24×20	9.5	橢円形	

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
107	22×19	36.5	橢円形	
109	30×30	30.6	円形	
110	23×18	11.0	橢円形	
111	27×26	23.0	円形	
112	28×22	11.7	橢円形	
113	25×22	19.1	橢円形	
115	27×26	12.4	円形	
116	20×18	10.7	橢円形	
117	21×18	17.0	橢円形	
118	21×16	11.9	橢円形	
119	27×23	7.5	橢円形	
120	20×16	3.8	橢円形	
121	29×24	23.6	橢円形	
122	30×24	14.5	橢円形	
124	26×23	17.5	橢円形	
127	21×17	14.8	橢円形	
130	27×23	8.4	不整形	
132	20×17	14.1	不整形	
133	28×23	12.5	橢円形	
135	39×33	37.1	橢円形	
136	26×25	28.4	円形	
137	36×30	21.2	橢円形	
138	23×23	13.7	方形状	
139	20×17	9.8	橢円形	
140	22×19	19.8	橢円形	
141	24×16	19.7	橢円形	
142	23×17	6.4	橢円形	
143	28×28	21.8	円形	
144	28×23	28.8	橢円形	
211	31×29	32.8	円形	
212	40×34	22.4	不整形	
213	135×35	33.8	橢円形	

A区柱穴状土坑（第35～38図、第8表）

調査区各地から柱穴状土坑が多数検出されている。掘立柱建物跡を構成する柱穴以外の柱穴は136基を数え、△区各地から検出されている。平面形は円形・楕円形・方形などがあるが、円形・楕円形が主体を占める。深さは3.6～54.9cmを測るが、規則性は認められず、また掘り方を持った柱穴は確認されていない。埋土は黒褐色～灰黄褐色上系の自然堆積を呈する。遺物は上部器片がNO.100・103より出土しているが、状況から見て直接柱穴に伴うものではないと思われる。また、欠番のNO125・126・129・134はS B03、NO123・128・131はS B04、NO104・108・114はS B05を構成する柱穴である。

（太田代・島原）



第39図 B・C区遺構配置図

第2節 B・C区の遺構

B区は南側調査区の面的な部分、C区はB区から北西方向に延びる水路分調査区である。B・C区は本遺跡が位置する中位段丘の南端部に位置し南側は沢に面し、標高は19.1～19.8m前後を測る。本区は開田時に本来緩斜面状の地形が階段状に削平されている上に、暗渠が縱横に走っているため、遺構の残りが不良である。C区は中央付近を農道が走っているため、調査区が二つに分かれており、便宜上道路より北をC区北、道路より南をC区南としたが、C区北からは遺構が検出されなかったため、特に断りのない限り、C区と表記されている場合はC区南の事を指していることをお断りしておく。また、時間の制約上図化はできなかつたが前回の圃場整備以前に使われていたと推測される砂利道の一部がC区南北端から検出されている。ここからは肥料袋・缶コーヒー等が盛土中より出土している。この砂利道はB区の北コーナー付近でも確認されており、前回の圃場整備以前の農道は現道より道路1本分南を通っていたものと推測される。

B区からは土坑1基、溝跡5条、柱穴状土坑56基が検出されている。また、C区からは溝跡8条、柱穴状土坑4基が検出されているが、C区の道路脇付近では遺構が検出されなかったことから、道路部分は調査不要と判断し、調査を行っていない。

S K28土坑（第40図）

B区中央、II A 4 j グリッドに位置し、V層上面で検出された。平面形・規模は長楕円形状を呈し、開口部径287×213cm、底部径107×35cmを測る。断面形は深い半円状を呈し、深さ68cmを測る。埋土は上位は黒褐色土、中位は褐色土上、下位は灰色を主体とした自然堆積で12層に細分され、中位から下位では自然木や礫が少量含まれていた。底面は平坦というよりは丸底風を呈する。遺物は埋土中より土師器片が2点出土している。

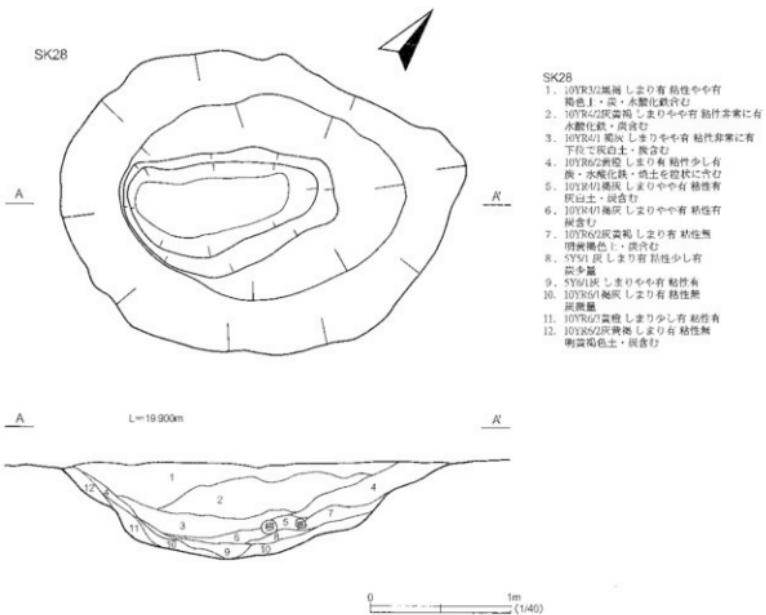
（太田代）

S D43・44・45溝跡（第41図、写真図版27）

B区中央、II B 4 j・5 i・5 j・6 i グリッドに位置し、検出面はV層上面である。検出段階で3条の溝の新旧関係を確認することができたので、新しい溝跡から順番に遺構番号をふっていった。S D43はS D 44・45を切り、S D44はS D45を切っていることから、新旧関係は（新） S D43→S D44→（旧） S D45である。

S D43は北東側を開田時の削平により消失しているため全容ははっきりしないが、全長10.86m、幅50～86cmを測る。方向は北東～南西方向（N 57°～E）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.7～11.1cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は5.4cmを測る。埋土は褐色土を主体とした自然堆積で、3層に細分した。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より磨滅した土師器片が3点出土している。

S D44は南側をS D43に北側を暗渠に切られたうえに暗渠北側が調査区外のため全容ははっきりしないが、残存部分での全長は5.8m、幅32～57cmを測る。方向は北北西～南南東方向（N 29°～W）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.3～8cmを測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.8cmを測る。埋土は褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より磨滅した土師器片が2点と常滑産陶器1点が出土している。



第40図 SK28土坑

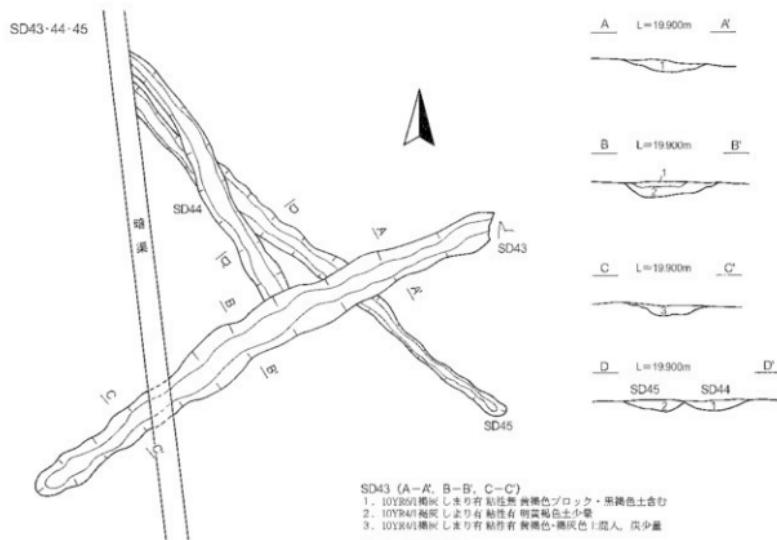
S D45は北側を暗渠に切られている上にその暗渠が調査区際に位置しているため全容ははっきりしないが、全長9.74m、幅17~54cmを測る。方向は北西~南東方向（N-50°-W）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1~7cm前後を測り、南東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は14.6cmを測る。埋土は褐色の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より磨滅した土師器片が3点出土している。（太田代・鳥井）

S D47溝跡（第41図、写真図版27）

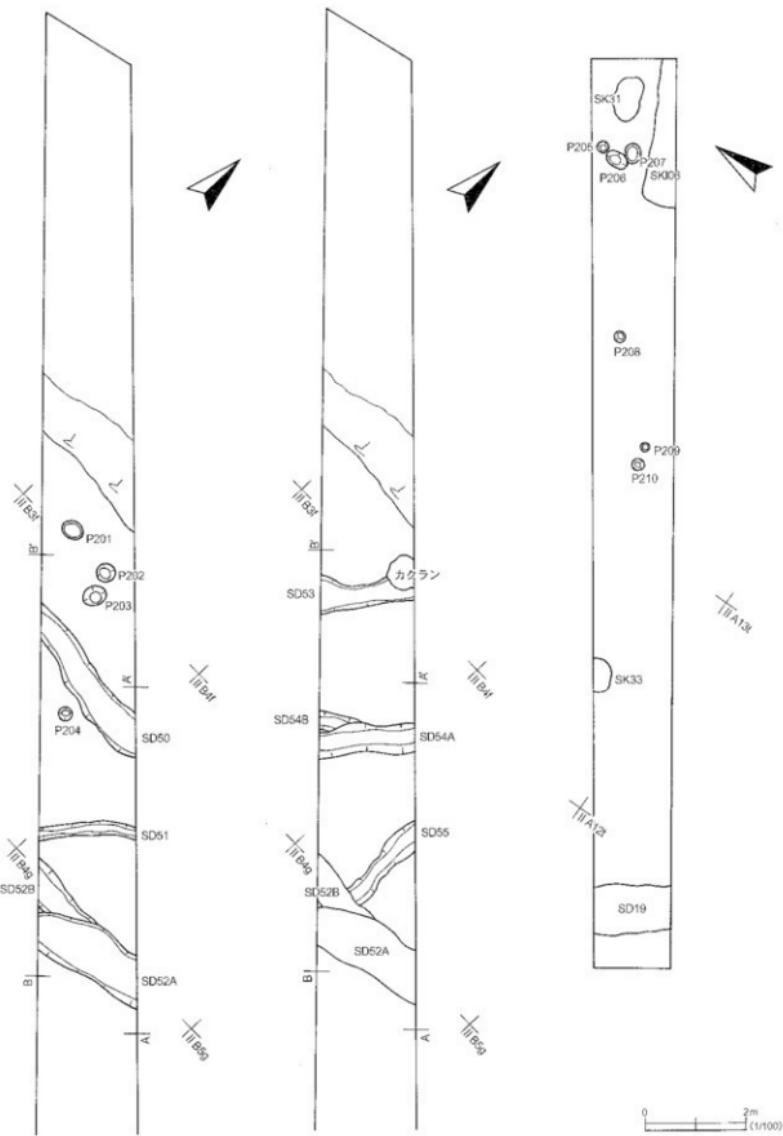
B区南、II B20mグリッドに位置し、検出面はV層上面である。北側部分が調査区外に延びているため全容ははっきりしないが、確認した部分では全長4.76m、幅16~39cmを測る。方向は北~南北向（N-1°-E）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.3~5.8cmを測り、南に向かうにつれて深くなっている、高低差は1cmを測る。埋土はぶい黄褐色上の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。（太田代）

S D48溝跡（第41図、写真図版27）

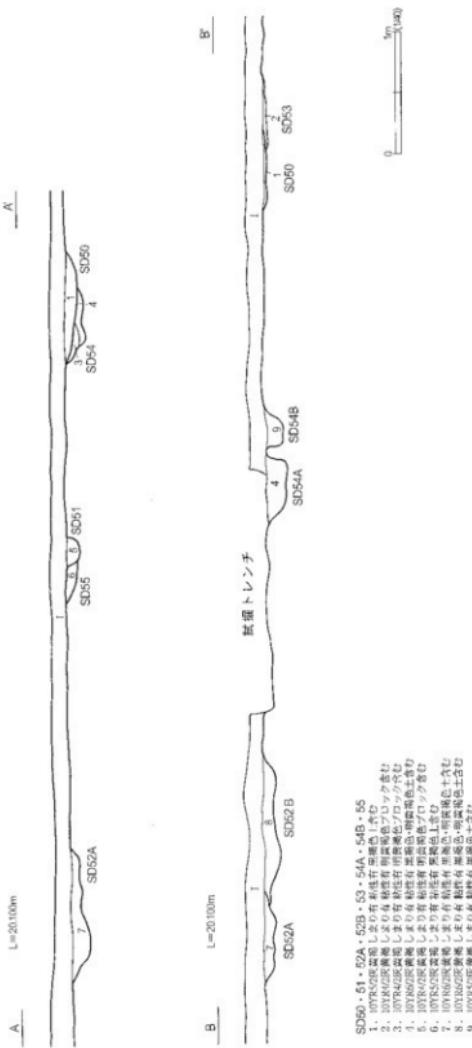
B区南、I B20mグリッドに位置し、検出面はV層上面である。両端部分が調査区外と搅乱によって全容ははっきりしないが、全長4.4m、幅46~69cmを測る。方向はほぼ北~南北向（W-7°-N）である。



第41図 SK43・44・45・47・48溝跡



第42図 SD50、51、52A・B、53、54A・B、55溝跡(1)、C・D区柱穴状土坑



第43図 SD50、51、52A・B、53、54A・B、55溝跡(2)

横断面形は丸底状を呈し、深さは2.3～12.6cmを測り、南に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.2cmを測る。埋土はにびい黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は凹凸が激しい。遺物は埋土中より磨滅した土師器片6点が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土築器甕（113）である。

（太田代）

S D50・51・52A・B・53・54A・B・55溝跡（第44・45図、写真図版28・29）

C区南、II B 3 e・3 f・3 g・4 f・4 gグリッドに位置し、検出面はV層上面である。C区検出の溝跡は調査区内地が幅約2mと狭いため、全容がはっきりしない上に、重複関係があることが検出段階から判明していたので、断面は調査区際の壁面を利用し精査を進めた。まず、S D50・51・52の精査を開始し、S D52は精査途中で新旧2時期あることが判明したので、新しい方をA、古い方をBとした。前述の溝跡の精査終了後、これらの溝に切られているS D53・54・55の精査を開始した。S D53は南側をS D50に北側を柱穴状土坑P202・203に切られている。S D54はS D50に切られ、S D54Bは柱穴状土坑P204に切られている。S D55はS D51・52Bに切られている。よって新旧関係は少なくとも（新）S D50→S D53・54A・Bと（新）S D51・52A・B→（旧）S D55という関係は指摘できるが、これら以外の溝同士の新旧関係は不明であるが、遺物の出土していない溝が多い上に、埋土が灰黄褐色土の単層と共通している特徴が挙げられる。

S D50は全長3.15m、幅50～72cmを測る。方向は東西方向（W-6°-N）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは4.5～9cmを測り、東に向かうにつれて深くなっている、高低差は6.7cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D51は全長1.92m、幅26～30cmを測る。方向は北西-南東（N-42°-E）である。横断面形はU字状を呈し、深さは1.7～10.0cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は2.2cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D52Aは全長2.25m、幅74cm～1.08mを測る。方向は東北東-西南西方向（N-70°-E）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは1.4～14.6cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差はcmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は磨滅した土師器片が22点出土している。

S D52BはS D52Aに切られているため、全容ははっきりしないが、残存部分で全長1.86m、幅54～56cmを測る。方向は東西方向（W-2°-S）である。横断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは2.2～9.7cmを測り、西に向かうにつれて深くなっている、高低差は6.3cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D53は全長1.86m、幅41～78cmを測る。方向は北東-南西方向（N-35°-E）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは1.2～5cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は2.8cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D54Aは全長1.9m、幅52～60cmを測る。方向は北東-南西方向（N-37°-E）である。横断面形は逆台形状を呈し、深さは7.9～19.9cmを測り、北東方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は5.3cmを測る。埋土は灰黄褐色土を土体とした自然堆積を呈し、2層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S D54BはS D54Aに切られているため、全容がはっきりしないが、確認された部分での全長0.82m、幅

40cm前後を測る。方向は東北東～西南西方向（N-60°-E）である。横断面形は逆台形状を呈し、深さは2.5～13.8cmを測り、南西方向に向かうにつれて深くなっている、高低差は3.2cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

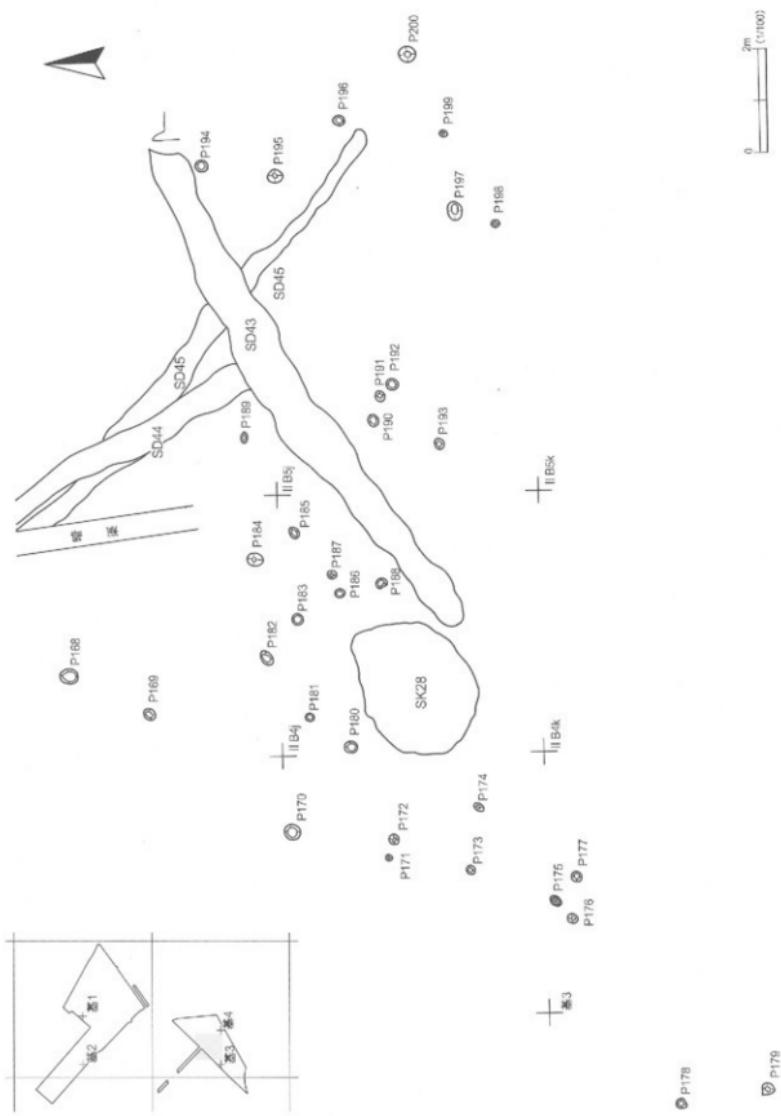
S D55はS D62Bに切られているため全容は不明だが、全長1.89m、幅31～56cmを測る。方向は南北方向（N-6°-W）である。横断面形は丸底状を呈し、深さは4～9.8cmを測り、南に向かうにつれて深くなっている、高低差は7.8cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

B区柱穴状土坑（第42・43図、第9表）

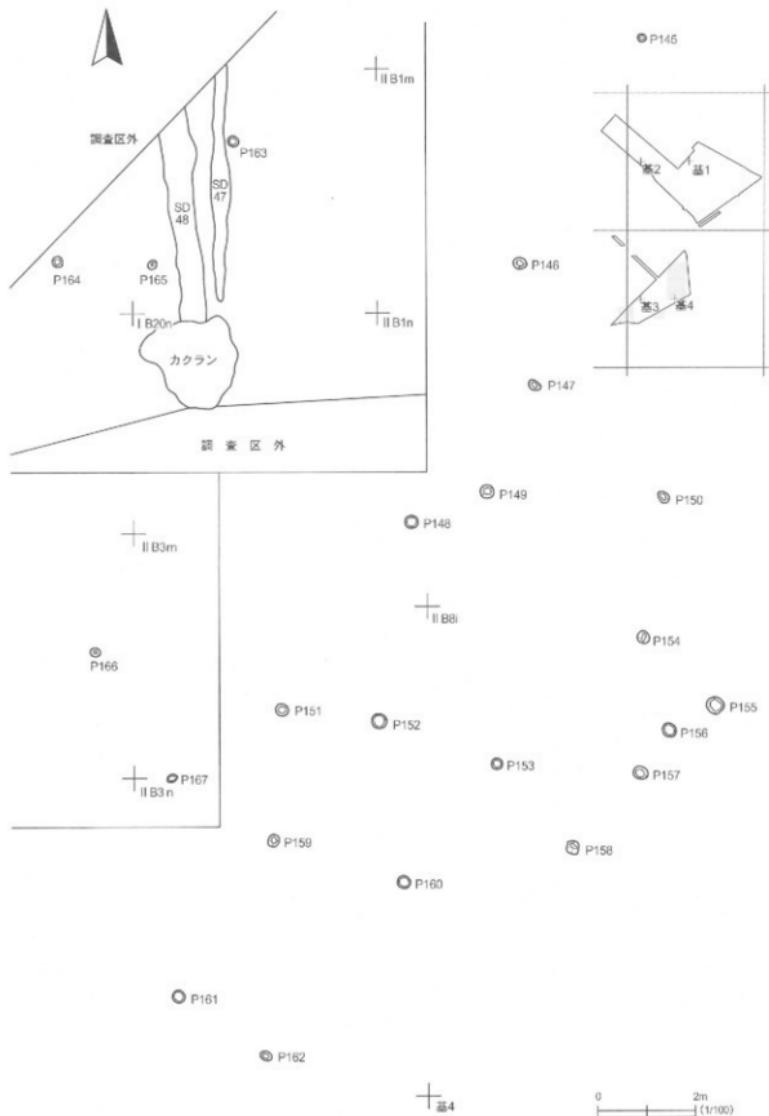
B区から柱穴状土坑が56基検出されている。これらの柱穴はB区各地から検出されたが、掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていない。平面形は円形・楕円形・方形などがあるが、円形・楕円形が主体を占める。深さは2.1～28.8cmを測るが、規則性は認められず、また掘り方を持った柱穴は確認されていない。埋土は黒褐色～灰黄褐色土系の自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。
（太田代）

C・D区柱穴状土坑（第44図、第10表）

C・D区からも柱穴状土坑が検出されているが、水路分調査区のため確実に掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていない。C区からは4基、D区からは6基の柱穴が検出されている。平面形は円形・楕円形が主体を占める。深さは2.5～32.7cmを測るが、規則性は認められず、また掘り方を持った柱穴は確認されていない。埋土は灰黄褐色土系の自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。また、NO.202・203はSD53を、NO.204はSD54Aを切っている。
（太田代）



第44図 B区柱穴状土坑(1)



第45図 B区柱穴状土坑(2)

第9表 B区柱穴状土坑觀察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
145	14×14	25.0	円形	
146	24×22	17.0	楕円形	
147	23×16	12.3	楕円形	
148	24×24	10.1	円形	
149	26×26	14.2	円形	
150	24×16	11.4	楕円形	
151	24×24	11.9	円形	
152	29×28	7.3	円形	
153	22×22	9.6	円形	
154	23×23	20.9	円形	
155	33×32	23.3	方形状	
156	27×23	12.3	楕円形	
157	28×24	22.1	楕円形	
158	29×28	15.4	方形状	
159	25×21	17.4	楕円形	
160	24×24	8.8	円形	
161	23×23	17.7	円形	
162	22×16	7.5	楕円形	
163	20×19	9.4	円形	
164	21×19	17.7	楕円形	
165	19×14	14.8	楕円形	
166	18×16	15.5	楕円形	
167	17×12	11.3	楕円形	
168	33×28	9.4	楕円形	
169	22×17	5.0	楕円形	
170	29×27	14.4	円形	
171	10×10	4.7	円形	
172	19×16	19.3	楕円形	

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
173	15×15	14.0	円形	
174	18×12	4.9	楕円形	
175	20×13	12.5	楕円形	
176	18×17	3.0	円形	
177	19×18	10.8	円形	
178	20×17	9.4	不整形	
179	23×20	7.9	不整形	
180	23×21	13.5	楕円形	
181	13×12	5.0	円形	
182	30×20	13.4	楕円形	
183	18×18	30.5	円形	
184	30×24	10.9	楕円形	
185	21×16	3.4	楕円形	
186	17×14	11.1	楕円形	
187	16×14	7.7	楕円形	
188	20×15	6.0	不整形	
189	17×11	2.1	楕円形	
190	22×20	11.1	楕円形	
191	20×14	11.3	楕円形	
192	21×18	23.0	楕円形	
193	23×17	11.3	楕円形	
194	22×22	25.2	円形	
195	31×24	21.0	楕円形	
196	20×18	19.9	楕円形	
197	36×27	22.9	楕円形	
198	18×13	3.2	楕円形	
199	11×9	13.7	楕円形	
200	31×30	28.8	円形	

第10表 C・D区柱穴状土坑觀察表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
201	42×35	20.9	楕円形	
202	37×36	25.8	円形	
203	50×39	16.6	楕円形	
204	26×26	2.5	円形	
205	22×22	10.3	円形	

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
206	46×30	32.7	楕円形	
207	40×30	16.1	楕円形	
208	25×21	21.6	楕円形	
209	17×17	4.2	円形	
210	25×23	8.4	楕円形	

第3節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器類（土師器・須恵器）が大コンテナ5箱、陶磁器類と石器類がそれぞれ小コンテナ1箱分、不明鉄製品10数点、古銭17枚、木製品（椀・下駄・不明木材）等が10数点出土し、主に遺構内から出土している。出土状況としては人半が平安時代の土師器・須恵器などの土器類で大コンテナ5箱程出土しているが、その人半が堅穴住居と堅穴に近接する溝からの出土である。また、13世紀代と想定される常滑窯の陶器片は大半が堀から出土している。、永楽錢を主体とした古銭は墓壙から出土しており、六道銭に使用されたものと考えられる。また、陶磁器類は全て表土中から出土し人半が近世以降のものだが、1点だけ12世紀前後の白磁片が出土している。石製品・鉄製品・木製品の大部分は表土中から出土している。

遺物の掲載基準は第Ⅲ章第3節で記述した通りである。遺構内出土遺物、遺構外出土遺物の順に、土器は上師器甕・壺、須恵器甕・壺の順で、石器は石鏡・不定形石器の順に掲載し、遺物の個々の記述は代表的なものにとどめ、詳細は実測図と観察表を参照して頂きたい。

土師器・須恵器（第46～54図、第11表、写真図版30～36）

総量で人コンテナ5箱分出土している。器種は甕・壺・高台壺などがある。

上師器・須恵器の土器類に関してはロクロ成形の有無でⅠ群・Ⅱ群に分け、その群の中で縦分可能なものは分類を行っているが、分類のための分類にならないよう分類は必要最小限にとどめている。

土師器甕

Ⅰ A群：口縁部が大きく外反し、体部に最大径があるもの。体部の立ち上がりは丸みを帯びている。(2)・(5)・(108)？

Ⅰ B群：口縁部が大きく外反し、口縁部に最大径があるもの。体部の立ち上がりは比較的直線的である。(1)・(3)

Ⅰ C群：最大径は口縁部にあるが、口縁部の作りが須恵器人甕に類似したもの。(34)・(107)

Ⅰ D群：中・小型甕で器形がⅠ A群に類似するもの。(4)

Ⅰ E群：中・小型甕で器形がⅠ B群に類似するもの。(13)

Ⅱ A群：口縁部は頸部から大きく外反し、最大径は口縁部にあるもの。(31)・(32)・(33)・(114)

Ⅱ B群：口縁部は近く外反し、最大径は胴部にあるもの。(39)

Ⅱ C群：口縁部は極めて近く外反もしくは直立気味のもの。(11)・(36)・(37)・(73)・(74)・(82)・(110)・(116)

これらのほかに(105)の口縁部破片のように壺状を呈するものや、(113)の体部破片のように外面上にタクキが認められるものがある。

土師器壺類

Ⅰ A群：底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものの、底面が一部再調整されているものもある。(17)・

(83?)

I B群：底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反するもの。(16)・(18)・(19)・(20)・(22)・(40)・(80)・(81)

I C群：底部から口縁部にかけて直線的に立ち上るのは I A群と同じだが、I A群より底径が小さく内調整が認められないもの。(44)・(45)・(46)・(47)・(52)・(53)・(55)・(56)・(75)・(76)・(77)・(88)・(89)・(92)・(93)・(94)・(95)・(119)・(120)・(121)

I D群：底部から口縁部にかけて直線的ではあるが、やや外反気味に立ち上るもの。小皿状を呈する。(54)

I E群：高台部がついているもの(14)・(48)・(49)・(79)

II A群：平底盤で体部が丸みをもって立ち上るもの。(84)

例外的な遺物の事実記載

(41) は両面黒色処理の十箇器坏である。底部から緩やかに立ち上がり口縁部に至る。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。底面は回転糸切り無調整である。

(125) はここでは高台坏の高台部と判断した。欠損部分が剥離というよりは坏部と台部の接合部分が離れたような様相を呈している為高台部と判断したのだが、蓋や小皿の可能性も考えられる。

(126) は形態から見て耳皿の端部付近の破片と思われる。全体的に磨滅が著しいが、両面黒色処理・ミガキが施されている。

(129) は手捏ね上器の底部付近と思われる。外面に格子状の圧痕が認められる。出土位置・形態などの状況から見て比較的新しい時期の遺物なのではないかと思われる。

須恵器

総量で大コンテナ0.5箱分出土している。器種は人瓶・甕・壺・坏・高台坏・蓋などがあるが、全体的に個体数が少ないとから、分類は行わず、代表例の事実記載にとどめることにする。

(23) は須恵器の壺であるが、成形・調整技法が非クロの上飾器中型甕に類似している。口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ調整が施されている。(60) は須恵器の甕で、内外面ともにロクロナデが施されている。

(61) は須恵器の大甕の口縁部破片で内外面ともにロクロナデ調整が施されている。(62) は須恵器の大甕の底部破片である。外面タタキ、内面當て其痕が残存している。(63) は須恵器の大甕の体部破片である。外面タタキ、内面當て其痕が残存している。(67) は須恵器の壺で内外面ともにロクロナデ・火襷痕が残存している。底面は回転ヘラ切り再調整である。(68) は須恵器の高台坏の高台部破片である。(69) は須恵器坏の底部破片で底面再調整が施され、(70) も同じ底部破片で回転糸切り無調整である。(71) は坏の口縁部破片で内外面ともにロクロナデが施されている。(85) は大甕の体部破片で外面にタタキが施されている。(86) も坏の底部破片だが底面に再調整が施されている。(90) は須恵器大甕の体部破片で外面にタタキ、内面に當て其痕が見られる。(91) は須恵器甕の体部下半の破片で内外面ともにロクロナデが施されている。(97) は須恵器坏で内外面ロクロナデだが磨滅・剥離が著しく底面の切り離しは不明である。(98) は須恵器大甕の肩部破片で外面タタキ、内面當て其痕が認められる。(99) は須恵器大甕の体部破片で外面タタキ、内面當て其痕が認められる。(100) は蓋のツマミ部分である。(101) は須恵器高台坏の高台部破片である。(102) は須恵器坏の口縁部～体部破片で、体部は直線的に立ち上がり内外面ロクロナデ調整が施されている。

陶器（常滑）（第55図、第11表、写真図版36）

総量で34点出土している。大半がSD19南西側埋土からの出土で全体の約7割強（23点）を占め、他はSD31より7点、他はSD38と北側調査区の検出面より1～3点出土しているのみである。SD19以外の遺構内出土遺物は遺構内からの出土とはいっても、限りなく検出面に近い埋土上位からの出土で遺構に伴う遺物とは言い難く、確実に遺構に伴うかのような出土状況を示しているのはSD19のみという状況である。出土した34点を見てみると、外面が灰褐色～褐色系、内面がにぶい褐色系という色調は共通しているが、断面が灰白色系（10YR8/1）の色調で比較的薄手のものと、断面が灰白色系（10YR7/1）の色調で比較的厚手のものとに大きく分けられる。口縁部破片が無い上に、全て体部破片の為、ただ単に個体の差を示すものなのか、時期差を占めるものなのかは判然としない。数量的には前者が10点、後者が24点を数えるが、出土位置に差は見られない。報告書には大甕の頸部近くないし肩部とおもわれる破片2点（132・133）を図示した。（132）は薄手のもの、（133）は厚手のものの代表例である。これらの遺物の年代観であるが、前述の通り口縁部破片がなく全て体部破片のため、はっきりとした年代は不明であるが、概ね前者は13世紀前半代、後者は13世紀代の年代観が想定される。（註）

鉄製品（第55図、第12表、写真図版37）

総量で10数点が出土しているが、大半が表土中からの出土で、近代以降の遺物がほとんどである。本報告書では遺構に絡んでいると思われる鐵鎌（201）と煙管（202）の2点を図示した。（201）の鐵鎌はSK105の検出中に出土したものであるが、この地区は表土30cm下が即検出面のため確定的にSK105のものであるかは微妙な所がある。形状からみて雁又鎌の可能性が想定される。（202）の煙管はSD02Dの埋土中より出土したもので、雁首の火皿部分が欠損したものである。

古銭（第55図、第12表、写真図版37）

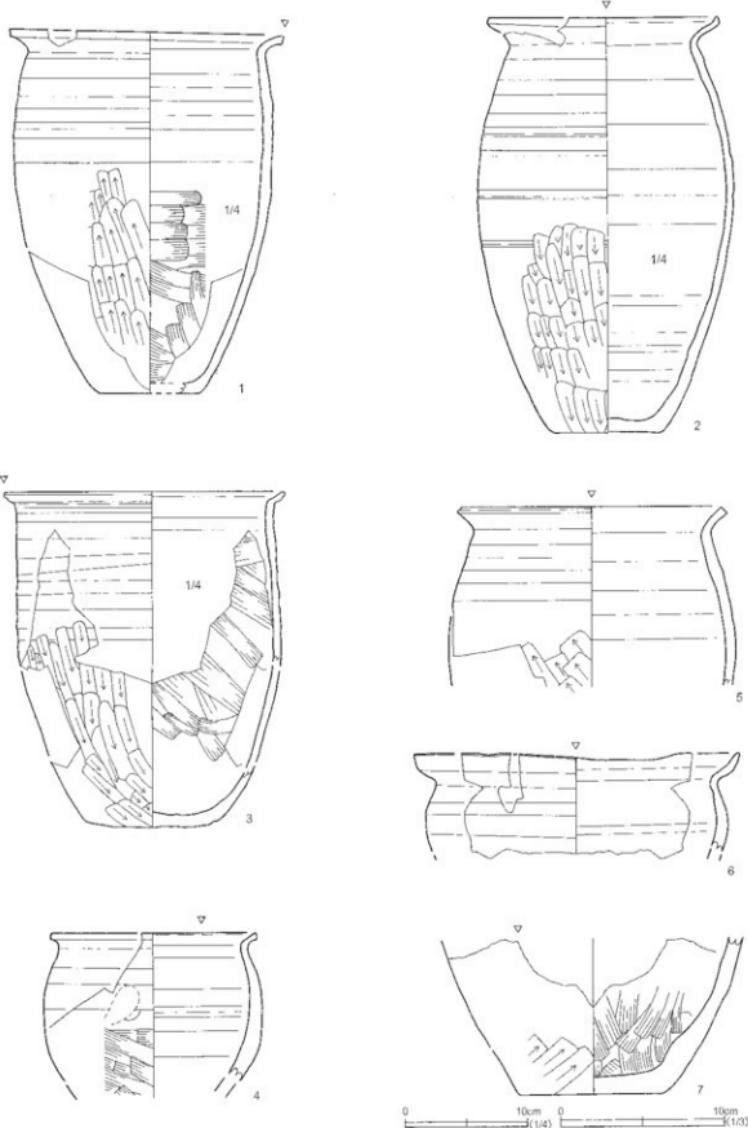
全部で17枚出土しており、その全点を掲載した。大半の14枚が遺構内より出土している。遺構外より出土した古銭類は寛永通宝四文銭、明治三十八年鋳造の十銭銀貨、昭和十五年鋳造の十銭アルミ硬貨で近世～戦前までの遺物である。遺構内出土のものはSK15・23・24墓壙より出土している。全て底面より出土し、2枚もしくは6枚がまとまって出土している状況とこれらの墓壙の埋土が人為堆積を呈することから、六道銭であると判断した。これらの六道銭に使用されたと思われる古銭の種別は、SK15は嘉祐通寶（203）、天祐通寶（204）が各一枚、SK23は元豊通寶（205）、元祐通寶（206）、永樂通寶2枚（207・208）、聖宋元寶（209）、熙寧元寶（210）の5種類6枚、SK24は元豊通寶（211）祥符通寶（212）、聖宋元寶（213）、不明古銭（214）、熙寧元寶（215）、永樂通寶（216）の6種類にわたり、基本的には永樂銭と北宋銭の組み合せが主体を占めるようである。詳細は觀察表に譲るが、これらの古銭の残存状況は①全体的にすり減っているものの銭名が比較的はっきりしているもの、②全体的にすり減っているために銭名があまりはっきりしないものとに分けられ、①は（205）・（206）・（207）・（208）・（209）・（212）・（215）、②は（203）・（204）・（210）・（212）・（213）がそれにあたる。これに当てはまらないのが（214）で、外径が他より一回り小さく、内径が一回り大きい様相を呈する。永樂銭と北宋銭系の本銭・模鋳銭の組み合せは中世末～近世初頭における六道銭の出土状況に類似している。

木製品（第55図、第12表、写真図版37）

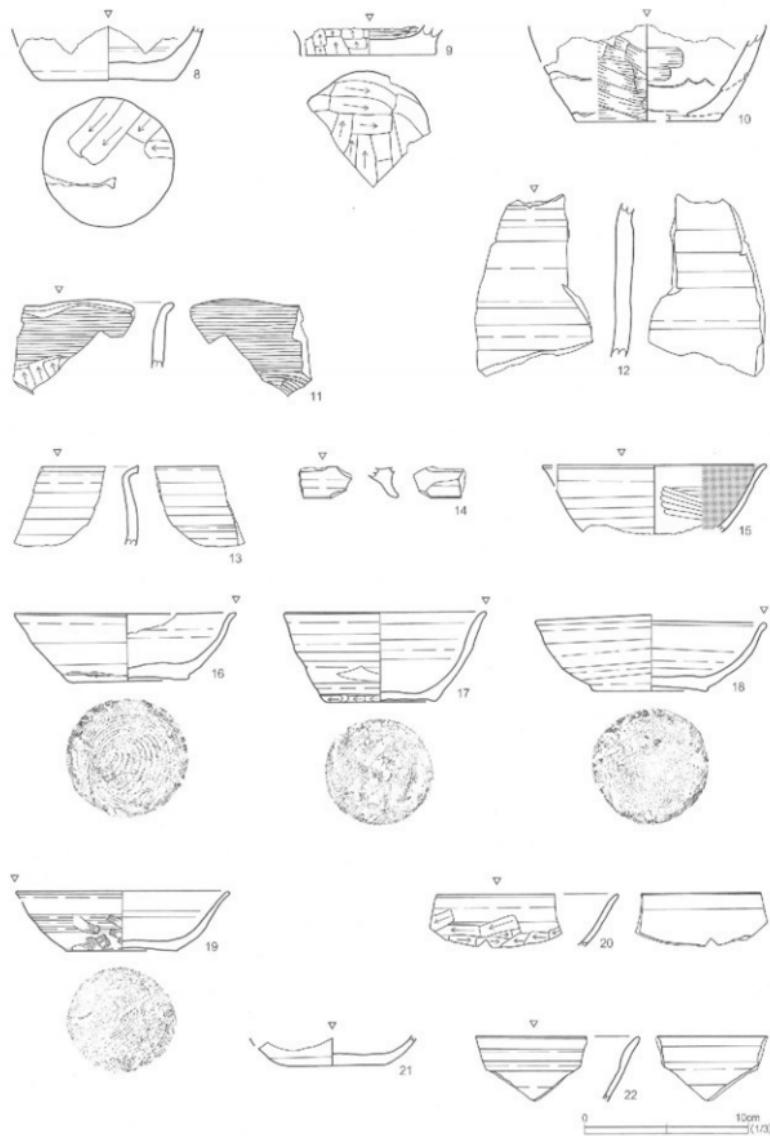
椀・下駄・不明木材等が10数点出土し、主にSD02内から出土している。図示したのが木製椀2点（301・302）と木製下駄（303）である。（301）は口縁部付近が欠損し、内外面ともに剥離が多く見られる。外面には何らかの家紋が施されていたと思われるが、剥落が著しく不明である。（302）はほぼ外形上は残存しているが、内外面とも剥離が著しい。（303）の差歎下駄は後ろの歎の部分と踵の部分を欠損している。残存部分の長さは12.5cm、幅は台部で6.0cm、歎部で9.6cm残存し、高さは9.0cm遺存している。これらの木製品の材質だが（301・302）の材質はブナ属、（303）の下駄の材質は台部がハンノキ属、歎部分がクリであることが、分析の結果判明した。詳細は付録2を参照して頂きたい。

（註）

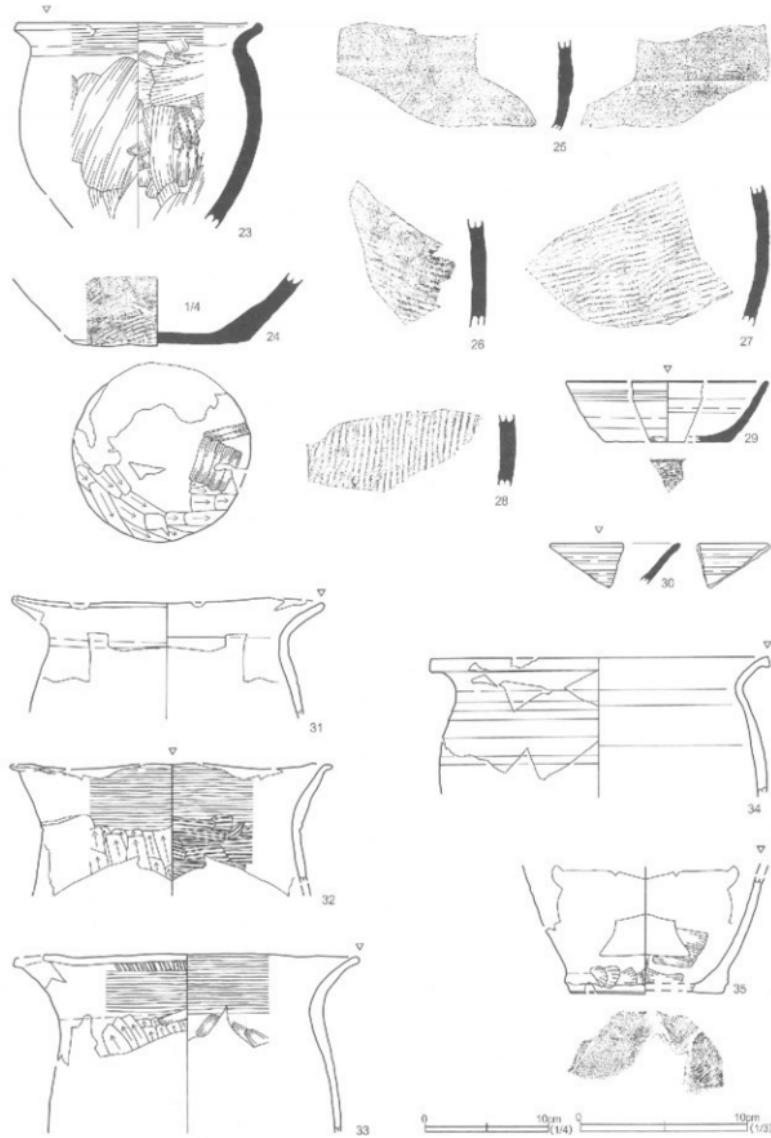
1. 常滑産陶器の分類、年代観の設定には中野晴久氏（常滑市民俗資料館）、羽柴直人氏の御教示によるところが大である。記して感謝の意を表するところである。



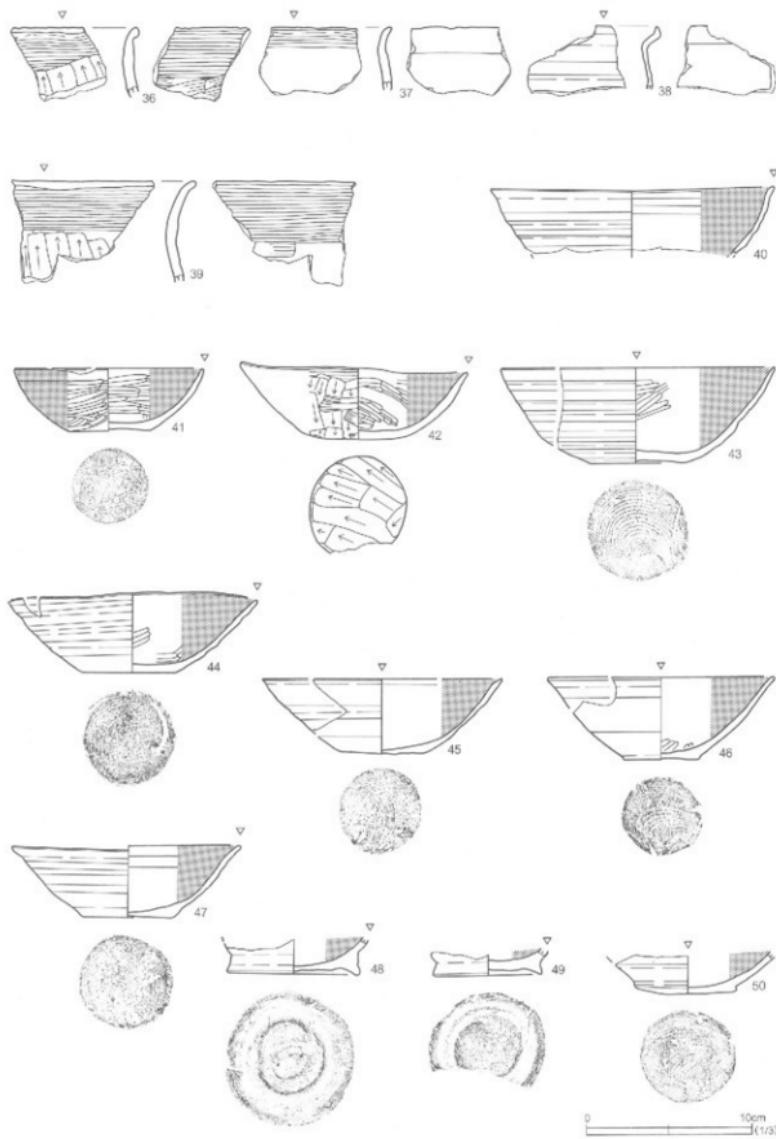
第46図 遺構内出土遺物（土器1）



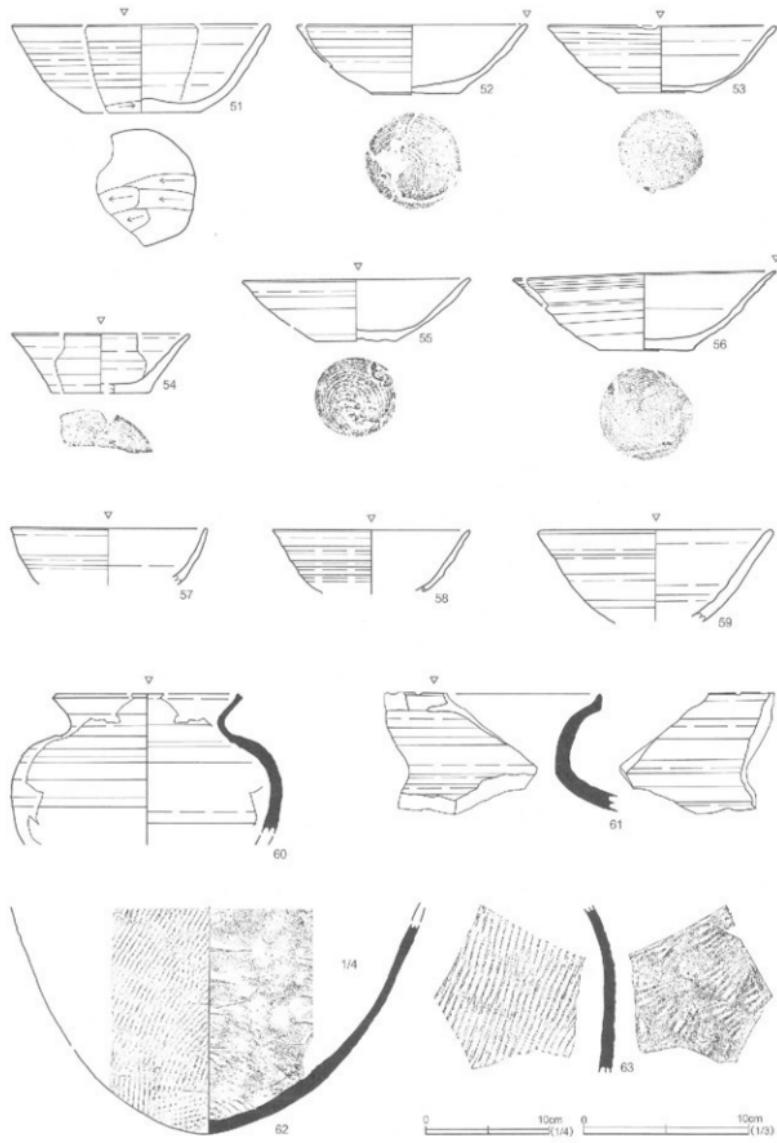
第47図 遺構内出土遺物（土器2）



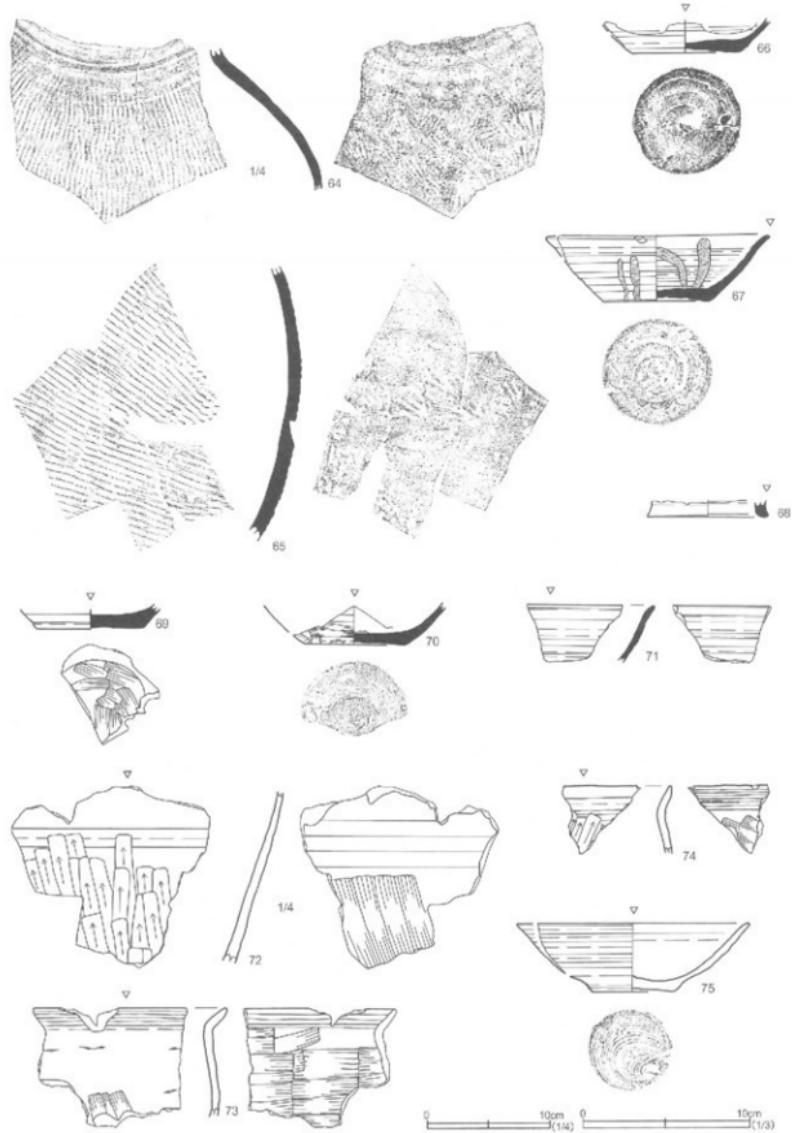
第48図 遺構内出土遺物（土器3）



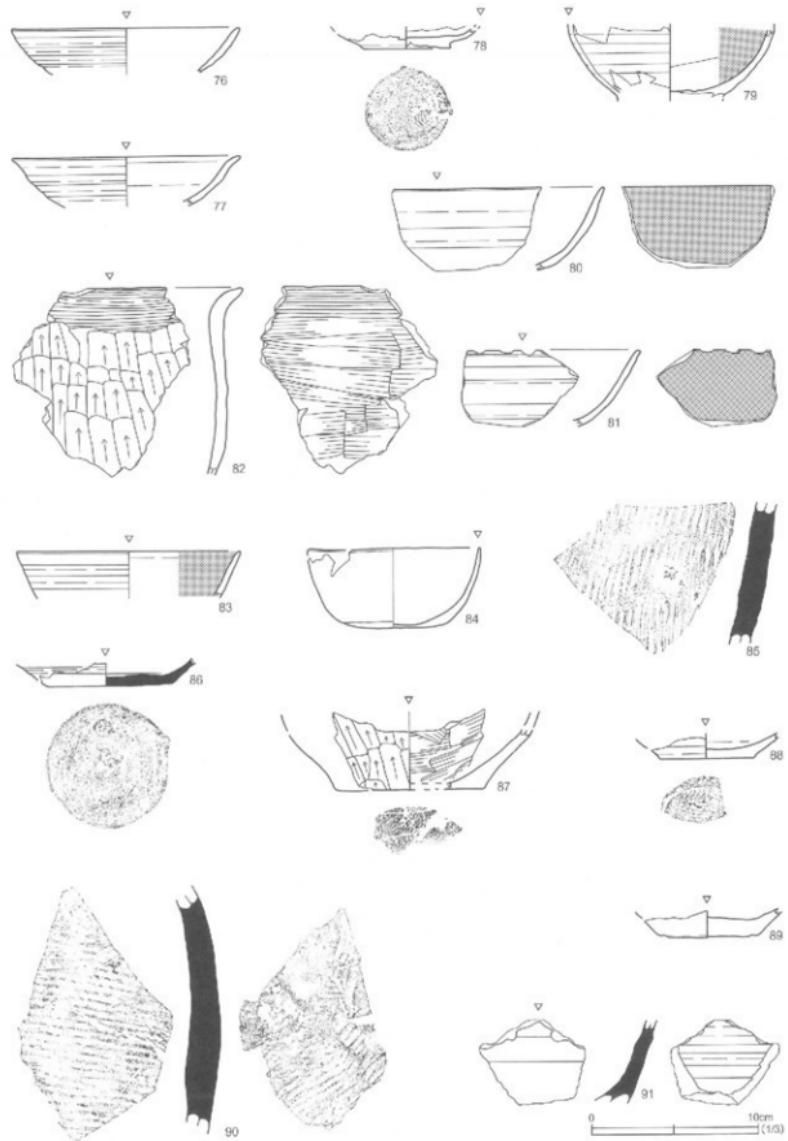
第49図 遺構内出土遺物（土器4）



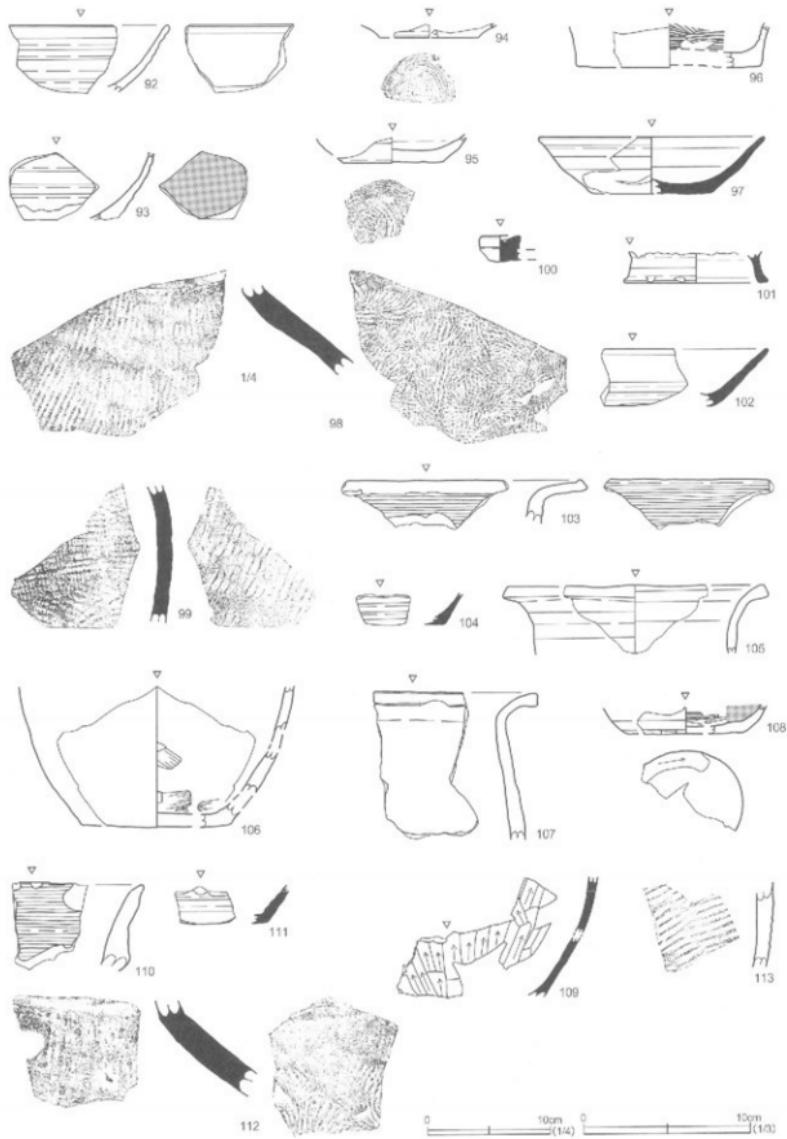
第50図 遺構内出土遺物（土器5）



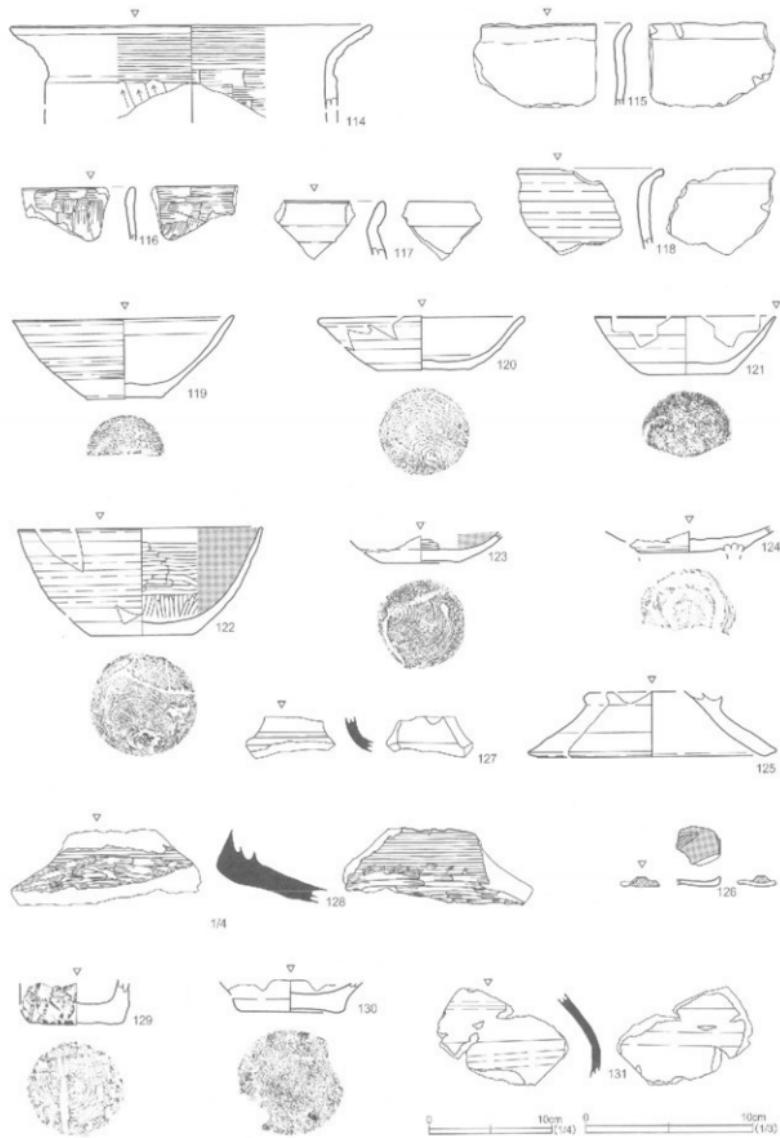
第51図 遺構内出土遺物（土器6）



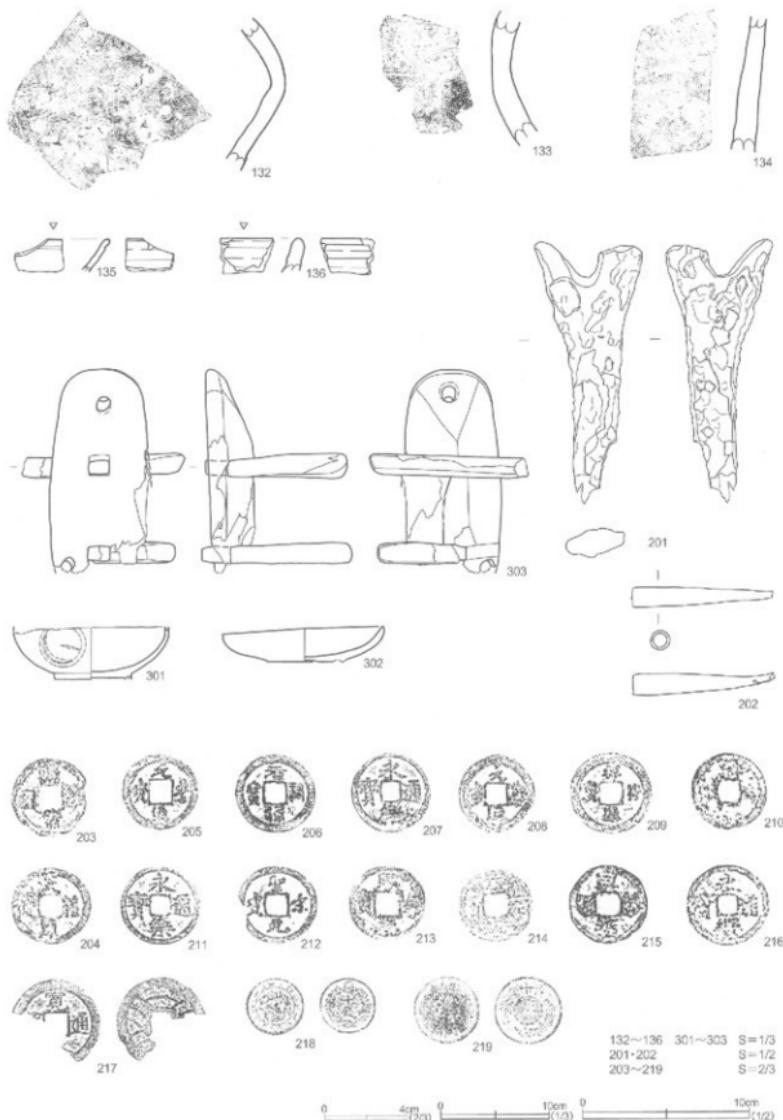
第52図 遺構内出土遺物（土器7）



第53図 遺構内出土遺物（土器8）



第54図 遺構外出土遺物（土器9）



第55回 遺構内・外出土遺物（陶器・金属・木製品）



第56図 遺構内・外出土遺物（石器）

第11表 土器觀察表

番号	山名・位置・樹種	樹高	葉幅(cm)	葉		花期	被 考
				内面	外面		
1	S 101 カマド RP1・2 * 6m	22.3	29.8 (8.0)	ロクロ / ハラチゲ / ロクロ / ハラチゲ /	ロクロ / ハラチゲ /	8月 / 外面	越後
2	S 101 カマド RP5 * 4.0m	18.9	33.95 (8.6)	ロクロ / ハラチゲ / ロクロ / ハラチゲ /	ロクロ / ハラチゲ /	8月 / 外面	越後
3	S 101 カマド RP5 * 4.0m	22.9	29.8 (8.0)	ロクロ / ハラチゲ / ロクロ / ハラチゲ /	ロクロ / ハラチゲ /	8月 / 外面	越後
4	S 101 開拓 * 1.0m	—	9.8 (16.0)	ロクロ / ロクロ / ロクロ / ロクロ /	ロクロ / ロクロ /	8月 / 外面と結合	越後
5	S 101 開拓 RP4 * 1.0m	—	11.0 (6.5)	ロクロ / ロクロ / ロクロ / ロクロ /	ロクロ / ロクロ /	8月 / 外面と結合	越後
6	S 101 周辺	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
7	S 101 周辺	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
8	S 101 周辺	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
9	S 101 開拓 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
10	S 101 カマド RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
11	S 101 開拓 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
12	S 101 外延地	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
13	S 101 外延地 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
14	S 101 開拓 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
15	S 101 開拓 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
16	S 101 開拓 RP9 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
17	S 101 開拓 RP10 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
18	S 101 開拓 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
19	S 101 開拓 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
20	S 101 開拓 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
21	S 101 開拓 RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
22	S 101 カマド RP1 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
23	S 101 梶田面	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
24	S 101 開拓 RP3 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
25	S 101 開拓 RP3 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
26	S 101 開拓 RP3 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
27	S 101 開拓 RP7 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
28	S 101 開拓 RP7 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
29	S 101 開拓 RP7 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
30	S 101 開拓 RP7 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
31	S 102 カマド RP10 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
32	S 102 RP12 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
33	S 102 カマド RP11 * 1.0m	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後
34	S 102 P6	—	—	—	—	8月 / 外面と結合	越後

場所	川三位位置・部位	種類	法面(㎝)	前面		側面	背面	参考
				口透	窓透			
25	S 102 カマド R P 1	土留器 置	—	[7.85] (9.1)	ヘラナテ/ヘラトチ	窓透/外窗 窓透/後面	窓透/後面	底部に人型模様・全体的に模様が美しい
36	S 102 カマド 左舷	土留器 置	—	[4.0]	—	ヨコナナデ/ヨコナナデ	横/横	49 32
37	S 102 カマド 右舷	土留器 置	—	[4.1]	—	ヨコナナデ/ヨコナナデ	横/横	窓透/後面・全体的に模様がひどく、調節がよさりしない
38	S 102 背筋R	土留器 置	—	[3.9]	ヨクヨク/ヨクヨク	明暗部/輪郭	口透/後面	口透/後面
39	S 102 カマド 左舷	土留器 置	—	[6.1]	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
40	S 102 カマド R P 6	土留器 置	—	[7.2]	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
41	S 102 背筋 R P 16	土留器 置	—	[11.4]	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	ヨコナナデ/ヨコナナデ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
42	S 102 体面 R P 3	土留器 置	11.0	1.6	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
43	S 102 体面 R P 9	土留器 置	—	[10.6]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
44	S 102 体面 R P 8	土留器 置	—	[13.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
45	S 102 体面 R P 22	土留器 置	—	[14.63]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
46	S 102 体面 R P 29	土留器 置	—	[10.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
47	S 102 左舷	土留器 置	—	[10.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
48	S 102 体面 R P 25	土留器 置	—	[12.2]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
49	S 102 体面 R P 26	土留器 置	—	[11.3]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
50	S 102 背筋	土留器 置	—	[2.5]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
51	S 102 P 6	土留器 置	—	[15.8]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
52	S 102 R P 19	土留器 置	—	[11.1]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
53	S 102 R P 07	土留器 置	—	[13.85]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
54	S 102 東舷 I	土留器 置	—	[10.6]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
55	S 102 気室	土留器 置	—	[14.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
56	S 102 R P 26	土留器 置	—	[15.6]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
57	S 102 K 1	土留器 置	—	[11.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
58	S 102 R P 7	土留器 置	—	[11.9]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
59	S 102 カマド 廉落上位	土留器 置	—	[11.2]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
60	S 102 P 6	土留器 置	—	[11.7]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
61	S 102 P 6	土留器 置	—	[3.9]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
62	S 102 P 6	土留器 置	—	[18.5]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
63	S 102 P 6	土留器 置	—	[10.3]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
64	S 102 P 6	土留器 大型	—	[11.6]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
65	S 102 P 6	土留器 大型	—	[16.7]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
66	S 102 体面 R P 26	土留器 置	—	[2.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
67	S 102 体面 R P 19	土留器 置	—	[4.1]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
68	S 102 カマド 左舷	土留器 置	—	[13.45]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
69	S 102 体面 R P 16	土留器 置	—	[1.0]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
70	S 102 体面 R P 12	土留器 置	—	[1.2]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が
71	S 102 周辺	土留器 置	—	[2.35]	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	ヨガキ/ヨガキ	14時付近にヨコナナデ前面の調節棒(ハメヘラナデ)が

回路	出土位置・層位	器種	法量(cm)	調査		参考	図版		
				内面/外面	内面/外面				
72	S 1.03 K 1 地下	十輪器 要	-	[1.4]	-	ロクロ・ミガキ・ヨコロ・ケツリ	S.K 1.03品灰と複合		
73	S 1.03 壁上	土輪器 極	-	[6.0]	-	ヨコテ・ナデ・ヨコナデ・ナデ	に古く開口/複数		
74	S 1.03 断面 砂土	土輪器 要	-	[4.1]	-	ヨコテ・ナデ・ヨコナデ・ナデ	に古く開口/複数		
75	S 1.03 開溝 RP 4	土輪器 环	(14.0) 4.6	4.8	ロクロ・ヨコロ・ヨクロ	に古く開口/複数	51 - 34		
76	S 1.03 K 1 地下	土輪器 环	(14.0) 2.7	-	ロクロ・ロクロ	に古く開口/複数	52 - 34		
77	S 1.03 K 1 壁上	土輪器 环	(14.0) 3.0	-	ロクロ・ロクロ	に古く開口/複数	52 - 34		
78	S 1.03 K 1 RP 3	土輪器 环	-	[1.35]	5.3	ロクロ・ロクロ	に古く開口/複数	52 - 34	
79	S 1.03 K 1 RP 3	土輪器 环	-	[1.7]	-	ヨコテのやがて不明	直面回転系切り 無調整	52 - 34	
80	S 1.03 地下	土輪器 环	-	[3.0]	-	ヨコテのやがて不明	直面回転系切り 無調整	52 - 34	
81	S 1.03 開溝 RP 5	土輪器 环	-	[4.7]	-	ミガキ・ヨクロ	内面裏色處理	52 - 34	
82	S K 1.03 壁上	土輪器 环	-	[1.6]	-	ミガキ・ヨクロ	内面裏色處理	52 - 34	
83	S K 1.03 壁上	土輪器 环	(13.65) 12.9	-	ロクロ	内面裏色處理	52 - 34		
84	S K 1.05 陶器 RP 1	土輪器 环	(10.45) 4.9	6.3	輪底など不明	全体的に體積重い・赤・オロ?	52 - 35		
85	S K 1.05 P 6 沢中	須恵器 大盤	-	[8.6]	-	ホタル・横灰	灰口・灰灰	52 - 35	
86	S B 07 P 1	須恵器 大盤	-	[1.4] 7.5	-	ホタル・横灰	灰口・灰白	52 - 35	
87	S K 1.05 地下	十輪器 燐	-	[4.7]	-	ホタル・ヘタケ	灰口・灰白	52 - 35	
88	S D 07D 壁上	十輪器 燐	-	[1.6] (5.5)	-	ホタル・ヘタケ	灰口・灰白	52 - 35	
89	S D 07D 壁上	土輪器 环	-	[1.6] (4.9)	ロクロ・ロクロ	灰口・灰白	回転系切り無調節	52 - 35	
90	S D 07D 壁上	須恵器 大盤	-	[15.2]	-	当て盤/ヘタケ	灰口・灰白	52 - 35	
91	S D 07D 壁上	須恵器 大盤	-	[3.2]	-	当て盤/ヘタケ	灰口・灰白	52 - 35	
92	S D 08 壁上	須恵器 大盤	-	[4.1]	-	ロクロ・ロクロ	灰口・灰白	52 - 35	
93	S D 08 壁上	土輪器 环	-	[5.0]	-	ロクロ・ミガキ?・ヨクロ	ミガキ・黒/焼	53 - 35	
94	S D 10 壁上	土輪器 环	(15.6) 6.0	-	ロクロ・ミガキ	直面回転系切り 無調整	53 - 35		
95	S D 10 壁上	土輪器 环	-	[1.5]	ロクロ・ロクロ	直面回転系切り 無調整	53 - 35		
96	S D 10 壁上	土輪器 环	-	[2.7] (1.26)	ハタケ・ヨクロ	直面回転系切り 無調整	53 - 35		
97	S D 10 北東 壁上	須恵器 环	(13.7) 3.5 (7.1)	ロクロ・ヨコナデ	灰口・灰口	直面・欠損者らしい	53 - 35		
98	S D 10 地下	須恵器 大盤	-	[17.4]	-	当て盤/ヘタケ	灰口・直面/ヘタケ	53 - 35	
99	S D 10 地下	須恵器 大盤	-	[6.5]	-	当て盤/ヘタケ	灰口・灰	53 - 35	
100	S D 10 壁上	須恵器 番	-	[1.6]	-	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
101	S D 10 壁上	須恵器 番	-	[1.9] (8.7)	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	53 - 35		
102	S D 10 壁上	須恵器 番	-	[4.1]	-	ヨコナデ・ヨコナデ	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
103	S D 20 北東 壁上	土輪器 番	-	[2.7]	-	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
104	S D 21 壁上	須恵器 番	-	[12.0]	-	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
105	S D 23 壁上	土輪器 番	-	[16.15] (4.45)	-	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
106	S D 23 壁上	土輪器 番	-	[3.65] (9.2)	ヘタケ?/-	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
107	S D 23 壁上	土輪器 番	-	[9.0]	ヨコテのやがて不明	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
108	S D 23 壁上	土輪器 番	-	[1.76] (7.0)	ヨコテのやがて不明	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 35	
109	S D 23 壁上	須恵器 番	-	[9.7]	-	2.7×2.2×2	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 35
110	S D 24 壁上	土輪器 番	-	[6.5]	地盤少しきず・4明	ヨコナデ	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 36
111	S D 24 壁上	須恵器 番	-	[12.3]	-	ロクロ・ロクロ	モルヒー灰/青灰	モルヒー灰/青灰	53 - 36

器名	出土地・調査位	器種	法長(cm)		内面 裏 裏 外面	色 内面 外面	備考	図版
			高さ	底径				
112 S-D30 墓土	—	贝饰器 人面	—	[6.3]	—	—	—	53
113 S-D48 墓土	—	十輪器 楊?	—	[5.1]	—	—	—	53
114 A区山 榛山面	—	土师器 製?	(22.0)	[6.0]	—	ヨコナ・ケズリ・ナデ/ヨコナ・ケズリ・ナデ	11輪器底片・闇上信元・反転文筒	54
115 A区南 榛山面	—	十輪器 楊?	[5.2]	—	—	豊原井・不明	灰白地・灰黄褐	54
116 A区北 榛山面	—	十輪器 楊?	[3.3]	—	—	ヘタナデ/ヘタナデ	灰黄褐/灰黄褐	54
117 A区北 榛山面	—	十輪器 製?	[3.6]	—	—	—	—	54
118 A区北 榛山面	—	土師器 製?	[4.9]	—	—	ロクロ/ロクロ	明治・煙	54
119 A区南 榛山面	—	十輪器 楊?	[13.5]	[4.4]	[5.9]	ロクロ/ロクロ	灰原田柄余切り・煙調整	54
120 A区北 榛山面	—	土師器 製?	[12.65]	[3.25]	5.4	ロクロ/ロクロ	灰赤原田柄余切り・無腹	54
121 A区南 榛山面	—	十輪器 楊?	[11.0]	[3.6]	[4.8]	ロクロ/ロクロ	灰赤原田柄余切り・無腹	54
122 A区南 東北朝 無縫	—	十輪器 楊?	[11.9]	[6.6]	[6.1]	ミガキ/ロクロ	灰原田柄余切り・無縫	54
123 A区南 東北朝 無縫	—	十輪器 楊?	[1.6]	[4.7]	[1.6]	ミガキ/ロクロ	内近赤原田柄余切り・無縫	54
124 T-1 K北 表土層	—	土師器 合色杯	[1.1]	—	—	—	—	54
125 A区北 東北朝 重合?	—	土師器 合色杯	[4.0]	[15.5]	[2.0]	ミガキ/ロクロ	薄透赤原田柄余切り・無縫	54
126 A区南 梅出物	—	真皿?	—	[2.6]	—	ミガキ/ミガキ	薄透赤原田柄余切り・無縫	54
127 A区南 梅出物	—	須彌器 金	—	[2.5]	—	ロクロ/ロクロ	—	54
128 A区 美深	—	須彌器 大燃	—	[6.1]	—	ヘタナ・ヨコナデ/ヘナナデ	灰・灰	54
129 I-Alise 梅出物	—	須彌器 製?	—	[2.3]	5.6	—	—	54
130 B区 林穴 甕上	—	須彌器 長脚瓶	—	[1.9]	6.1	原瓶开く・不明	灰白/淡黄褐	54
131 B区 T-4 榛山面	—	須彌器 長脚瓶	—	[7.9]	—	ロクロ/ロクロ	淡黄褐/明赤褐色	54
132 S-D19 墓土	—	常滑 大腰	—	[9.3]	—	ナデ/ナデ	13世纪前半?	55
133 S-D19 墓土	—	常滑 人面	—	[8.2]	—	ナデ/ナデ	13世纪前半?	55
134 A区北 榛山面	—	常滑 大腰	—	[8.4]	—	ナデ/ナデ	13世纪前半?	55
135 B区 T-2 義士碗	—	白磁 碗	—	[2.0]	—	ロクロ/ロクロ	13世纪前半?	55
136 S-I02	—	常滑 油抹	—	[2.2]	—	ロクロ/ロクロ	常滑の油抹か? 13世纪前半?	55

第12表 金属・木製品観察表

図番	種別	遺構名・出土位置・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考		()は推定値	
							図版	写版	図版	写版
201	鐵?	S B02 P 5 檜出面	(11.3)	4.55	1.25	61.19			55	37
202	煙管	S D02D 埋土	6.05	0.9	0.1	3.85			55	37

図番	種別	遺構名・出土位置 外径(cm) 内径(cm)	重量(g)	銘名	初期年	備考		()は推定値		
						外径(cm)	内径(cm)	初期年	備考	図版 写版
203	古錢	S K15 RM 1	2.4	0.8	2.98	嘉祐通寶	1056			55 37
204	古錢	S K15 RM 2	2.4	0.7	2.41	大祐通寶	1017	摩滅著しい		55 37
205	古錢	S K23 RM 1	2.3	0.7	3.21	元豐通寶?	1078	205~210はまとまって出土 上から番号順に取り上げた		55 37
206	古錢	S K23 RM 2	2.4	0.65	4.39	元祐通寶	1086			55 37
207	古錢	S K23 RM 3	2.4	0.6	4.24	永樂通寶	1408			55 37
208	古錢	S K23 RM 4	2.3	0.6	3.22	永樂通寶	1408			55 37
209	古錢	S K23 RM 5	2.4	0.7	2.76	聖宋元宝	1101			55 37
210	古錢	S K23 RM 6	2.3	0.7	3.87	熙寧元宝?	1068			55 37
211	古錢	S K24 RM 1	2.4	0.7	3.77	元豐通寶?	1078	211~214はまとまって出土 (上から番号順に登録)		55 37
212	古錢	S K24 RM 1	2.4	0.6	3.43	祥符通寶	1008			55 37
213	古錢	S K24 RM 1	2.3	0.7	3.07	聖宋元宝	1101			55 37
214	古錢	S K24 RM 1	2.2	0.8	2.47	絶落著しく不明	—			55 37
215	古錢	S K24 RM 2	2.35	0.7	2.75	熙寧元宝	1068			55 37
216	古錢	S K24 RM 3	2.5	0.6	2.95	永樂通寶	1408			55 37
217	古錢	II A 2 h 檜出面	2.65	0.7	3.02	寛永通寶 四文銭				55 37
218	古錢	A区南 表土	1.65	—	2.36	十銭銀貨		明治三十八年		55 37
219	古錢	表採	2.05	—	1.47	十銭(アルミ)		昭和十五年		55 37

図番	遺構名・出土位置・層位	器種	法量(cm)			材質	備考		図版 写版	
			口徑	器高	底徑		口縁部欠損、外面家紋が施さ れているが絶落著しく判読不能	55 37	図版	写版
301	S D02D 埋土	椀	—	(3.2)	4.65	ブナ属				
302	S D02A 埋土	椀	9.9	2.2	4.7	ブナ属	ほぼ完形の創体だが内外面 とも剥落が著しい			
図番	遺構名・出土位置・層位	器種	計測値(cm)			材質	備考		図版 写版	
			幅	高さ	厚さ		高さ	幅:ハシノキ 高さ:クリ		
303	S D02A 埋土	下駄	(9.8)	(12.5)	9.2					55 37

第13表 石器観察表

〔 〕は残存個

図番	遺構名・出土位置・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	写版
401	S D10 埋土	石鎌	1.6	1.4	0.35	0.47	黒曜石	56	38
402	S D21 埋土	不定形	3.0	1.55	0.85	2.85	頁岩 北上山地	56	38
403	S D24 埋土	石鎌	2.4 ¹	1.15	0.55	1.26	頁岩 北上山地	56	38
404	S D31 埋土	石鎌	[4.15]	[1.45]	0.55	2.61	頁岩 北上山地	56	38
405	S D32 埋土	石鎌	[1.95]	[1.2]	0.3	0.35	黒曜石	56	38
406	S D32 埋土	不定形	2.45	1.6	0.35	0.88	頁岩 北上山地	56	38
407	遺構外 I A19j 検出面	石鎌	[1.95]	[1.3]	0.3	0.61	メノウ 北上山地	56	38
408	遺構外 A区 検出面	不定形	1.2	1.7	0.35	0.39	頁岩 北上山地	56	38
409	遺構外 T 3 検出面	不定形	1.05	1.25	0.2	0.19	黒曜石	56	38
410	遺構外 南 検出面	不定形	2.2	1.45	0.6	1.6	黒曜石	56	38
411	遺構外 T 2 表土層	不定形	2.65	1.55	0.95	3.75	黒曜石	56	38
412	遺構外 T 4 表土層	不定形	2.55	2.55	0.75	3.28	メノウ 北上山地	56	38
413	遺構外 T 3 表土層	不定形	2.8	2.55	0.6	3.65	頁岩 北上山地	56	38
414	遺構外 T 5 表土層	不定形	3.95	2.6	0.85	7.53	頁岩 北上山地	56	38
415	遺構外 B区 検出面	不定形	8.85	5.6	1.25	63.08	頁岩 北上山地	56	38
416	遺構外 南側 III層	不定形	6.05	3.65	1.35	23.65	頁岩 北上山地	56	38
417	S D02D 埋土	不定形	—	—	—	0.58	頁岩 北上山地	—	38
418	S D02D 埋土	不定形	—	—	—	5.86	黄鉄鉱 奥羽山脈	—	38
419	S D43 埋土	不定形	—	—	—	3.49	メノウ 北上山地	—	38
420	S K28 埋土	不定形	—	—	—	5.79	黒曜石	—	38
421	遺構外 T 4 表土層	不定形	—	—	—	2.76	メノウ 北上山地	—	38
422	遺構外 T 2 表土層	不定形	—	—	—	6.06	黒曜石	—	38

第V章　まとめ

第1節　遺構・遺物

＜竪穴住居跡・竪穴状遺構＞ A区より3棟検出された。開口時の掘削で床面近くまで削平されているものがほとんどで残存状況は不良である。削平を受けている関係で平面形・規模ははっきりしないが、平面形は隅丸方形形状を呈し、規模は一辺5～6mを測る。前述のような検出状況のため埋土が非常に薄いため、埋土の傾向は見いだせなかったが、自然堆積を呈する遺構がほとんどで、S I 01の埋土からは灰白色火山灰が層状に確認されている。周溝は壁際に途切れなく、貼床も住居全面に施している傾向が見られる。カマド設置方向には規則性はみられないものの、本体部の袖は土師器を芯材にして褐色系粘土で構築している傾向が見られる。煙道部は掘り込み式なのか割り抜き式なのかは、削平によって上半部が消失しているため不明である。これらの竪穴住居跡の所属時期だがS I 01・02は9世紀後半代、S I 03は平安時代のものではないかと思われる。

竪穴状遺構はA・D区より計4棟検出された。開口時の削平により住居施設の大半が消失したもの、残存している貼床の広がりもしくは周溝・主柱穴の配置等から見て竪穴であると判断した遺構のうち、カマド・炉等が無い為、性格不明な遺構を本報告では竪穴状遺構としている。削平や調査区外に遺構が延びている関係で平面形・規模ははっきりしないが、一辺4～7mの隅丸方形形状を呈すると推測される。これらの遺構の所属時期はSK I 01は9世紀末～10世紀前半代、SK I 03は平安時代、SK I 05は非クロロの平底の壺が周溝から出土していることから、8世紀末～9世紀初頭という年代観が想定される。

また、S I 01からは外延溝が検出されている。この外延溝は多賀城付近で比較的類例が認められる（多賀城跡調査研究所1996）。ただし多賀城付近の類例の事例を見てみると、外延溝に接続する住居内の周溝ないし暗渠状の溝に瓦をドーム状に覆い被せてある場合も認められる。本遺跡の場合は外延溝に接続する周溝のうちカマド付近のみ上師器盤の体部を割りドーム状に覆い被せ、粘土で被覆している。本遺跡のものと多賀城周辺の事例は覆い被せている材料自体は異なるものの、構造と用途に関しては類似点が認められる。また、岩手県内においては奈良時代の事例ではあるが台太郎遺跡R A M 1件居などで見られる（岩垣文2001）。また、平安期では芦名沢I遺跡6号住居跡において住居外にまで延びている溝が確認されている（岩垣文1997）。これらの溝は覆い被せている部材は確認されていないので、板などで覆い被せて排水溝として使用された可能性が指摘されている（岩垣文1997・2001）。S I 01の外延溝の場合も周辺が水はけが非常に悪いことも勘案すると、排水を目的として構築されたのではないかと思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 北側調査区より5棟検出されている。木遺跡の掘立柱建物跡は開口部径71～109cmの掘方をもち、柱間約2.0～2.2mを測る2×2間の掘立柱建物跡（SB 07）と、開口部径19～46cmの掘り方を持ち、柱間約1.8～3.15mを測る掘立柱建物跡（SB 01・03・04・05）に大きく2つに分けられ、後者が主体を占める。これらの掘立柱建物跡の時期は前者が掘方から出土した土師器・須恵器片からみて平安時代、後者は磨滅した土師器片・須恵器片が出土しているが、埋土や遺物の出土状況等からみて遺構に直接伴う遺物ではないと判断していることから不明である。また、このSB 07とS I 02・SK I 01の軸線が類似していることは興味深い。

第14表 聚穴住居跡一覧表

〔 〕は残存値

遺構名	平面形	規模（m）	壁高（cm）	床面施設	カマド主軸方向	埋土の色調	出土遺物
S 101	方形	3.84×[3.21]	3.9～11.0	柱穴1基	N 41°～E	灰黄・にぶい黄褐色	土師器 須恵器
S 102	方形	5.76×[3.16]	16.0～26.5	柱穴8基	W 24°～N	にぶい黄褐色・暗褐色	土師器 須恵器
S 103	方形	[6.81]×[5.18]	—	土坑1・柱穴2	—	灰黄褐色	土師器 須恵器
S K101	方形	[4.0]×[3.70]	8.4～12.6	土坑・柱穴各2	—	黑褐色	土師器 須恵器
S K103	方形	[7.1]×[3.58]	2.3～6.9	土坑1・柱穴5	—	黑褐色	土師器 須恵器
S K105	方形	[6.3]×[6.10]	—	柱穴5	—	黑褐色・にぶい黄褐色	土師器
S K106	方形	[2.8]×[0.84]	9.4～25.5	—	—	にぶい黄褐色・黄褐色	土師器

第15表 堀立柱建物跡一覧表

遺構名	規模（m）	長軸方向	件間寸法（m）	柱穴の規模（cm）	柱穴の深さ（cm）	埋土の色調	出土遺物
S B01	3.24×3.15	E-33°～N	1.86～3.15	28～39	17.0～33.0	灰黄褐色・明黄褐色	土師器
S B03	2.98×1.97	W-9°～N	1.97～2.98	26～35	13.6～26.0	—	土師器 須恵器
S B04	2.54×2.51	W-6°～N	2.51～2.54	19～35	9.4～30.8	—	—
S B05	2.54×2.48	N-1°～W	2.48～2.54	23～46	4.6～30.8	—	—
S B07	4.34×4.14	W-35°～N	2.04～2.24	71～109	22.0～37.0	浅黄・灰黄褐色	土師器 須恵器

＜墓壙＞ 北側調査区より6基検出されている。開田時の削平によって遺構の大部分が消失し、僅かに底部付近のみが残存している土坑のうち、①埋土が多量の炭と焼土・焼骨を含むもの（SK22・27）。②六道銭に使用されたと思われる永楽錢等の古銭が出土したもの（SK15・23・24）。③棺桶の底板が残存しているもの（SK17）を墓壙とした。これらの墓壙から出土した古銭の種別を遺構別にまとめたものが第17表である。基本的には永楽銭を主体として本銭・模鋳銭が混在するものの北宋銭の組み合わせが認められるもののこれ以上の傾向は見いだせなかった。しかし、この古銭の組み合わせは中世末～近世初頭における六道銭の出土状況には類似しているものと思われる。また、平面形・規模から検討してみると大きく2つに分けられ①平面形が長軸0.8～1mの楕円形を呈し、埋土は炭を主体に焼土と少量ながら焼けた骨片が含まれ、永楽銭を主体とした古銭が埋葬されたものと、径1.1m前後円形を呈し、底部に棺桶の底板が残存するものとに分けられ、前者は形状・規模・埋葬された古銭の状況が宮城県北部の中世末～近世初期にかけての火葬墓と類似することから中世末まで遡る可能性が考えられ、後者は遺物が出土していない為不明であるが、状況からみて近世以降の時期のものではないかと思われる。また、墓壙は場に区分された内部地区からのみ検出されている点は興味深い。

＜井戸＞ 北側調査区より1基検出されている。平面形は円形を呈し、開口部は径85×84cmの楕円形状を呈し、深さ1.6m弱を測る。遺物は磨滅した土師器片が出土しているものの、形になるものはほとんど無く、遺構に伴う遺物ではないと判断しているため、時期は不明である。

第16表 墓壙一覧表

遺構名	径(m)	深さ(cm)	長軸方向	平面形	埋土色調	出土遺物	備考
SK15	1.08×0.68	9.8	N-17°-W	隅丸長方形	にぶい黄橙・黒色	土師器 占錢 中世末～近世初頭	
SK17	1.14×1.05	54.7	-	円形	褐灰・黄褐色	土師器	棺桶底部残存近世?
SK22	1.12×0.72	12.0	E-35° N	長方形	にぶい黄橙・黒色	土師器	中世末～近世初頭
SK23	1.05×0.78	10.0	N-34°-W	隅丸長方形	にぶい黄橙・黒色	古錢	中世末～近世初頭
SK24	0.94×0.82	24.7	N-35°-W	隅丸長方形	にぶい黄橙・黒色	土師器 古錢	中世末～近世初頭
SK27	1.00×0.40	20.2	E-33°-N	楕円形	灰黄褐色・黒色	土師器	中世末～近世初頭

第17表 墓壙出土古錢一覧表

	永承通寶	祥符通寶	天禧通寶	嘉祐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	元祐通寶	聖宋元寶	不 明	合 計
SK15			1	1						2
SK23	2				1	1	1	1	1	6
SK24	1	1			1	1		1	1	6

第18表 井戸観察表

遺構名	径(m)	深さ(cm)	長軸方向	平面形	埋土色調	出土遺物	備考
SE01	0.95×0.84	153.6	N-15° E	楕円形	褐灰・黒色	土師器	

第19表 土坑一覧表

〔 〕は残存値

遺構名	径(m)	深さ(cm)	長軸方向	平面形	埋土色調	出土遺物	備考
SK01	[1.35]×[0.90]	31.7	E-23°-N	楕円形?	黒色		
SK05	1.04×0.96	32.2	-	円形	黒褐色		
SK07	1.39×1.25	22.8	-	円形	黒褐色	土師器	
SK08	1.31×1.24	18.9	-	円形	黒色	土師器	
SK11	0.74×0.68	13.2	-	円形	暗褐色	土師器	
SK12	[1.71]×1.22	51.1	N-23° E	楕円形?	黒褐色・緑灰色	土師器	
SK13	1.34×1.31	41.3	-	円形	にぶい黄橙・黒褐色	土師器	
SK14	0.68×0.60	6.0	-	円形	灰黄褐色	-	
SK18	[0.92]×[0.88]	22.4	E-33°-N	不整形	黒褐色・にぶい黄褐色	土師器	
SK19	0.97×0.82	25.5	N-41°-E	楕円形	黒褐色	土師器	
SK21	1.70×1.18	42.7	W-21° N	楕円形	黒褐色・褐灰・灰黄褐色	土師器	
SK26	1.10×0.76	10.1	N-9°-E	長方形	にぶい黄褐色	-	
SK29	0.70×0.69	18.5	-	円形	褐灰色	土師器	
SK30	0.71×0.42	16.7	N-40°-W	楕円形	にぶい黄褐色	-	
SK28	2.88×2.19	71.0	E-46° N	楕円形	黒褐色・灰黄褐色・黄褐色	土師器	
SK31	0.90×0.55	25.0	E-39°-N	楕円形	灰黄褐色	土師器	
SK33	[0.44]×0.62	10.3	N-26° W	楕円形?	にぶい黄褐色・褐灰色	-	

<土坑> 調査区各地より17基検出されている。平面形は円形・梢円形を呈し、規模は68cm～2.88mを測る。遺物は磨滅した土師器片が出土しているものの、形になるものはほとんど無く、遺構に確実に伴う遺物ではないと判断しているため、時期は不明である。平面形・規模等を一覧表にしたもののが第19表であるが、ここから明確な傾向は見いだせなかった。

<堀跡・溝跡> 堀跡はA区東半部より1条（SD19）検出されている。開口部幅約1.2m、深さ5～60cm、断面形は逆台形ないし丸底状を呈する。この堀は開田時の削平によって一部途切れているもののA区東半部を東西方向約45m、南北方向約15mにわたってコの字状に巡り、南側は調査区外にまで延びている。その調査区界から南へ約30m程行った場所から沢の落ち込みが始まるところから、この堀は沢まで延びていったか、方形状に区画されていた可能性が考えられるが、推測の域を出ない。この堀からは磨滅した土師器・須恵器の他に13世紀代と思われる常滑産の陶器片が出土し、近世以降の陶磁器等が出土していないことから、所属時期が中世まで遡る可能性が高いと思われるが、堀に区画された内部地区からは堀跡と同時期の可能性のある遺構は発見されなかったためこの堀の性格については不明である。また、堀に区画された内部地区からのみ、堀より新しいと思われる墓壙が検出されている事実は堀の性格を考える上で重要な意味を持つのではないかと思われるものの、確認が無いためここでは指摘にとどめる。この件は資料の蓄積が行われた段階で改めて検討したい。

溝跡は調査区各地より50条が検出されている。開口部幅20cm～1m、深さ5～40cmを測る。時期不明の溝が多数を占めるが、切り合い関係等から所属時期が竪穴住居に近いと想定される溝が北側調査区より数条検出されている（SD21・31など）。また、SD18とSD24は軸線がほとんど同じで埋土の質感も類似している。所属時期を示す遺物が出土していないため、同時存在であったのかに關しては検討を要するが、平行してこの2つの溝が位置しているということは気になる。そういう視点で見てみるとSD39とSD42も、平行しているようにも見える点が気になる。

第20表 堀跡・溝跡一覧表

遺構名	全長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	傾斜の方向	比高差(cm)	軸方向	埋土の色調	出土遺物
SD01	4.31	38～60	1.7～8.1	南東方向	1.2	E-29°～S	緑灰	
SD02A	27.66	49～211	1.5～41.8	南東方向	25.9	W-44°～N	灰	土師器 須恵器
SD02B	16.91	40～70	1.7～14.9	北西方向	5.7	W-37°～N	黄灰	
SD02C	11.50	45～88	1.3～12.8	南東方向	7.6	W-14°～N	褐灰	
SD02D	27.88	94～184	3.0～15.5	南東方向	11.5	W-32°～N	にぶい黄褐色	土師器
SD02E	12.95	59～96	2.3～7.2	南東方向	6.8	W-10°～N	褐灰	
SD03	5.70	33～47	1.6～5.5	北東方向	14.3	N-30°～E	褐灰	土師器
SD04	4.13	30～64	1.5～11.1	北東方向	7.1	E-22°～N	灰黄褐色	土師器
SD07A	24.61	20～85	1.3～14.8	北西方向	39.9	W-39°～N	褐灰	土師器
SD07B	8.87	29～46	1.6～2.4	北西方向	3.7	W-36°～N	灰黃褐色	
SD08	11.14	20～50	1.4～3.9	北西方向	18.2	W-41°～N	褐灰	土師器
SD10A	17.41	92～187	23.4～51.2	北東方向	83.0	E-17°～N	灰黄褐色土系	土師器 須恵器
SD10B	1.98	42～50	2.9～9.8	北東方向	5.7	W-22°～S	褐灰	

道構名	全長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	傾斜の方向	比高差(cm)	輪方向	埋土の色調	出土遺物
SD14	12.56	35~69	1.1~5.4	北東方向	66.5	N 21° E	暗褐色	土師器
SD15	0.85	22~36	4.6~13.2	西方向	12.6	E -11° - N	暗褐色	
SD16	2.84	33~50	1.7~10.1	北東方向	11.6	E -21° - N	褐色	
SD18A	23.12	53~117	2.4~15.0	北東方向	93.3	E -26° - N	灰黃褐色	土師器 須恵器
SD18B	9.50	90~105	6.0~16.8	北東方向	37.9	E 20° - N	灰黃褐色	土師器 須恵器
SD19	長軸 43.80 短軸東 17.60 短軸西 19.60	70~170 100~175 100~190	2.8~42.6 3.2~53.5 28.9~48.6	北東方向 北西方向 北西方向	93.1 25.7 5.7	E -38° - N N -31° - W N -37° - W	にぶい黄褐色土系 黒褐色土系 常滑	土師器 須恵器 土師器 須恵器 常滑
SD20	9.06	36~67	1.7~6.7	北東方向	12.7	E -20° - N	灰黃褐色	土師器
SD21	23.10	30~75	2.1~16.6	北東方向	87.7	E -43° - N	にぶい黄褐色	土師器 須恵器
SD23	5.50	36~59	6.6~17.3	北方向	38.0	N -9° - N	灰黃褐色	土師器 須恵器
SD24	15.11	66~99	3.2~9.6	北東方向	46.9	E 22° - N	灰黃褐色	土師器 須恵器
SD26	5.81	34~42	1.1~7.0	北東方向	2.3	E 34° - N	灰黃褐色	土師器
SD31	長軸 13.11 短軸 6.18	47~192 47~62	5.2~13.6 5.2~30.6	北西方向 南東方向	29.3 6.4	W -12° - N N -12° - W	灰黃褐色 褐灰色	土師器 須恵器 常滑
SD32	7.16	36~67	3.6~13.0	北東方向	14.3	N -40° - E	灰黃褐色・褐灰色	土師器 須恵器
SD34	7.12	22~49	1.3~4.0	北東方向	4.5	E -38° - N	暗灰黃	
SD35	4.74	75~92	3.9~14.8	北東方向	5.9	E -13° - N	暗灰黃	土師器
SD38	6.19	61~88	3.2~4.4	南西方向	4.5	E -25° - N	褐色	常滑
SD39	7.74	29~64	1.2~4.8	南西方向	1.2	E -34° - N	褐色	土師器
SD41	0.53	15~17	3.0~7.7	北東方向	0.6	E -26° - N	褐色	
SD42	11.72	43~167	1.5~12.3	南西方向	13.8	E -17° - N	灰黃褐色	土師器 須恵器
SD43	10.86	50~86	1.7~11.1	北東方向	5.4	E 33° - N	褐色	土師器
SD44	5.80	32~57	1.3~8.2	南東方向	7.8	N -29° - W	褐色	土師器
SD45	9.74	17~54	1.0~7.9	南東方向	14.6	W -40° - N	褐色	土師器 須恵器
SD47	4.76	16~39	1.3~5.8	南方向	1.0	N -1° - E	にぶい黄褐色	
SD48	4.40	46~69	2.3~12.6	南方向	7.2	S -7° - E	にぶい黄褐色	土師器
SD49	1.21	45~77	2.0~12.1	北東方向	7.0	E 40° - N	褐色	土師器
SD50	3.15	50~72	4.5~9.0	東方向	6.7	W -6° - N	灰黃褐色	
SD51	1.92	26~30	1.7~10.0	北東方向	2.2	N -42° - E	灰黃褐色	
SD52A	2.25	74~108	1.4~14.6	北東方向	9.8	E -20° - N	灰黃褐色	土師器
SD52B	1.86	54~56	2.2~9.7	西方向	6.3	W -2° - S	灰黃褐色	土師器
SD53	1.86	41~78	1.2~5.0	北東方向	2.8	N -35° - E	灰黃褐色	
SD54A	1.90	52~60	7.9~19.9	北東方向	5.3	N 37° - E	灰黃褐色	
SD54B	0.82	40	2.5~13.8	南西方向	3.2	E -30° - N	灰黃褐色	
SD55	1.89	31~56	4.0~9.8	南方向	7.8	N -6° - W	灰黃褐色	

第2節 要 約

今回の調査では、鉄五輪塔地輪に直接関わるような遺構は検出されなかったが、それと同時期の可能性の高い掘が検出された。水田造成時の削平で掘内部の遺構の大半は消失しており、僅かに検出された遺構も墨跡と確実に同時期のものといえるものは今のところ確認されていないが、墓壇が掘内部からのみ検出され、その時期が中世末まで遡る可能性が想定される。また、平安期の堅穴住居を始めとする古代の遺構は近隣の類例が増加した段階で、比較検討を行われることによって、古代以降の遺跡の調査例が少ない当該地域の様相が明らかになるものと思われる。

最後に本報告書を作成するまでには野外・室内において多くの方々に作業に従事して頂きました。調査担当者の未熟さ、段取りの悪さからくる様々な問題を辛抱強くカバーしていただいたことによって、なんとか報告書の発刊までたどり着けたと思っています。その皆様のお名前を記して感謝の意を表したい。

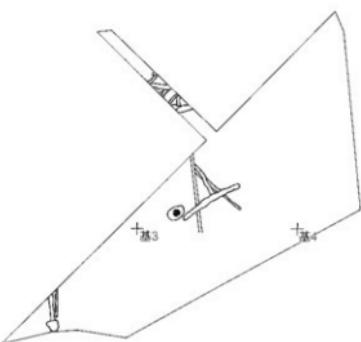
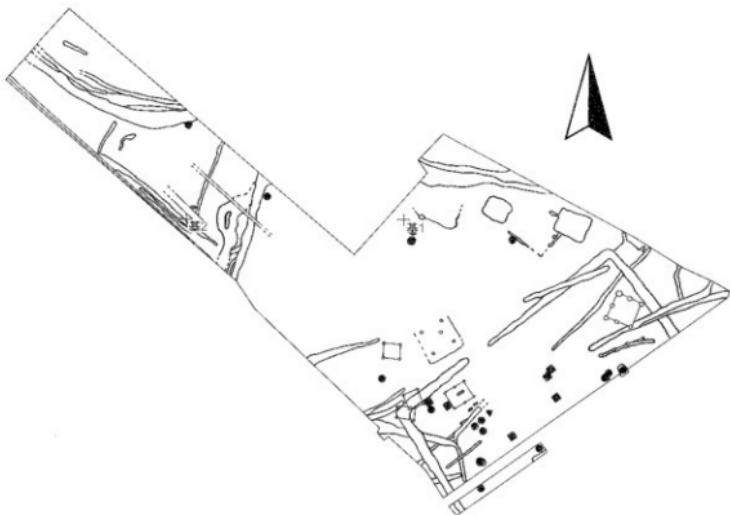
(鳥原・太田代)

野外調査：阿部恵美子、阿部かつ子、安部勝郎、阿部理津子、阿部亘、池田正芳、猪股美穂子、岩瀬拓子、岩瀬忠義、岩瀬民子、岩瀬昇、岩瀬美恵子、鶴浦安二、小野寺英子、小野寺けい子、小野寺虎登子、小野寺ヨリ子、加藤司、楠木孝興、黒沢泰子、佐々木節子、佐々木節子、佐藤勝子、佐藤官司、佐藤健、佐藤公志、佐藤とよ子、佐藤信子、佐藤芳郎、菅原カツイ、菅原文夫、菅原良子、鈴木清江、曾部晋哉、高見恭子、千葉耕一、千葉新一、千葉良雄、増子昭子

室内整理：佐藤真山美、堀間美弥子、斎藤幸恵

〈参考文献〉

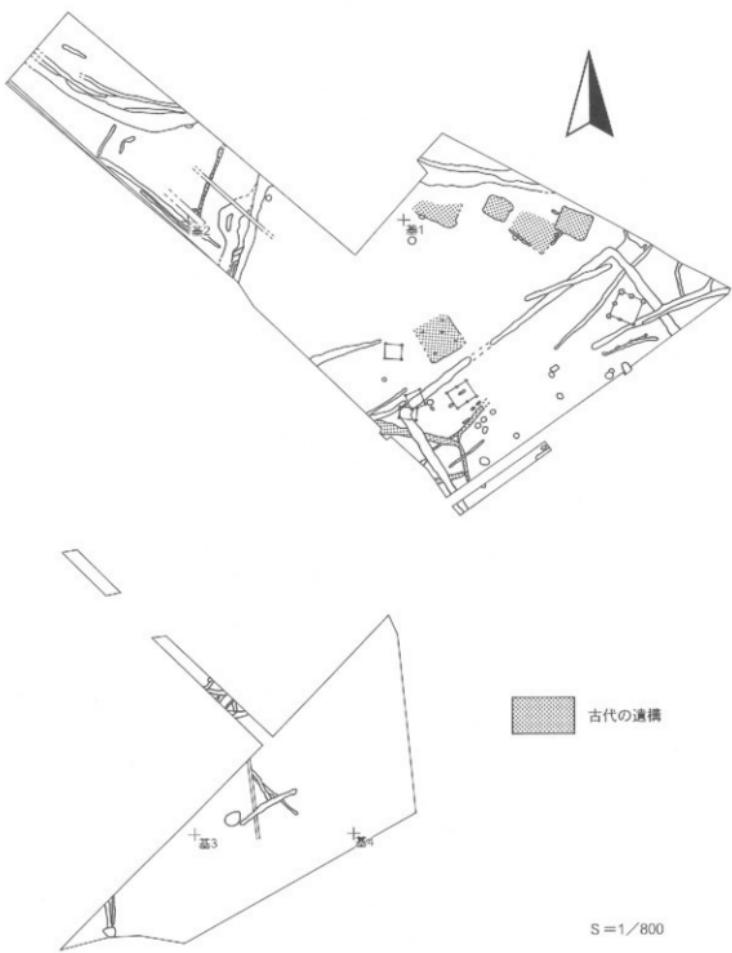
- 相原康二 1981 「岩手県南部における古代の土器編年試案」
井上雅孝 1996 「岩手県における古代末期から中世初期の土器様相（素描）」「中世土器の基礎研究XⅠ」
高橋昭治・八木光則 1994 「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学』第6号
高橋信雄 1982 「古代」『岩手の土器』
八木光則 1992 「古代斯波郡と幽羅体の土器様相」『第18回城柵古街遺跡検討会資料』
八木光則 1993 「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』第8号
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 「芦名沢1遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第295集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「台太郎遺跡第18次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
多賀城跡調査研究所 1996 『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査年報1995



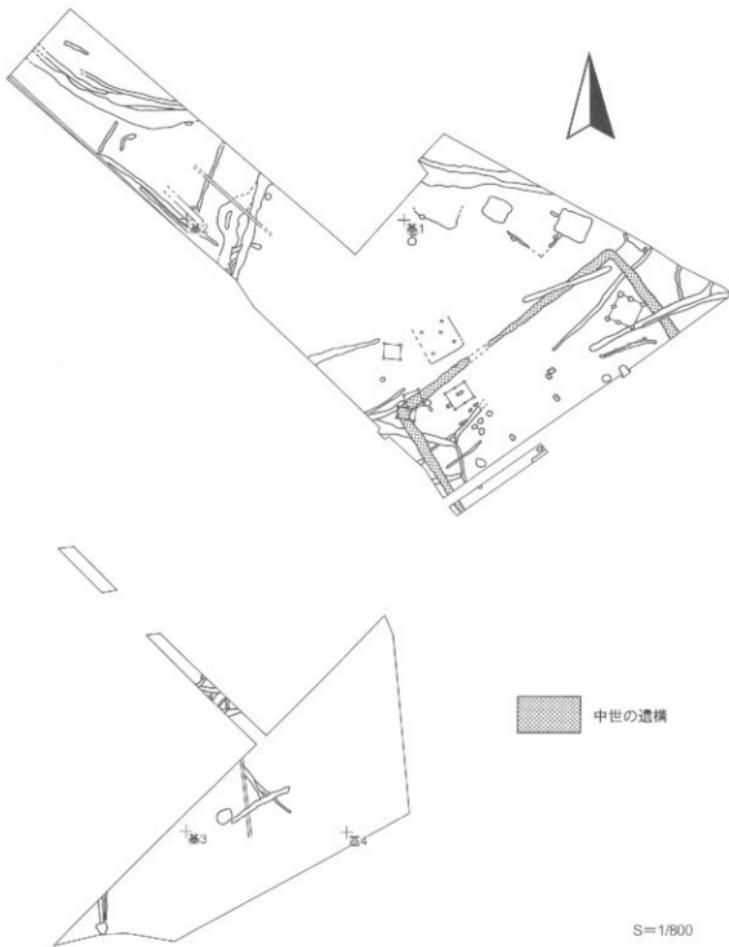
- 積穴住居跡・積穴状遺構
- （） 堀・溝跡
- ▲ 井戸跡
- 墓塚
- 土坑

S=1/800

第57図



第58図 古代の遺構



第59図 中世の遺構



第60図 遺跡周辺の現状（磁北は下、第61・62図に対応）

岩県中中國磐井郡浦津村字五輪堂繪圖



第61図 五輪堂周辺の地籍図 (1)



縮尺不定

第62図 五輪堂周辺の地籍図（2）

付編1 岩手県五輪堂遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

東北地方北部岩手県域には、岩手、十和田、秋田駒ヶ岳、焼石、鬼首など岩手県域とその周辺に分布する火山のほか、北海道、中部、中国、九州地方などの火山などから噴出したテフラ（tephra、火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの関係を求めるこことにより、地層の堆積年代や土壤の形成年代のみならず、構造や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。そこで、花泉町五輪堂遺跡において採取された試料を対象に重鉱物分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を試みることになった。なお実際には、試料に含まれる重鉱物の量が非常に少ないために、結果的にテフラ組成分析を行うことになった。分析の対象となった試料は、発掘調査担当者によってSI-01から採取された試料である。

2. テフラ組成分析

（1）分析方法

テフラ組成分析（早川、1999など）の手順は、次の通りである。

- 1) 10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（2）分析結果

試料に含まれる重鉱物については、非常に量が少ないので組成を定性的に示すことにした（後述）。火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、火山ガラス比の内訳を表1に示す。試料には、火山ガラスが多く含まれている（62.4%）。含まれる火山ガラスは、量が多い順に、スponジ状に発泡した軽石型ガラス（32.8%）、纖維束状に発泡した軽石型ガラス（24.0%）、無色透明のバブル型ガラス（3.2%）、分厚い中間型ガラス（2.4%）が認められる。

3. 屈折率測定

（1）測定方法

SI-01試料について、日本列島とその周辺のテフラカタログ（町田・新井、1992）の作成にも利用された温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）により、テフラ粒子の屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表1に示す。測定の対象となった試料に含まれる火山ガラスは、白色や無色透明で、最大径は（最大径0.6mm）である。火山ガラスの屈折率（n）は、1.502-1.507である。また重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率は（γ）は、1.706-1.708である。

4. 考察

試料に含まれる多くのテフラの起源としては、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率、斜方輝石や单斜輝石が含まれていること、さらに斜方輝石の屈折率などから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰（To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981）に由来すると考えられる。

なお、今回得られた火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ（町田・新井, 1992）に記載されているTo-aの値よりも若干高い傾向にある。この原因としては、To-aのユニット間に火山ガラスの屈折率の違いがある可能性が考えられる（町田ほか, 1981）。また、カタログに記載された試料の採取地点が給源に近いために標準試料に含まれる火山ガラスが分厚く、さらにTo-aの噴出年代が新しいために十分水和が進んでいないこと、遠隔地ではその逆で水和が進んで屈折率に違いが生じていることに起因すると考えられる（新井房夫群馬大学名誉教授談話）。より高精度の同定のためには、エレクトロンプローブX線マイクロアナライザ（EPMA）による火山ガラスの主成分化学組成分析などが有効と考えられる。

なお火山灰編年学（テフロクロノロジー）では、テフラの--次堆積層を利用するのが基本であり、その認定には現地での地質調査が必要である。またより純度の良い試料の採取のためにも、分析者による現地での試料採取の実施が期待される。

5.まとめ

五輪堂遺跡においてSI-01から採取された試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰（To-a, 915年）が多く含まれていることが明らかになった。

<文献>

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2 研究対象別分析法」, p.138-149.
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.
大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究, 11, p.232-233.
早田 勉（1999）テフロクロノロジー火山灰で過去の時間と空間をさぐる方法-. 長友恒人編「考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.113-132.

表1 SI-01試料の火山ガラス比分析結果

bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
8	0	0	6	82	60	94	250

数字は粒子数。bw : バブル型, md : 中間型, pm : 軽石型, cl : 透明,
pb : 淡褐色, br : 褐色, sp : スポンジ状, fb : 織維束状。

表2 SI-01試料の屈折率測定結果

火山ガラス				重鉱物	斜方輝石(τ)	角閃石(n2)
量	色調	最大径	屈折率(n)			
+++	白, 透明	0.6mm	1.502-1.507	(opx.cpx)	1.706-1.708	-

屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）による。++++ : とくに多い,
+++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, - : 認められない。opx : 斜方輝石, cpx : 申斜輝石。
重鉱物の()は、量が少ないことを示す。

付編2 五輪堂遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

五輪堂遺跡は、標高18~20m前後の金流川右岸の河岸段丘上に立地する。今回の発掘調査により、平安時代の堅穴住跡・堅穴状遺構、中世まで遡る可能性のある埴跡、江戸時代の墓塚、時期不明の掘立柱建物跡・井戸・溝跡・土坑等が検出されている。また、土師器・須恵器・陶磁器類、石器類、木製品、占錢等の遺物が出土している。

今回の分析調査では、出土した木製品と炭化材を対象に樹種同定を実施し、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、近世以降の椀および下駄3点（試料番号1~3）と平安時代の遺構から出土した炭化材1点（試料番号4）の合計4点である。このうち、試料番号3の下駄は芯筒下駄であり、台と齒からそれぞれ試料を採取した。したがって、合計点数は5点である。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・桟口（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

表1 五輪堂遺跡の樹種同定結果					
番号	遺構	位置・層位	時期	器種	樹種
1	SD02A	埋土	近世以降	椀	ブナ属
2	SD02A	埋土	近世以降	椀	ブナ属
3	SD02A	埋土	近世以降	下駄 A:台 B:齒	ハンノキ属 クリ
4	SKI01	西 埋土	平安時代	炭化材	コナラ属 コナラ属 コナラ属 クリ コナラ属 コナラ属 クヌギ属

木製品は、いずれも落葉広葉樹

で3種類（ハンノキ属・ブナ属・

クリ）に、炭化材は落葉広葉樹

のコナラ属・コナラ属・クヌギ属

にそれぞれ同定された。各種類

の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性・單列、1~30細胞高のものと集合放射組織がある。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は同性~異性Ⅲ型、單列、數細胞高のものから複合放射組織まである。

- ・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管徃を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。

4. 考察

木製品の柵は、2点ともブナ属であった。ブナ属の柵は、近世の遺跡から多くの報告例がある（島地・伊東、1988；能城・高橋、1996など）。民俗事例では、乾燥が難しく狂いも多いが、軟らかくて加工が容易であり、大量に入手できるために使用量も多いとされる（橋本、1979）。明治時代に編纂された史料（農商務省山林局、1912）によれば、東北地方では会津や秋田の漆器木地について調査が行われており、トチノキ、ブナ、ケヤキの利用が確認されている。また、岩手県内では、淨法寺町でブナ、トチノキ、ハンノキの利用が確認されている（橋本、1979）。これらの民俗事例は、今回の結果とも一致している。本地域周辺の山地には、現在でもブナを主とする落葉広葉樹林が分布しており（宮脇、1987）、ブナ材の入手が容易な環境にあったことが推定される。

東北地方では、近世以降に木地屋が西日本から移動してきており、ブナなどの伐採には木地屋が関わっていたことも推定される（中川、1985）。今後、木地屋等に関する文献情報も含め、柵の製作・流通に関する検討をすすめたい。

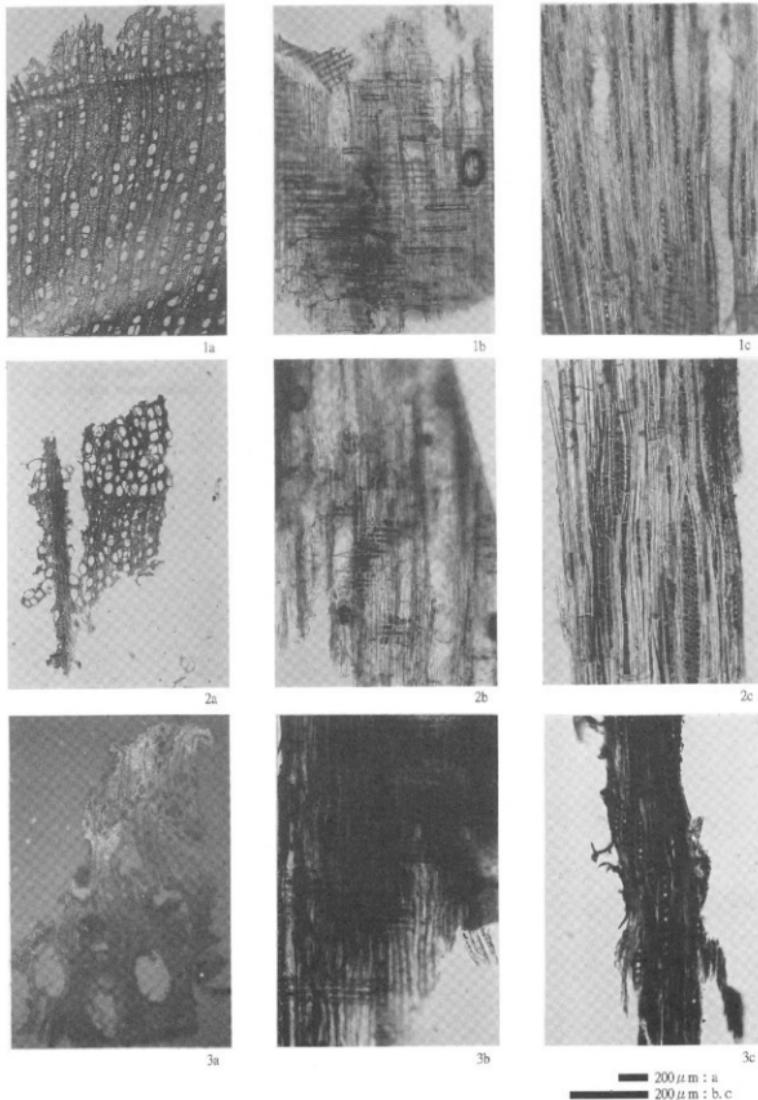
下駄は差當下駄であり、台がハンノキ質、歯がクリであった。歯に使用されたクリは、強度や耐朽性に優れた材質を有することから、材質を考慮した上で摩耗に耐え、腐りにくい木材が利用されたことが推定される。このうち、クリについては、遺跡出土の下駄の樹種調査でも比較的多く認められている。ハンノキ属については、確認された例が少ないが、栃木県日光地方で作られていた下駄にハンノキが利用されていたとの記述がある（農商務省山林局、1912）。ハンノキ属も比較的強度の高い材質の種類が多いことから、材質を考慮した選択が行われていた可能性がある。

平安時代の遺構から出土した炭化材は、構築材等の一部が炭化・残存した可能性があるが、詳細は不明である。樹種は、落葉広葉樹のクヌギ節であった。県内では、同時期の炭化材について樹種同定を行った例が少なく、木材利用に関しては不明な点が多い。クヌギ節は、集落周辺に見られる二次林（雜木林）の構成種であり、重硬で強度が高い材質を有する。このことから、本遺跡周辺で入手が可能な中から強度などの材質を考慮して、木材が選択・利用された可能性がある。

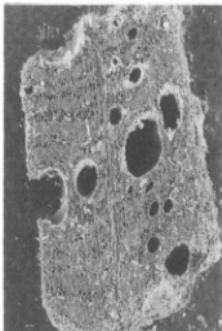
今後、同時期の木材利用に関する資料をさらに蓄積し、選択性や地域性などについても検討したい。

<引用文献>

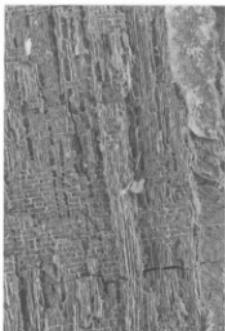
- 橋本鉄男（1979）ろくろ（ものと人間の文化史31）。444p., 法政大学出版会。
宮脇 昭編（1987）日本植生誌 東北。605p., 美文堂。
中川重年（1985）木地屋の世界 その移動と森林の変化。「ブナ帯文化」。p.165-184, 恩索社。
能城修一・高橋 敦（1996）中・近世における木材利用。第11回植生史学会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨。p.7-11。
農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用。1308p., 大日本山林會。
島地 謙・伊東隆大編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 雄山閣。



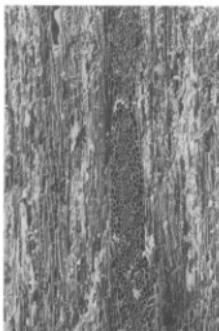
図版1 五輪堂遺跡の木材



4a



4b



4c

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

1. ハンノキ属 (試料番号 3 A)
2. ブナ属 (試料番号 1)
3. クリ (試料番号 3 B)
4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号 4)
a:木口、b:径目、c:板目

図版 2 五輪堂遺跡の炭化材

写 真 図 版

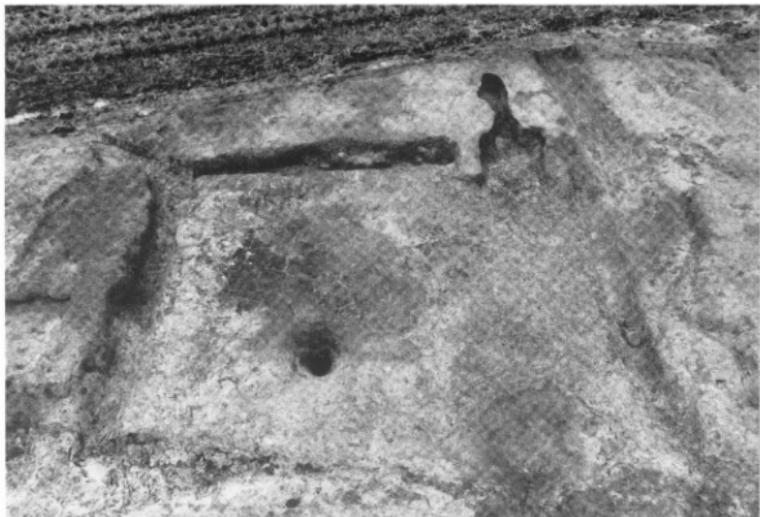


航空写真 (N→)



調査終了全景 (E→)

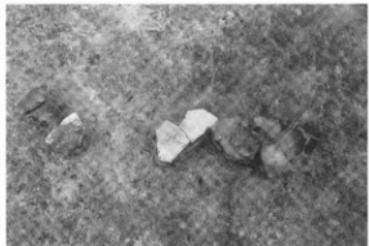
写真図版 1 航空写真・調査終了全景



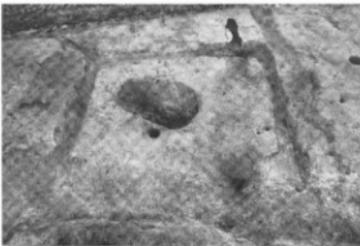
完掘 (S→)



断面 W-E (S→)



遺物出土状況 (E→)

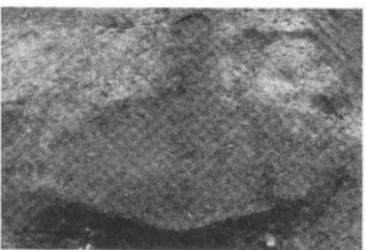


掘り方完掘 (S→)

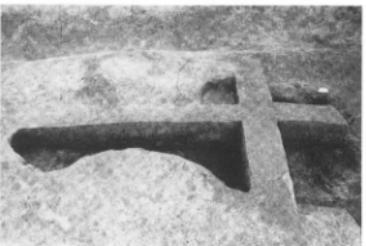
写真図版2 SI01竪穴住居跡 (1)



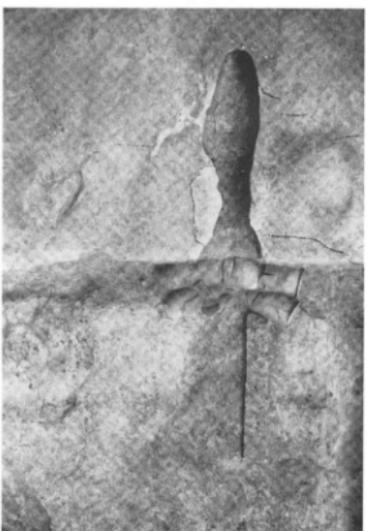
カマド完掘 (S→)



カマド底出状況 (SW→)



カマド断面N-S (W→)



カマド貼床下遺物出土状況 (S→)

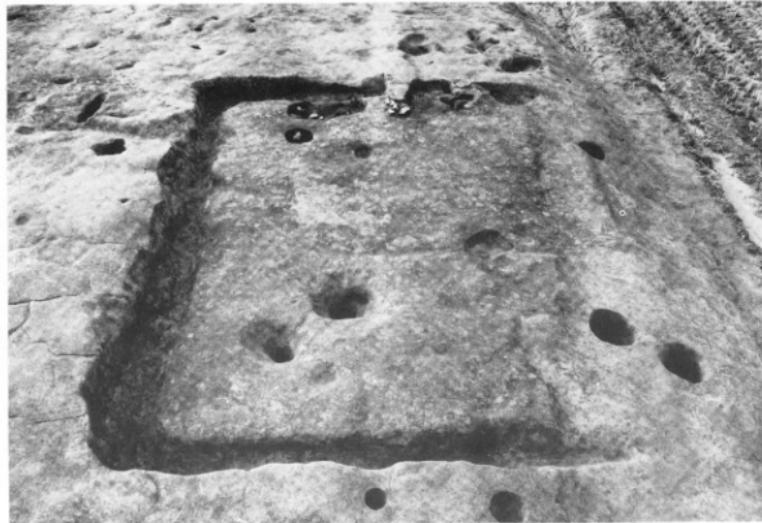


カマド貼床下遺物出土状況 (S→)

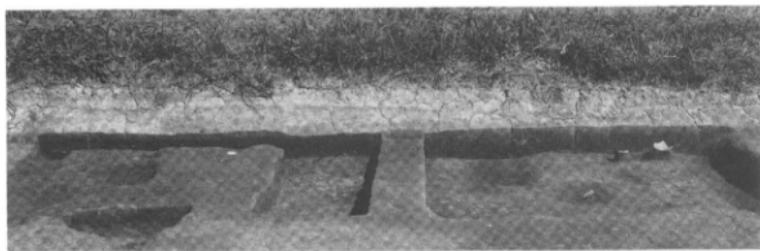


カマド貼床下遺物出土状況 (S→)

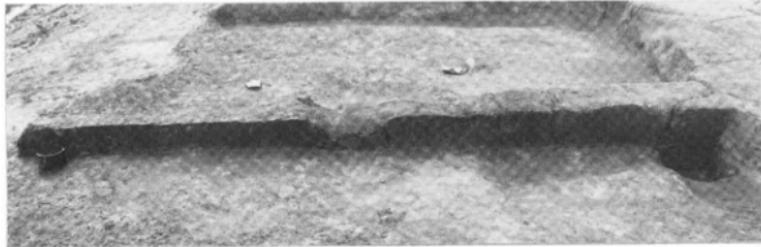
写真図版 3 SI01竪穴住居跡 (2)



完掘 (SE→)



断面 W-E (S→)

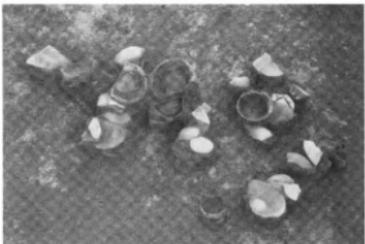


断面 N-S (W→)

写真図版 4 SiO₂竪穴住居跡 (1)



掘り方壳掘 (SE→)



遺物出土状況 (N→)



カマド検出状況 (SE→)



カマド断面 W-E (S→)



カマド完掘 (SE→)



カマド袖断ち割り断面 (E→)



カマド遺物出土状況 (SE→)

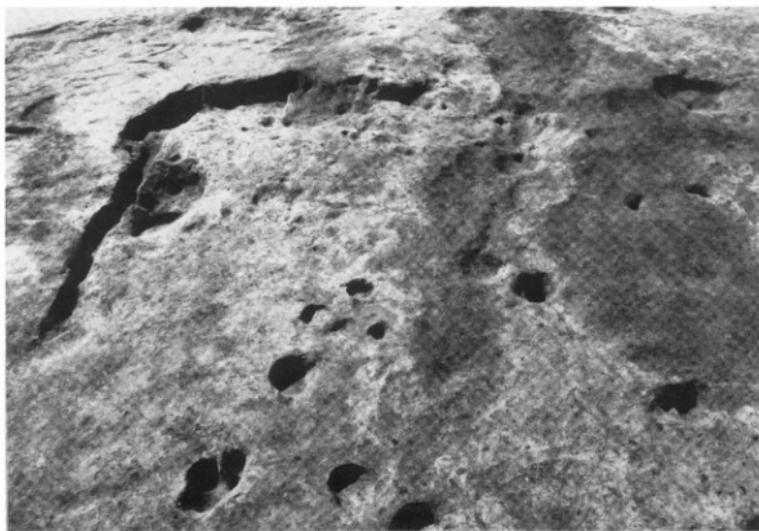


カマド遺物出土状況 (N→)

写真図版 5 SI02竪穴住居跡 (2)



SI03完掘 (SW→)

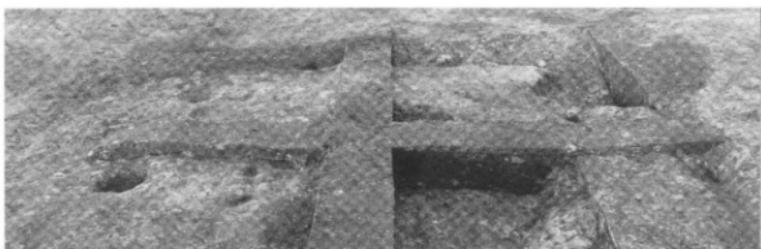


SK103完掘 (N→)

写真図版 6 SI03竪穴住居跡、SK103竪穴状遺構



壳掘 (NE→)

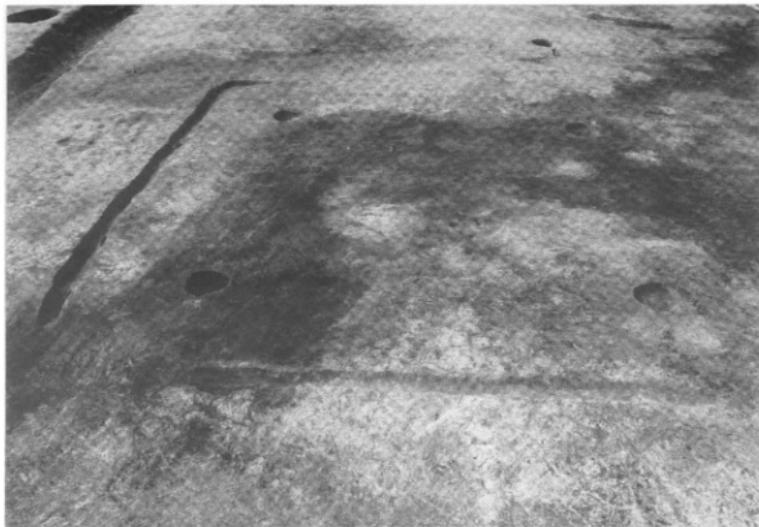


断面 W-E (S→)

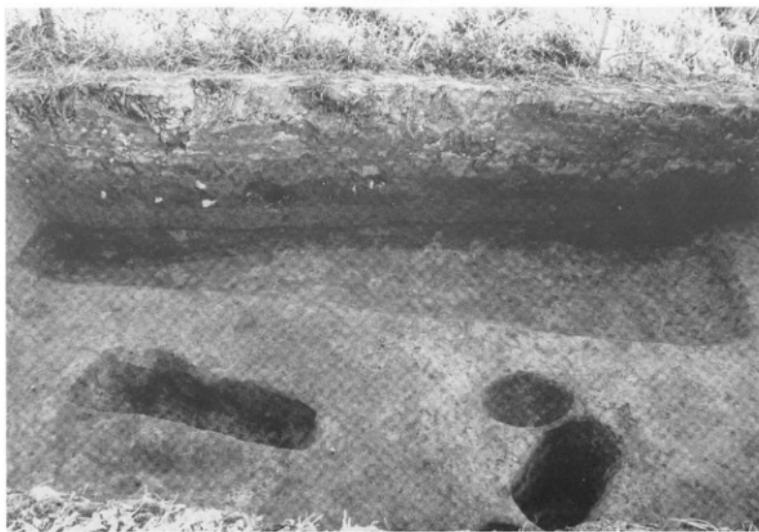


断面 N-S (W→)

写真図版 7 SKI01 竪穴状遺構

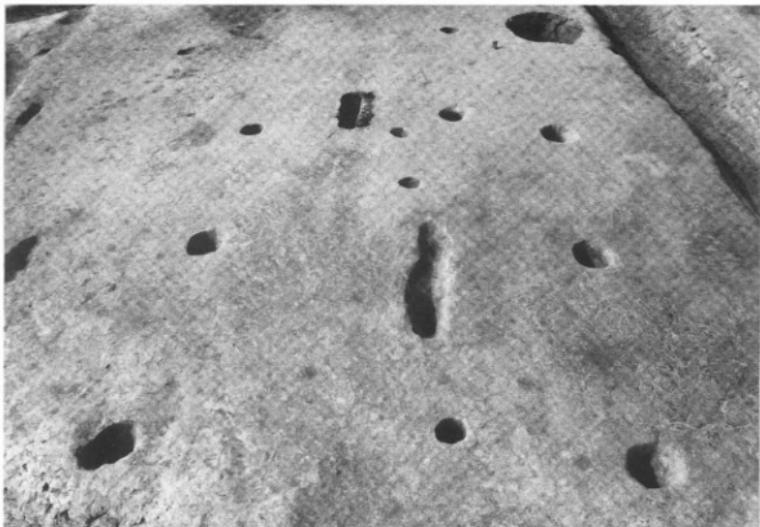


SKI05完掘 (N→)



SKI06完掘 (NW→)

写真図版 8 SKI05・06 竪穴状遺構

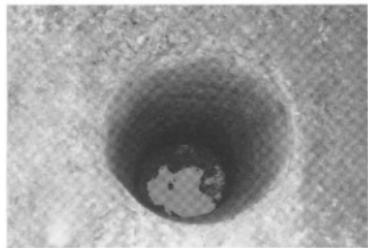


SB01完盤 (NE→)

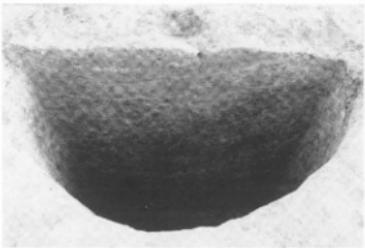


SB07完盤 (S→)

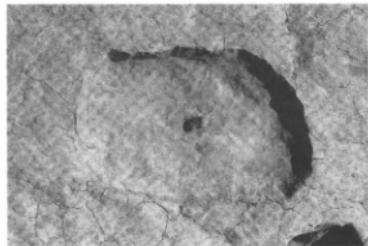
写真図版 9 SB01・07掘立柱建物跡



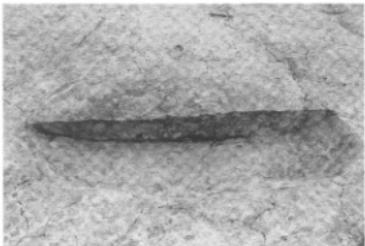
SE01完掘 (N→)



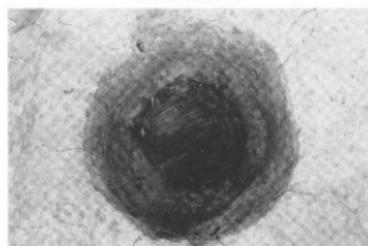
SE01断面 (SW→)



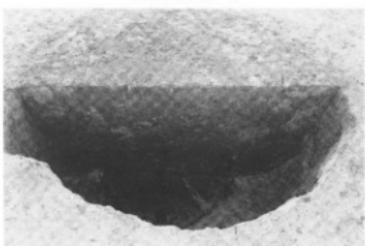
SK15完掘 (W→)



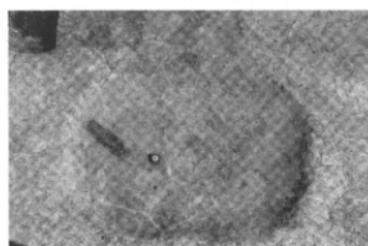
SK15断面 (S→)



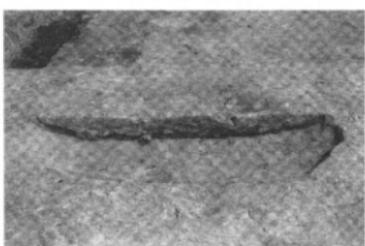
SK17完掘 (S→)



SK17断面 (W→)

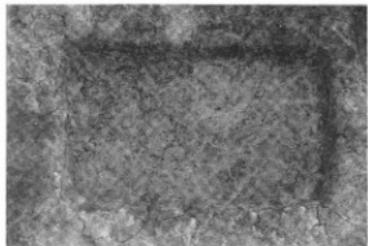


SK23完掘 (W→)

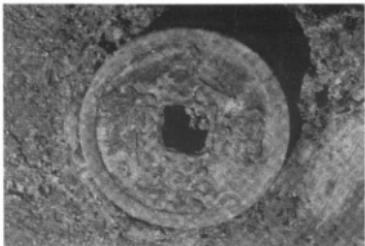


SK23断面 (S→)

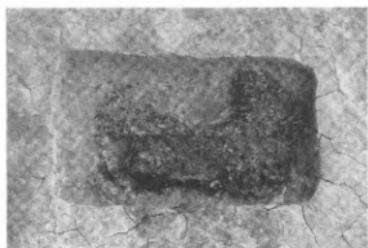
写真図版10 井戸、墓壙 (1)



SK22完掘 (SW→)



SK23遺物出土状況 (W→)



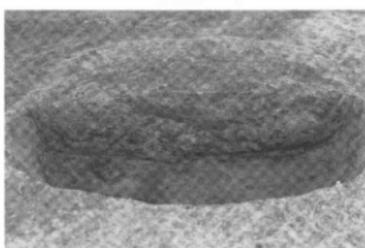
SK22完掘 (SW→)



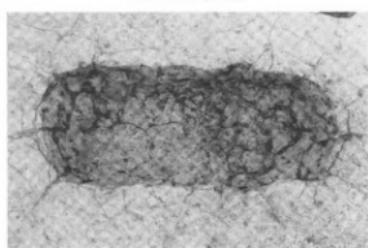
SK22断面 (SE→)



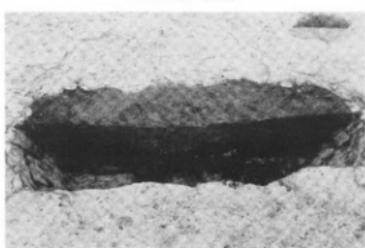
SK24完掘 (W→)



SK24断面 (S→)

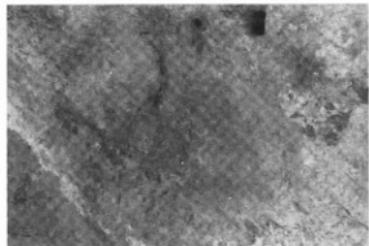


SK27完掘 (S→)

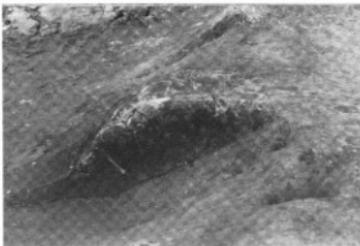


SK27断面 (E→)

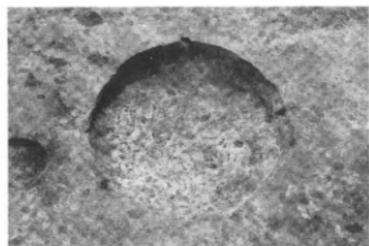
写真図版11 墓塚 (2)



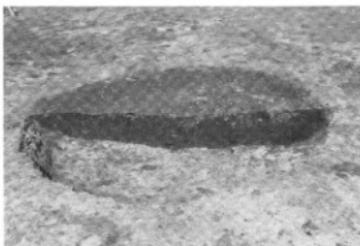
SK01完掘 (S→)



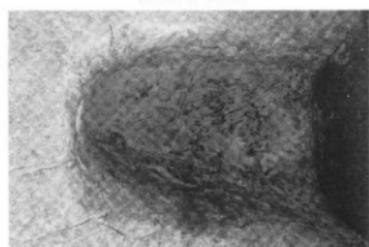
SK01断面 (W→)



SK07完掘 (N→)



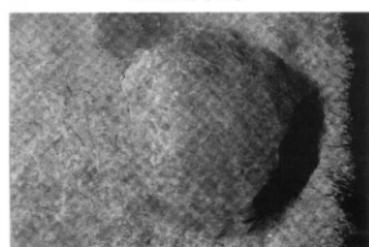
SK07断面 (E→)



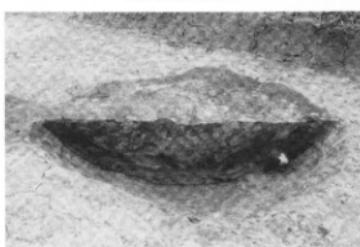
SK12完掘 (W→)



SK12断面 (W→)

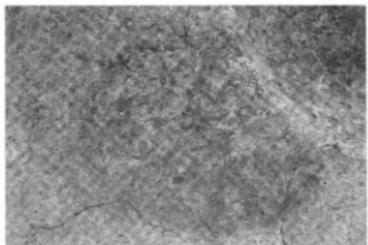


SK13完掘 (S→)

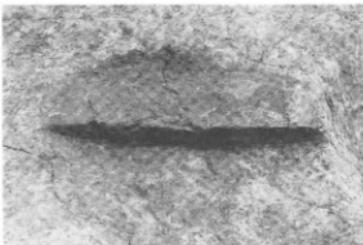


SK13断面 (W→)

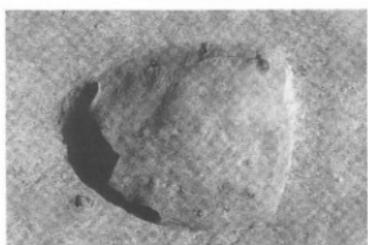
写真図版12 土坑 (1)



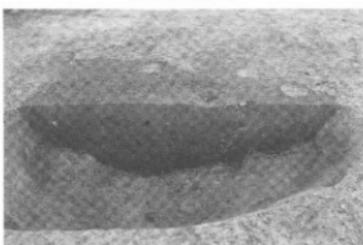
SK14完掘 (S→)



SK14断面 (W→)



SK19完掘 (E→)



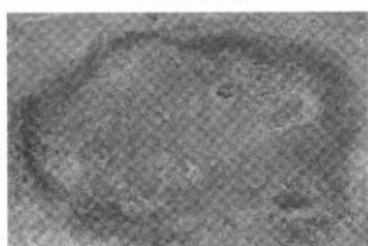
SK19断面 (W→)



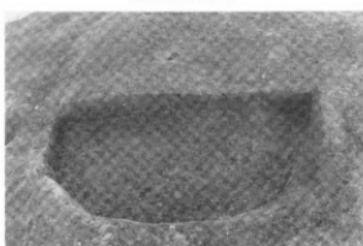
SK21完掘 (NW→)



SK21断面 (S→)

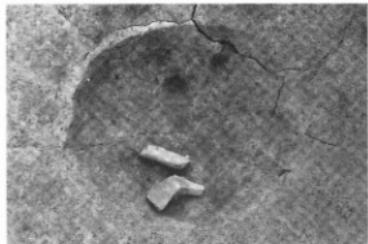


SK26完掘 (W→)

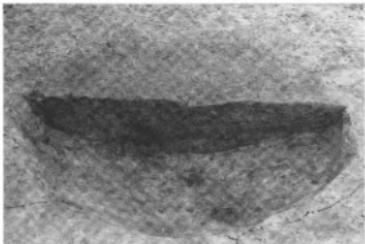


SK26断面 (W→)

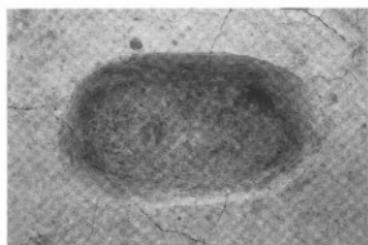
写真図版13 土坑 (2)



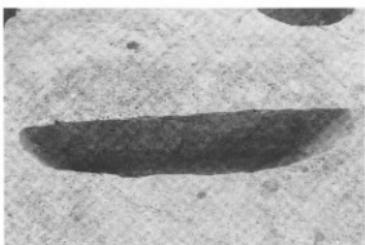
SK29完掘 (S→)



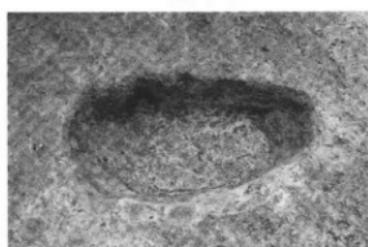
SK29断面 (NE→)



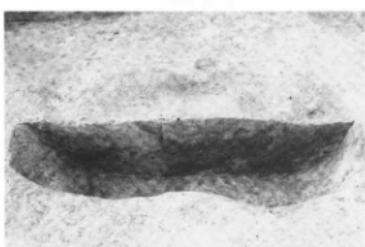
SK30完掘 (S→)



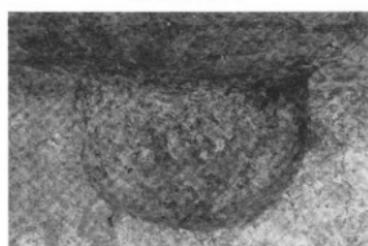
SK30断面 (S→)



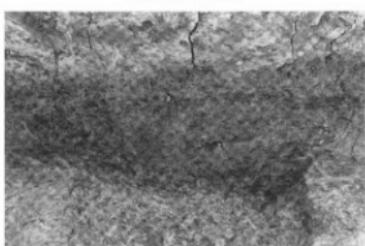
SK31完掘 (SW→)



SK31断面 (SE→)



SK33完掘 (SE→)

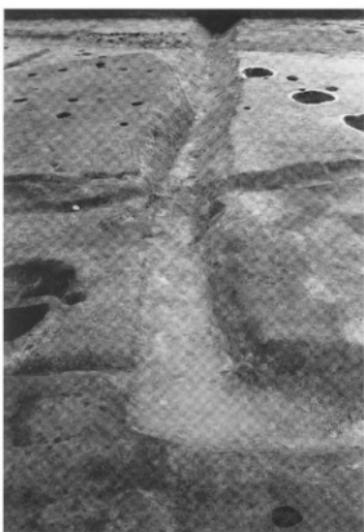


SK33断面 (SE→)

写真図版14 土坑 (3)



SD19完掘

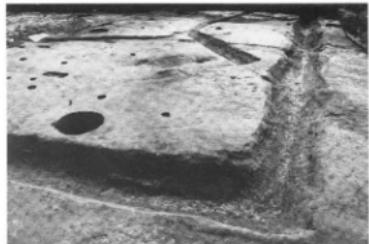


SD19北コーナ付近 東へ (W→)

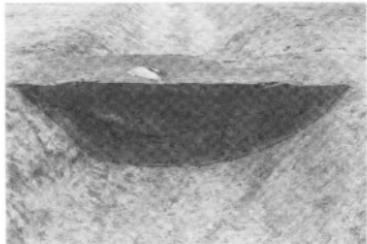


SD19北コーナ付近 西へ (N→)

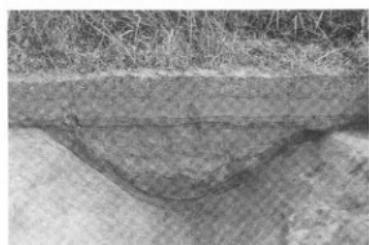
写真図版15 堀跡 (1)



SD19西コーン付近 南へ (SW→)



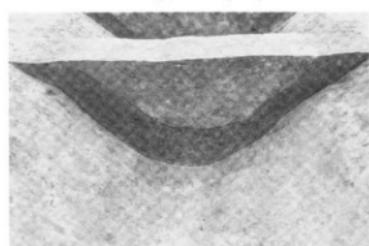
SD19断面 J - J' (S→)



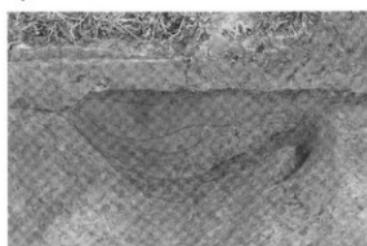
SD19断面 A - A' (W→)



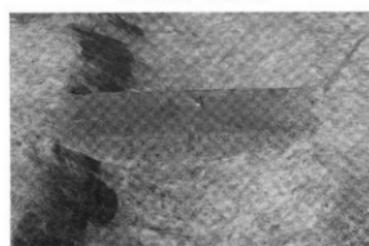
SD19断面 L - L' (W→)



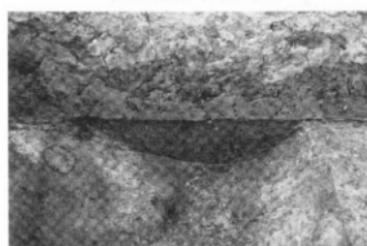
SD19断面 C - C' (W→)



SD19断面 N - N' (W→)

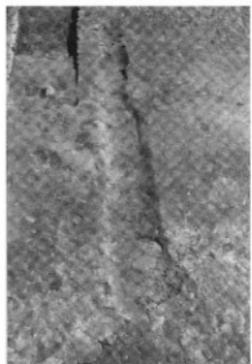


SD19断面 H - H' (S→)



SD19断面 O - O' (S→)

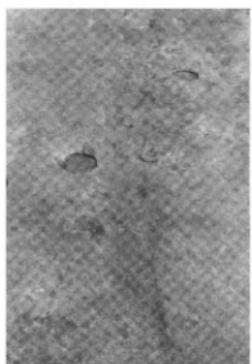
写真図版16 堤跡 (2)



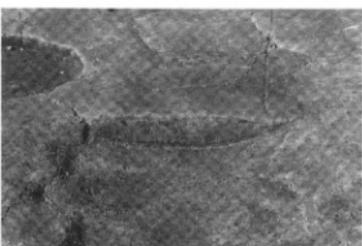
SD01完掘 (W→)



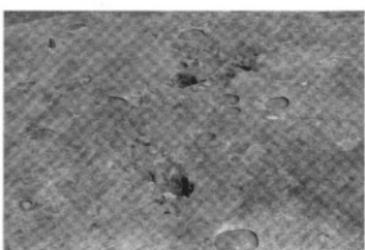
SD01断面 A - A' (S→)



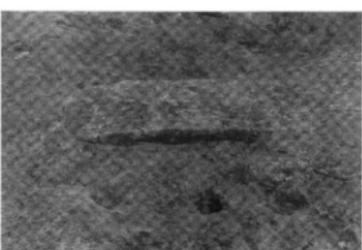
SD03完掘 (S→)



SD03断面 (N→)



SD04完掘 (NW→)



SD04断面 A - A' (S→)

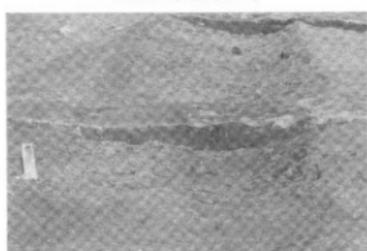
写真図版17 溝跡 (1)



SD02A・B遺物出土状況 (SW→)



SD02D遺物出土状況 (SW→)



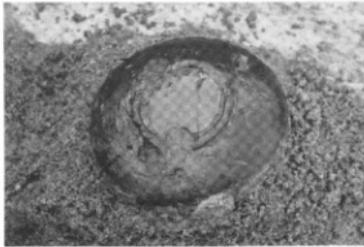
SD02A断面 (W→)



SD02D断面 B-B' (W→)

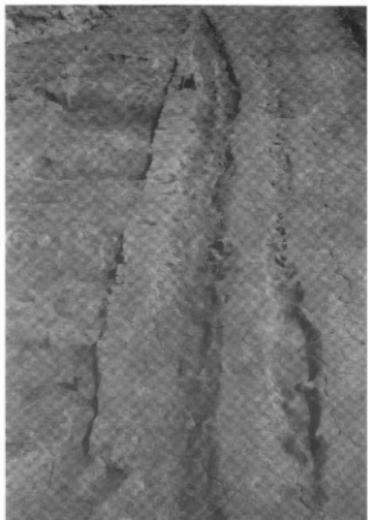


SD02A遺物出土状況 (S→)

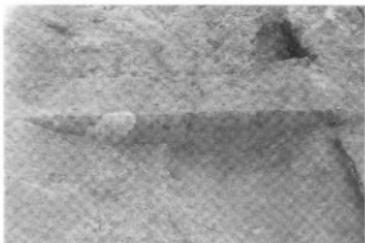


SD02D遺物出土状況 (E→)

写真図版18 溝跡 (2)



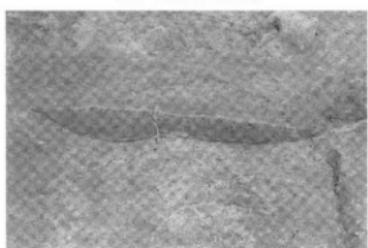
SD07・08完掘 (SW→)



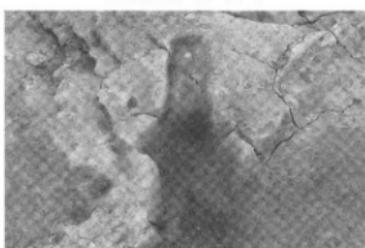
SD07B断面 (N→)



SD08断面 A - A' (S→)



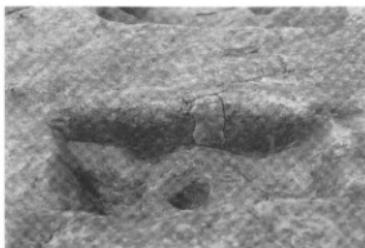
SD08断面 C - C' (S→)



SD15完掘 (S→)



SD14完掘 (S→)

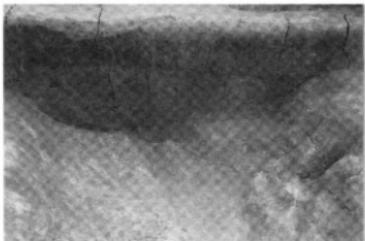


SD14断面 C - C' (W→)

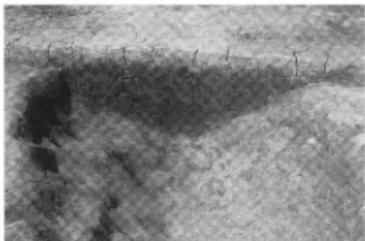
写真図版19 溝跡 (3)



SD10・10B・16完掘 (S→)



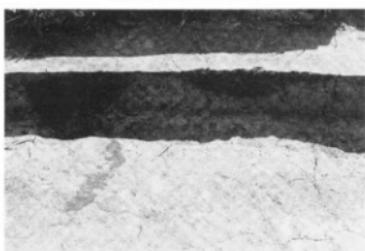
SD10断面 B - B' (W→)



SD10断面 C - C' (E→)



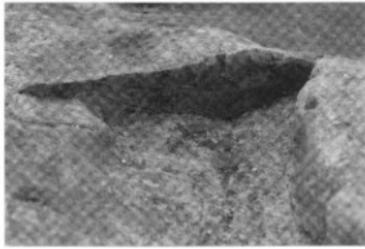
SD16断面 (W→)



SD10・16断面 E - E' (NE→)



SD10B完掘 (SW→)



SD10B断面 (S→)

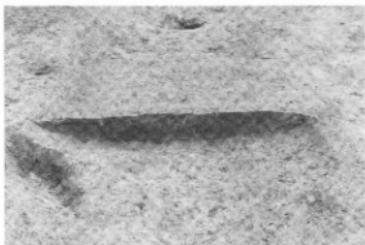
写真図版20 溝跡 (4)



SD18・20完掘 (S→)



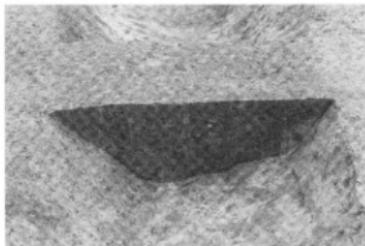
SD18断面A-A' (S→)



SD20断面B-B' (W→)



SD21完掘 (S→)



SD21断面A-A' (S→)

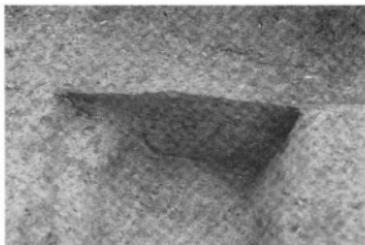


SD21断面C-C' (S→)

写真図版21 溝跡 (5)



SD23完掘 (SE→)



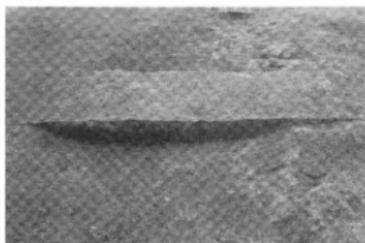
SD23断面 A - A' (S→)



SD24完掘 (S→)



SD24断面 A - A' (S→)



SD24断面 B - B' (S→)

写真図版22 溝跡 (6)



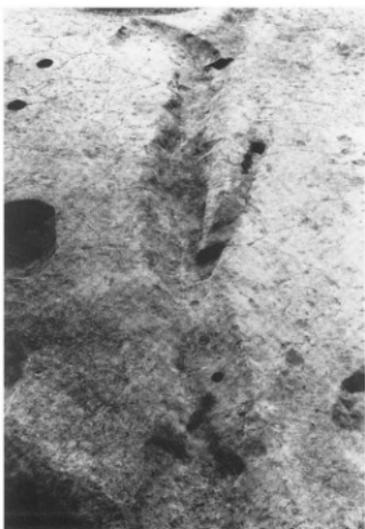
SD31完掘 (SW→)



SD31断面 A - A' (E→)



SD31断面 B - B' (W→)



SD32完掘 (NE→)

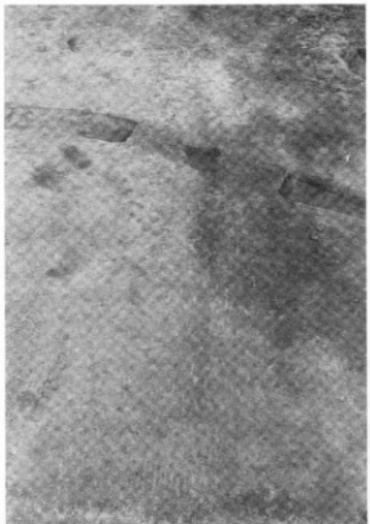


SD32断面 A - A' (S→)



SD32断面 B - B' (SW→)

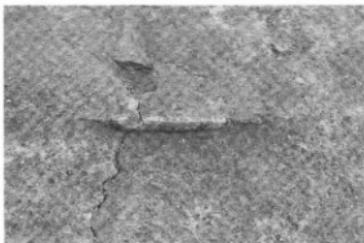
写真図版23 溝跡 (7)



SD34完掘 (S→)



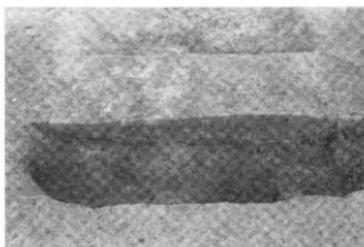
SD34断面 B - B' (S→)



SD34断面 A - A' (S→)



SD35完掘 (S→)



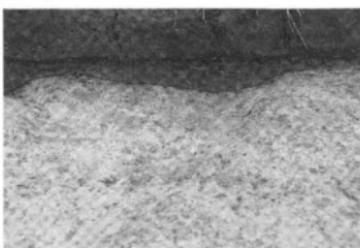
SD35断面 (N→)



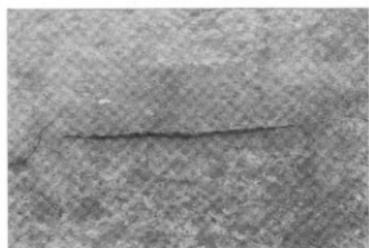
SD38・39壳掘 (N→)



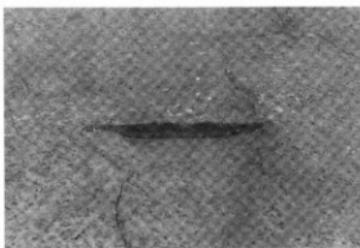
SD38断面B-B' (NE→)



SD39断面B-B' (NE→)



SD38断面A-A' (S→)



SD39断面A-A' (S→)

写真図版25 溝跡 (9)



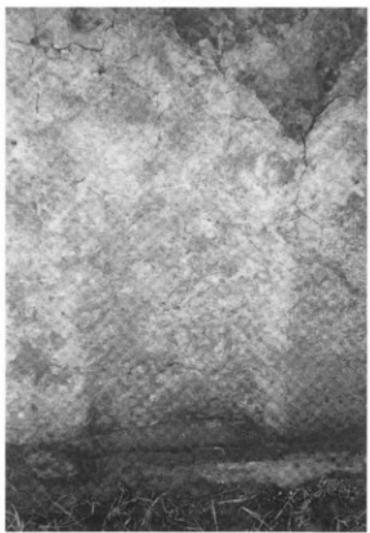
SD42完掘 (NE→)



SD42断面 A - A' (N→)



現地説明会風景

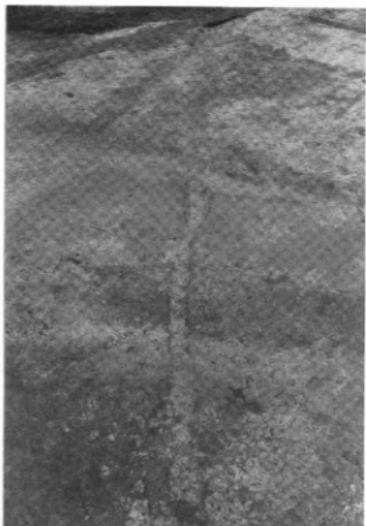


SD49完掘 (N→)



SD49断面 (N→)

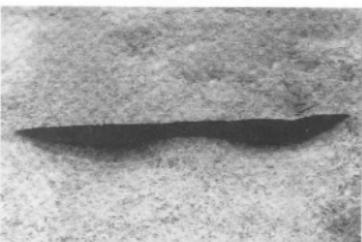
写真図版26 溝跡 (10)



SD43・44・45完掘 (E→)



SD43断面 B - B' (S→)



SD45 (左) SD44 (右) 断面 D - D' (W→)



SD47・48完掘 (W→)



SD47断面 (W→)



SD48断面 (W→)

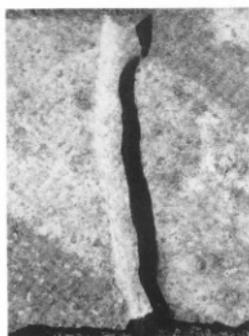
写真図版27 溝跡 (11)



C区完掘 (E→)



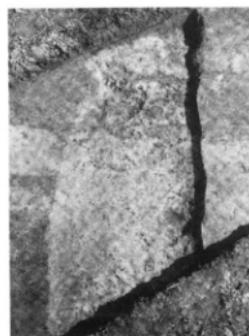
SD50完掘 (S→)



SD51完掘 (S→)



SD50断面 (S→)



SD52完掘 (S→)

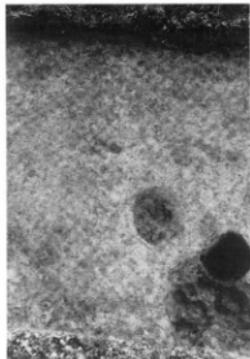


SD51断面 (S→)

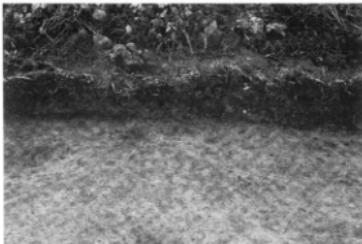


SD52断面 (S→)

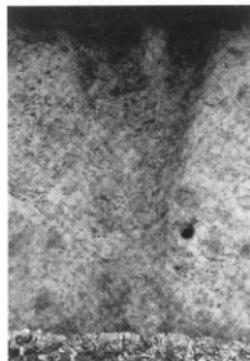
写真図版28 溝跡 (12)



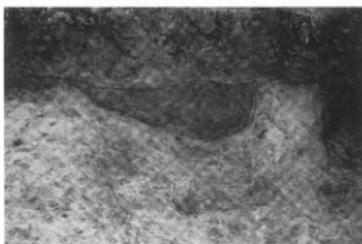
SD53A完掘 (NE→)



SD53断面 (NE→)



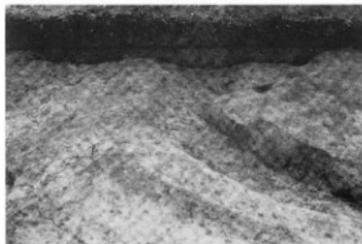
SD54A・B完掘 (NE→)



SD54A断面 (NE→)

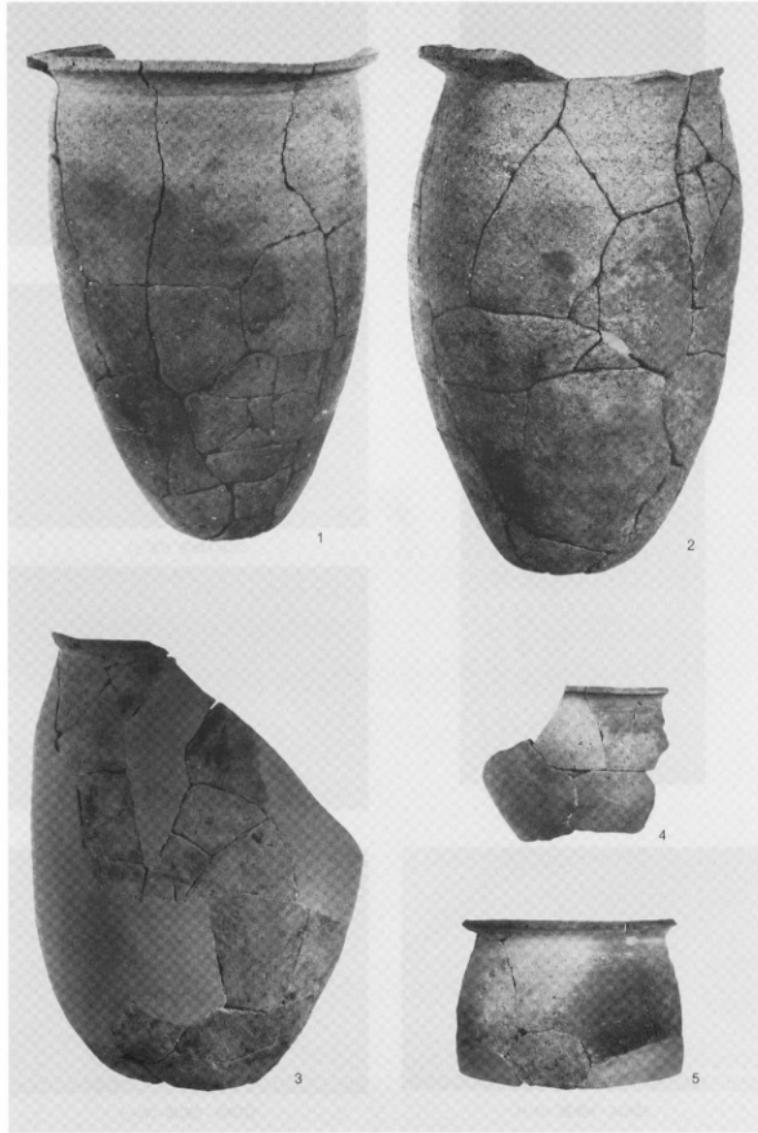


SD55A・B完掘 (N→)

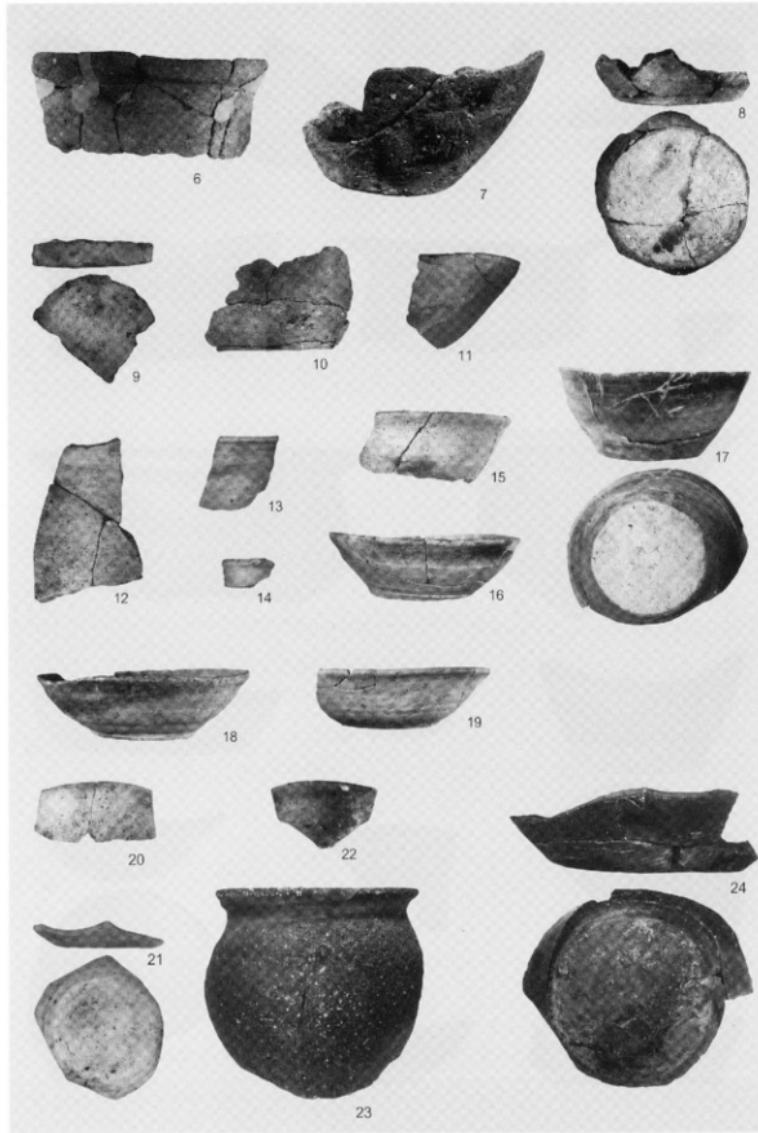


SD55A・B断面 (W→)

写真図版29 溝跡 (13)



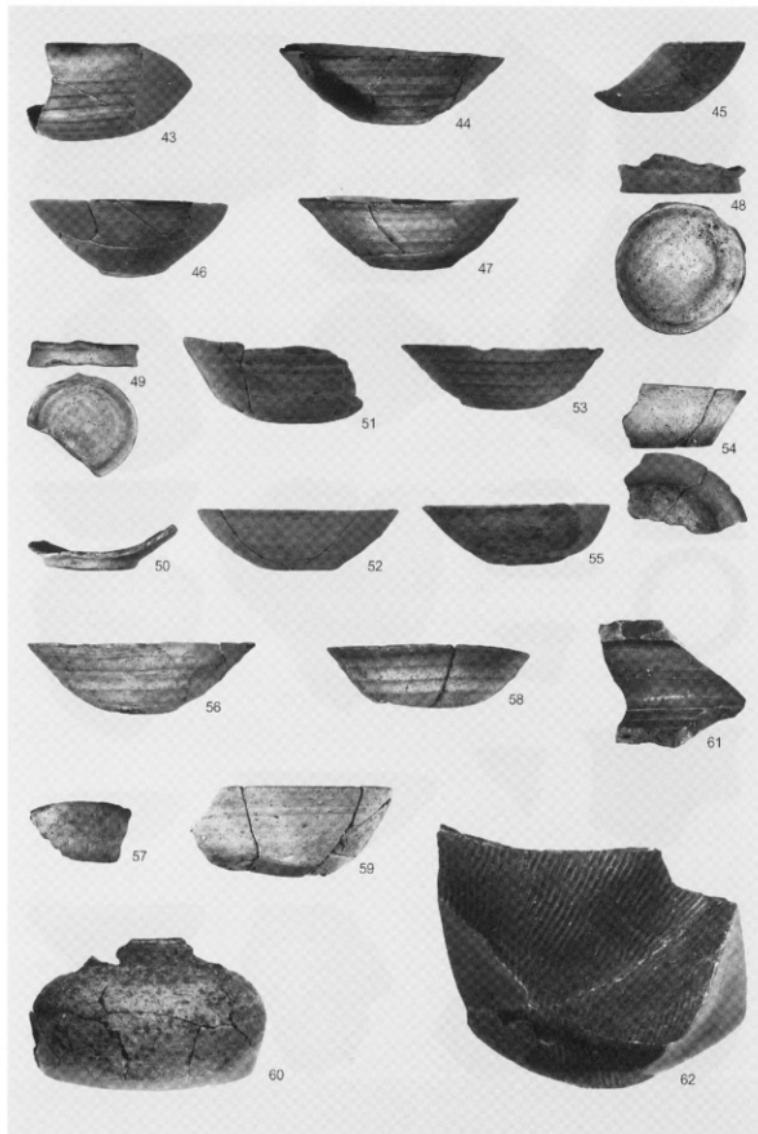
写真図版30 遺構内出土遺物（土器1）



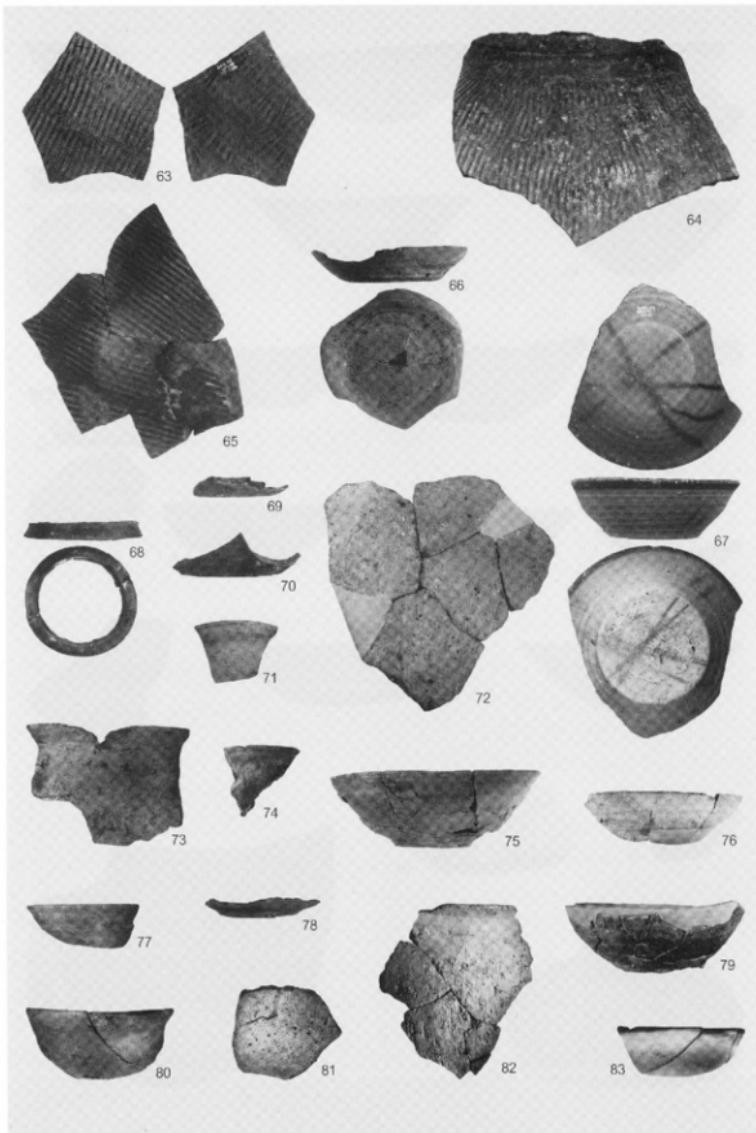
写真図版31 遺構内出土遺物（土器2）



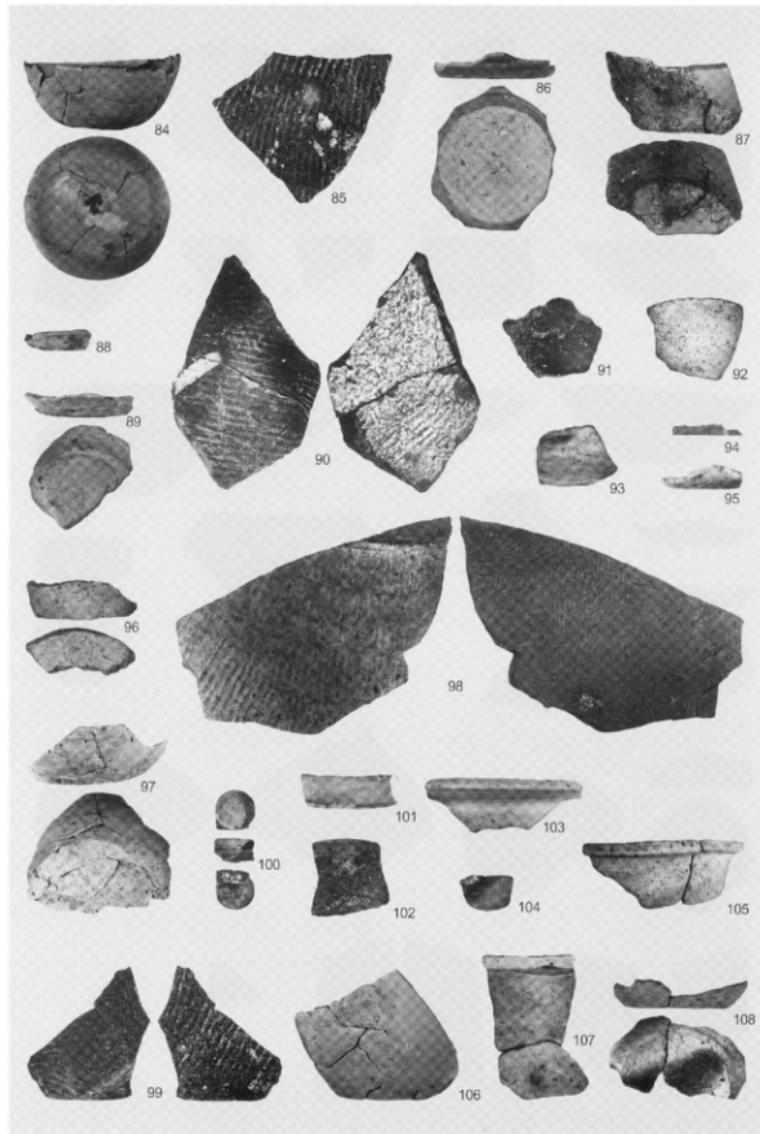
写真図版32 遺構内出土遺物（土器3）



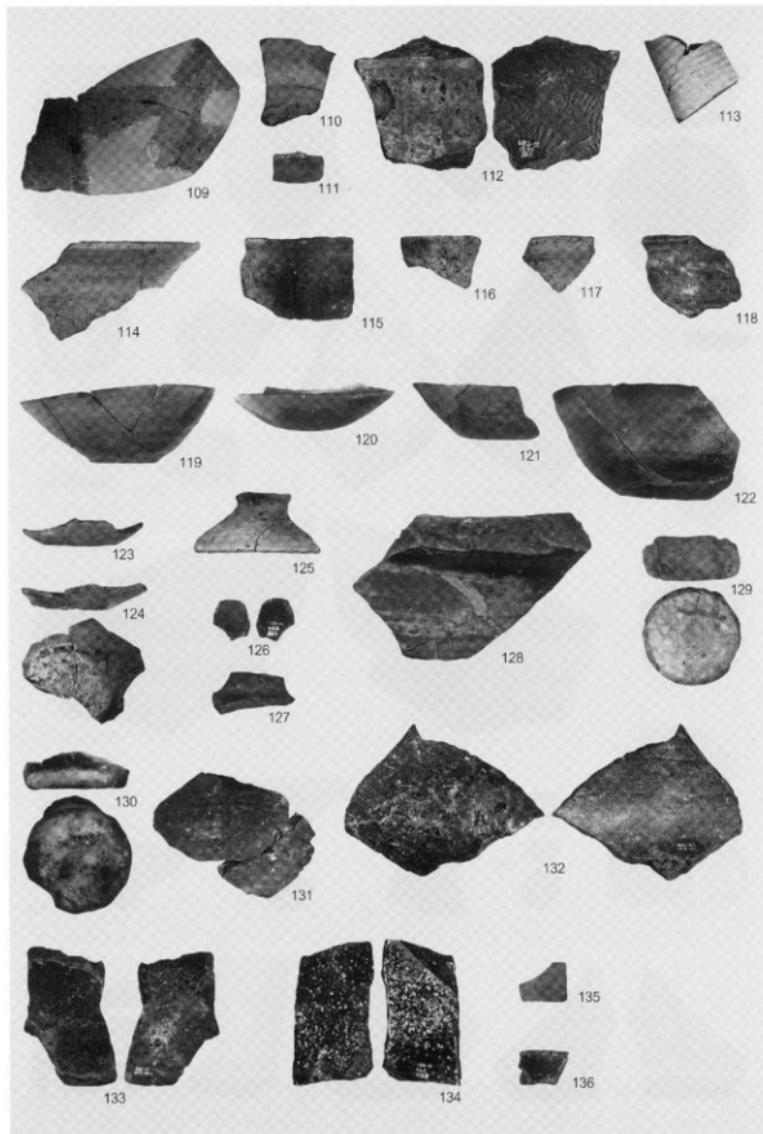
写真図版33 遺構内出土遺物（土器4）



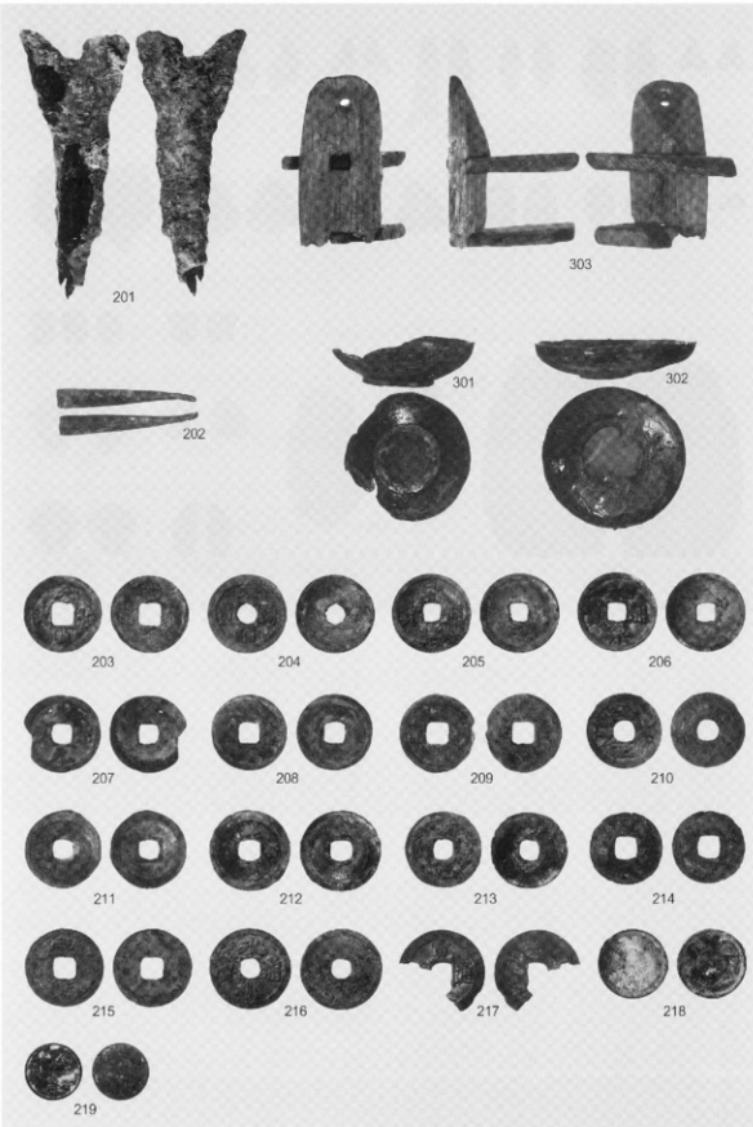
写真図版34 造構内出土遺物（土器5）



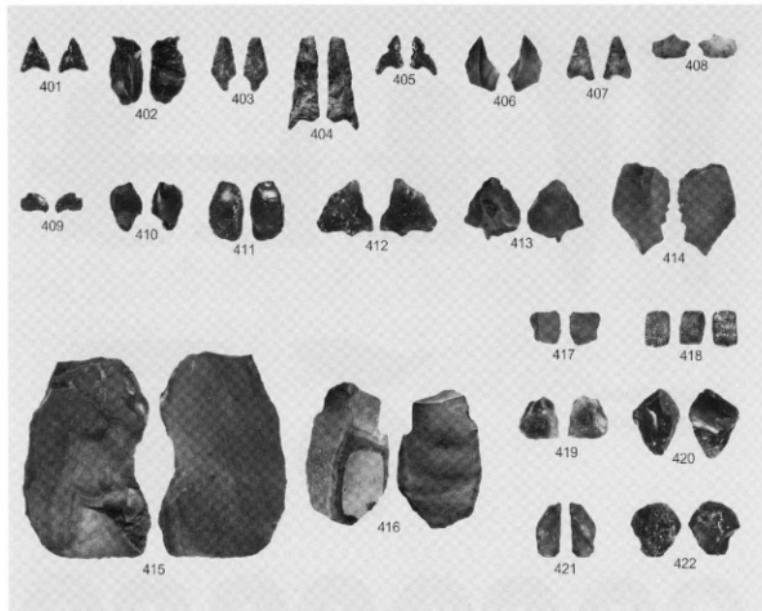
写真図版35 遺構内出土遺物（土器6）



写真図版36 遺構内出土遺物（土器7）



写真図版37 遺構内外出土遺物（木・金属製品）



写真図版38 遺構内外出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりがな	ごりんどういせきはくつちょうさほうこくしょ				
書名	五輪堂遺跡発掘調査報告書				
副書名	県営ほ場整備金流川地区事業関連遺跡発掘調査				
卷次					
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第447集				
編著者名	島原弘征・太田代一彦				
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター				
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001・9002				
発行年月日	西暦 2004年1月29日				
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。	。
五輪堂遺跡	岩手県花巻市	03401	OE38-2093	38度	141度
	町浦津字五			48分	~
	輪堂126番			20秒	2002.10.31
	地ほか				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五輪堂遺跡	集落跡	縄文時代		石器	
		平安時代	堅穴住居跡 堅穴状遺構 掘立柱建物跡	3棟 4棟 1棟	土師器(壺・甕) 須恵器(壺・甕) 鉄製品
		中世	堀跡	1条	常滑陶器片
		中世~近世	墓塚	6基	古銭(永承通宝他)
		時期不明	掘立柱建物跡 上坑 溝跡 井戸跡 柱穴状土坑	4棟 20基 50条 1基 202基	陶磁器破片 鉄製品 木製品(下駄・椀)

平成15年度 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村 弁	副所長	平野 允苗
〔管理課〕			
課長	喜澤 正吾	嘱託	高橋 照雄
課長補佐	山岸直美	"	湯沢 邦子
主査	中嶋賛一	"	沼田 テル子
主事	猪橋幸子	"	伊藤 澄子
〔調査第一課〕			
課長	佐々木 勝	文化財調査員	北村 忠昭
課長補佐	佐々木 清文	"	八木勝浩
文化財専門員	金子 昭彦	"	丸山浩
文化財調査員	古田 充	"	北田徳征
"	亀 大二郎	"	島原弘
"	野中真盛	期限付調査員	坂部恵造
"	新妻伸也	"	小林弘
"	阿部勝則	"	小針大志
"	杉沢昭太郎	"	藤原大輔
"	西澤正晴	"	太田代一彦
"	村木敬	"	新井田えり子
〔調査第二課〕			
課長	二浦 謙一	文化財調査員	星 雅之
課長補佐	中山川重紀	"	佐藤淳一
"	高橋義介	"	星 李文
文化財専門員	小山内透	"	溜 浩二郎
"	金子佐知子	"	木本多幸一郎
"	濱田宏	"	丸山正和
文化財調査員	赤石登澄	"	福島和美
"	阿部眞澄	"	米田寛
"	水面上博	"	須川拓吉
"	阿部憲淳	"	川又村
"	早坂淳	"	中村絵淳
"	小松則也	"	(村上) 拓
"	阿部徳幸	"	斎藤麻紀子
"	窓岩仲行	"	石崎高臣
"	亀澤盛	"	古田里和
"	坂一重	"	立花裕
"	鈴木裕明	"	江藤敦
"	林勲	"	駒木野智寛
"	阿部孝明	"	
"	羽柴直人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第447集

五輪堂遺跡発掘調査報告書

県営ほ場整備全流域地区工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成16年1月22日

発行 平成16年1月29日

発 行  岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下巣岡11地割185番地
電 話 (019) 638-9001
F A X (019) 638-8563

印 刷  博光出版
〒020-0122 盛岡市みたけ5丁目8番43号
電 話 (019) 641-0671

